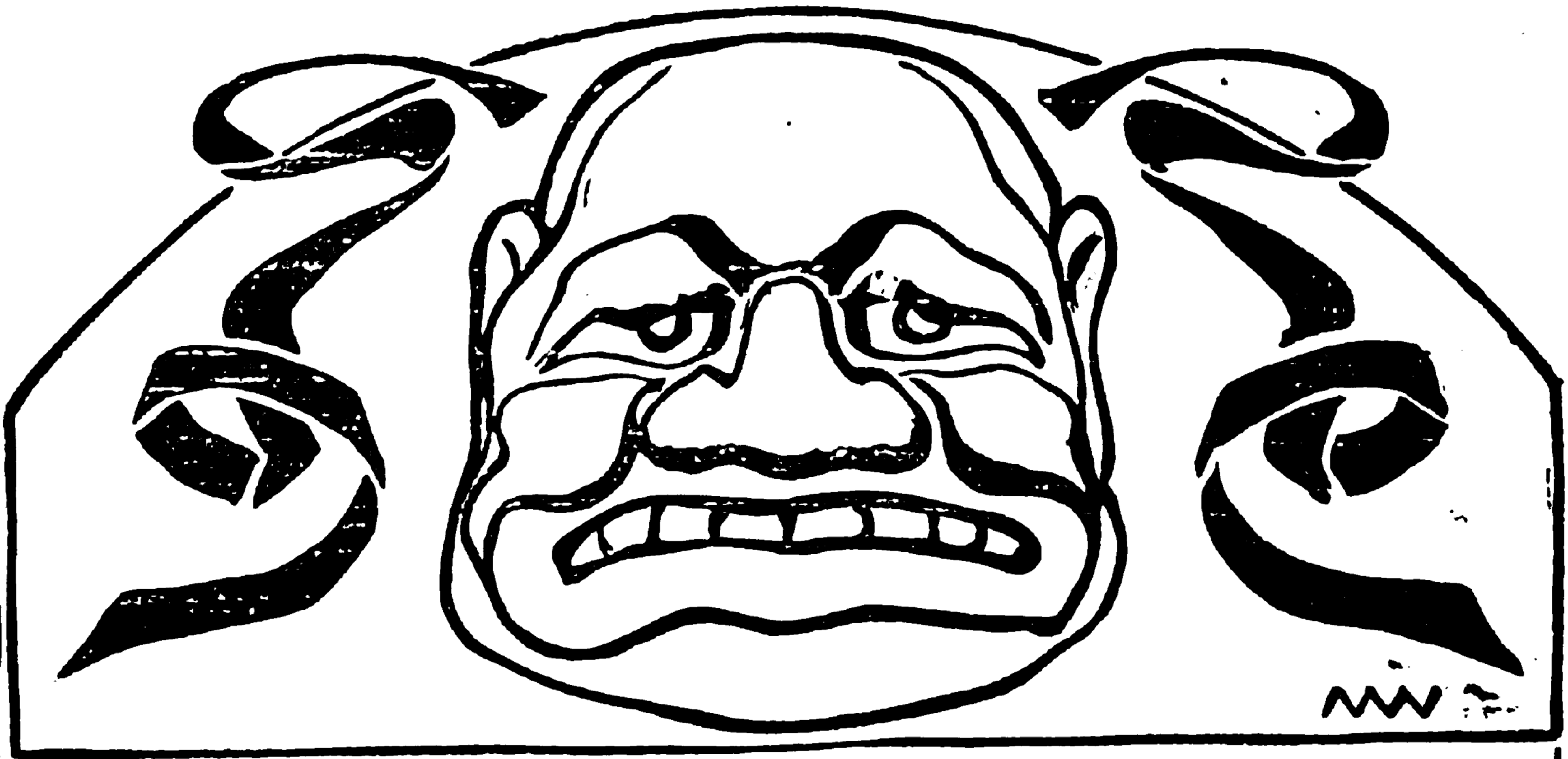

クラブ
歯磨は
歯牙に卓効を
有する原料のみを
合理的に配合せる
ものにして醫學上
他に比類なき最新最良の
歯磨なり!!!



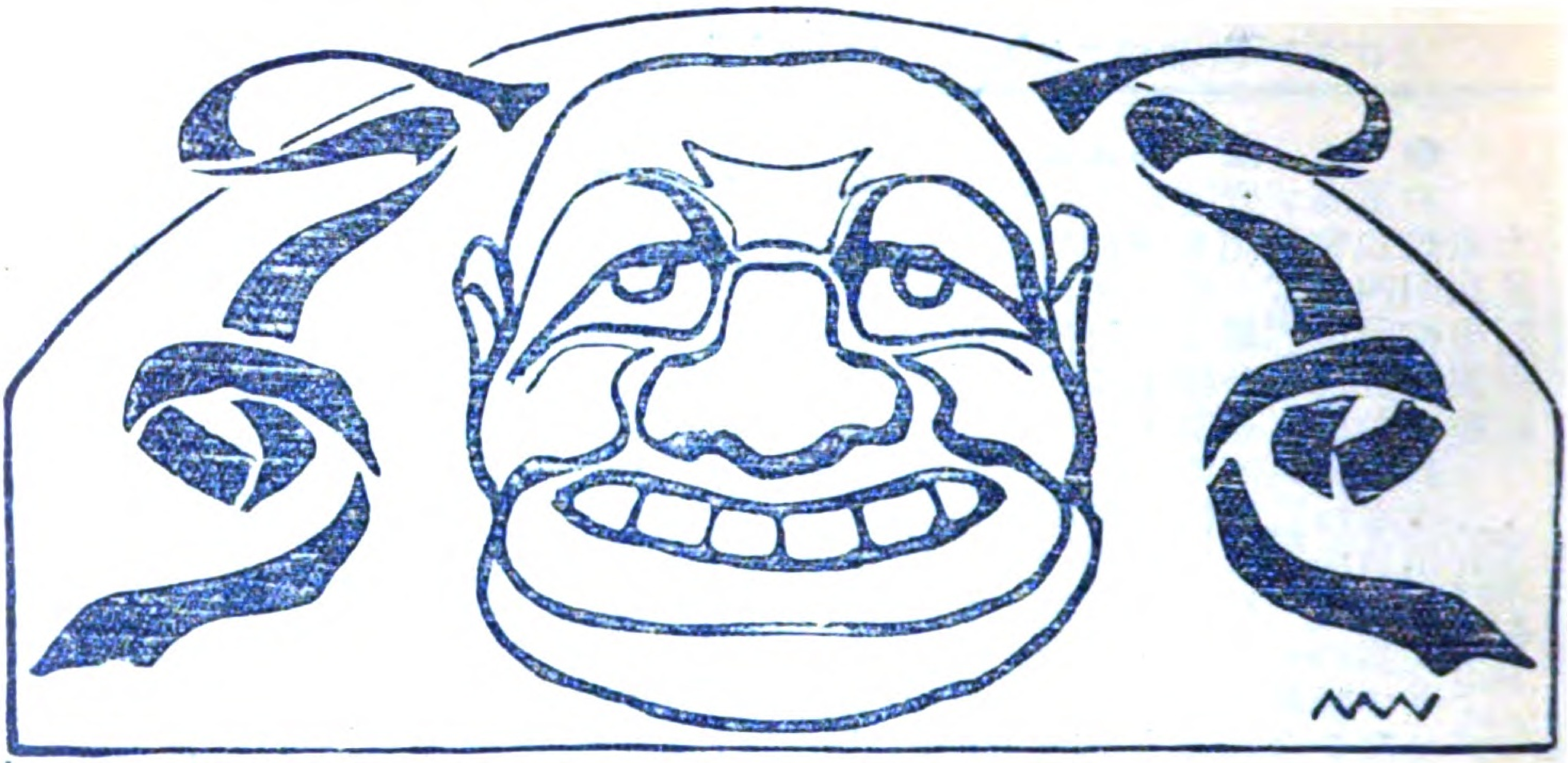
中央公論第廿五年第八號目次

▲公論

日露親和の影響を測度す
米國海軍の缺點……社論……一
我邦經濟の前途……法學博士 戸田海市……一七
一種の社會問題……法學博士 河津暹……二五
日露戰爭以後に於ける列強の關係……法學博士 立作太郎……三〇

▲說苑

倫敦寫生通信……大谷繞石……三九
メンタル、ポッシビリチー……文學博士 福來友吉……五三
熱帶地方の建築……工學博士 伊東忠太……六八
ワイマールの追懷……文學博士 桑木嚴翼……七〇
換氣法……工學博士 中村達太郎……七六
支那の扇子の話……玉川堂主人……七八



東西の宗教畫歷史畫……文學博士 黒板勝美……七九

龜井警視總監論
- 靜觀居主人……八八
- 松井柏軒……八九
- ○○生……九一
- 田川大吉郎……九二
- △△生……九五
- 城北閑人……九六

▲小説

舊痕……波山不規夫……九七

鈴蟲……上司小劍……一六三

▲詞藻

和歌……尾上柴舟選……一七六

俳句……高田蝶衣選……一八二

▲評論

內外近事評論廿三件……XY.懷沙隱客……一八五

新刊批評……一九四

口繪「牧場の朝」……イーンド、キング筆……

Morning in the Meadows.



By Yeend King, V.P.R.I.

中央公論



第二十五年
第八號
第二百五十七號

日露親和の影響を測度す

（一）

所謂日露協約なるものは、七月四日露都に於て調印せられ、同じく十三日東京ペテルブルグの兩都に於て公表せられたり、抑もポーツマスに於ける小村ウイッテ條約（明治三十八年九月）が日露大戰の局を收めて、滿洲に於ける兩國利權の彊畛を分畫するや、當時日本の激越なる輿論は狂せるが如く之を非とし、後に至て此の條約を承認するの外なきを悟れりと雖も、一時は實に燒擊の慘禍をも現出せしと今尚ほ世上の記憶に新たなる所なるべし、露國に至てはウイッテ伯外交上の勝利者たりと言はれしに拘らず尙ほ此の條約に不平のもの多く、殊に敗戰者の常として、復讎を思ふもの啻だに軍人社會のみに限らざ

りき、去れば媾和條約は休戰條約のみ、一時握手したるのみ、間もなく大戰を再びすべしと稱せられ、獨逸の或る新聞紙の如きは、日本が朝鮮を基點として大に北進せんとする形勢と、露國經統の大方針たる南下とは到底撞突せざるを得ず、日露兩國は天然に仇敵の地位に立つとまで評論したりき

斯くして日露再戰說は世界の危險となり、明識聰達なる兩國の識者の外は、倘ほ此の再戰說の惡夢より醒め得ず、口には再戰の條理なきを唱へながらも、腦裏の何の處にか再戰の竟に免かれがたきを戰慄するの狀態にして、現に此の影響の經濟界を不振ならしむる一因たりしこともありき、玆に於てか兩國の識者は、此の危險を一掃するの得策なるを思惟し、先づ明治四十年七月卅日を以て、左記第一の協約を締結したりき

日本國皇帝陛下の政府及び全露西亞國皇帝の政府は幸に日本及び露西亞國間に回復せられたる平和及び善隣の關係を鞏固ならしめんことを希望し且つ將來兩帝國の關係に於ける一切の誤解の原因を除去せんことを欲し左の條款を協定せり

第一條　締約の一方は他の一方の現在に於ける領土保全を尊重することを約す又締約國間に謄本を交換せる締約國と清國との現行諸條約及び契約より生ずる一切の權利（但し機會均等主義に反せざる權利に限る）並に一千九百五年九月五日即露曆八月廿三日ポーツマスに於て調印せられたる條約及び日本國と露西亞國との間に締結せられたる諸特殊條約より生ずる一切の權利は互に之を尊重することを約す

第二條　兩締約國は清帝國の獨立及び領土保全並に同國に於ける列國商工業の機會均等主義を承認し且つ自國の執り得べき一切の平和的手段に依り現狀の存續及び前記主義の確立を擁護支持することを約す

右證據として下名は各其の政府より正當の委任を受け之に記名調印するものなり

明治四十年七月三十日即露曆一千九百七年七月十七日聖彼得斯堡に於て本書を作る

本野一郎

イズヴォルスキー

此の協約は極めて平穩なれども、亦餘りに漠然として澹泊に過ぐる形迹なきに非ず、現に兩國所有の鐵道は滿州に於て圓滑に聯絡せず、倫敦及び巴里に於けるクック社の如き、歐洲より哈爾賓間並びに長春大連間の切符を發賣しながら、往々にして哈爾賓長春間の切符を賣らざるがために、完全に歐米間の通し切符を手にし得ざるとあり、歐洲より來るに、哈爾賓以南線（即ち長春大連まで）に乘換ゆるため、約二十時間近く空しく待たざるを得ざるとあり、近時旅客聯絡の協定整へりといふも尙ほ斯の如し、未だ貨物聯絡の協定成立せざるに於て、其の不便推知するに足る、此の一事實は東淸鐵道と南滿州鐵道と恰かも反目の形迹に見へ、隨つて外間より日露兩國未だ全く親和せずと揣摩する者を絕つに至らず、淸國又は他の第三者に於て、往々間に乘じて成すあらんと欲する無きにあらず、而して再開戰の危虞全く掃拭せらるゝに至らず

日本政事家中之を憂慮するもの少からず、彼の伊藤公の如きは、曾て日露同盟を策せし程の人ゆゑ、此の情勢を掛念すると頗ぶる深く、露國大藏大臣コヽツオフ氏の東部西伯利亞を巡視するに會し、之を哈爾賓に迎へて親交を重ねんとを期し、自から同地に至つて意外にも刺客の兇手に斃れたりき、吾人の領解する所によれば、當時我が廟議は、露國と緊密に握手し、之に由て一切の誤解を渙然氷釋せしめ、且つ鐵道の聯絡を圓滑ならしめて以て世界の交通に貢献せんと期し、臨機適應の措置に出でんとを伊藤公に一任したりしが如し、伊藤公は常に露國に親まんとして而して竟に緣なかりし乎、曩の日露同盟は其の行歐の途中に於て日英同盟締結のため放棄せられ、最後の日露親和策は、兇徒の一撃に幽明境を異にし、公の志空しく地下に齎されしのみ、然れども公の志は兩國政事家をして益々接近せしめたる折しも、突如として米國々務卿ノックス氏の滿州に於ける鐵道を擧げて中立とするの提議現出するに及び、兩國政府は玆に他をして間に乘ずべき機會なからしめんと欲し、竟に今回の第二協約を締結するに至りし也

吾人は之を第二の協約といふ、其の調印者と調印地と相同じきのみならず、後者は實に前者の補足なれば也、試みに前記第一の協約と左記の第二協約とを比照し視よ

日本帝國政府及び露西亞帝國政府は千九百七年七月三十日即ち露曆十七日を以て締結したる協約の定むる主義を誠實に保持し且つ極東に於ける平和の確保の爲め該協約の効果を擴張せんとを希望し左の條款を以て該協約を補成するとを協定せり

第一條　兩締約國は列國の交通を便易ならしめ其の商業を發達せしむる目的に依り滿州に於ける各自鐵道の改善及び該鐵道の聯絡業務整備の爲め相互に友好的協力を與ふると並に此の目的の遂行に有害なる一切の競爭を爲さゞることを約す

第二條　兩締約國は孰れも今日に至る迄の日本國と露西亞國との間又は兩國と淸國との間に締結せられたる一切の條約又は其の他の約定に基く滿州の現狀を維持尊重することを約す

前記諸條約の謄本は日本國と露西亞國との間に交換を了せり

第三條　前記現狀を侵迫すべき性質の何等事件發生することあるときは兩締約國は該現狀を維持するに必要と認むる措置に付協定せんが爲め相互に隨時商議を爲すべし

右證據として下名は各其の政府より正當の委任を受け本協約に調印するものなり

明治四十三年七月四日即ち露曆千九百十年六月二十一日(七月四日)聖彼得堡に於て本書を作る

本野一郎

イズヴォルスキー

右協約第一條に、鐵道の聯絡を圓滑にし、且つ有害なる競爭を避けんとを協定したるは、最も適實なる措置にして、兩國の親善を現實にし、由て以て一切の危虞を掃拭する効果の著大なる、幾んど意料の外にあるべし、而して其の第三條に於て、現狀を攪亂せんとするものに對し兩國一致の行動に出てんとを表示したるに就て、殊に世界に大なる反響を生ずるに至りしは、最も注目すべき點なりとす

（二）

日露協約の結果、世界の享くる交通上の便益は至大なるべし、日本歐洲間を往返する旅客は、敦賀浦鹽斯德に由て西伯利亞線を採らずんば、必らず當さに馬關釜山より京義線安奉線を經て、長春哈爾賓に出て丶以て西伯利亞線に由ると爲るべく、貨物も亦然るべし、香港以北の淸國歐洲間、並びに印度洋紅海の暑熱を厭ふ南洋群島と歐洲間に往返する旅客は又大連長春哈爾賓線及び西伯利亞線に由るや必然也、而して其の距離の短縮と賃錢の低廉なるとより生ずる効果の大なると何ぞ多言を要せんや、之に由て歐亞兩國の文化に著明なる好影響ある亦論莫きのみ

思ふに我が大連（若くば旅順口）の繁榮する如く、哈爾賓は著るしく繁華を增加すべし、東部西伯利亞は由來主として上海香港方面より歐洲の風化を受けたりき、浦鹽斯德に由る方寧ろ歐洲露西亞よりするに比して便なれば也、今や此の徑路が大連長春線に移るべきや否やは疑問にして、隨つて浦鹽斯德が從前の位地を支持すべきや否やも問題なりと雖も、哈爾賓が何れの方面よりするも必由の衝路に當るがため、非常に繁榮せんとは明白なりとす、彼の浦鹽斯德大連の競爭は、寧ろ移りて大連哈爾賓の競爭となるべきか、兩地共に相俟ち相扶けて繁榮せんと必然也、日露兩國の當局、殊に露國の當局は飜然として玆に悟る所ありしなるべし、乃ち東淸、南滿州兩鐵道との連絡を圓滑にするは、西伯利亞鐵道をして眞に世界鐵道の大幹線たらしむる所以にして、世界を擧げて其の慶を享くべく、殊に最も利益するは西伯利亞の主公たる露國とす、故に第二協約が主として鐵道の聯絡に重きを置けるは、單に日露兩國の幸

慶のみならざる也

殊に此の協約に由て、日露兩國とも、少くも滿州方面に於ける戒心を緩ふするとを得べし、然り、兩國相親めば親む程、單に第三者の窺窬に備ふる外、全然兵備を撤するを得べし、露國は曾て此の方面に備ふるがため、機會だにあらば百幾十萬の大兵を滿洲に進出せしむるの準備を弛むるを得ずして、一念多くは東方のみを顧慮し、曾て他に及ぶ能はざりしが爲め、歐洲方面に於ける威重の著るしく減却するを如何ともする能はざりき、獨逸の後援を有する墺地利が近時大に手をバルカン方面に伸べ、延きて英佛人の所謂近東問題を紛糾ならしめたる觀あるは、畢竟背面よりする露國の威壓の足らざる影響ならずや、對島沖に於ける海軍全滅のためといふと勿れ、又南滿州方面に於て日本軍に擊退せられたるがためといふと勿れ、歐洲方面に於ける露國の威重の減ぜしは、其の強大なる陸軍の大部分をして、常に日本方面の外に向ふ能はざらしむる結果ならずや、今や協約成立して、其の陸軍亦翻然として歐洲方面に向ひ、事あらば則ち步武堂々として進出せんとす、歐洲列國豈聳然たらざるを得んや、區々たる此の協約、露國をして歐洲に重からしめ、外交其の他百般の事總て十年前の優秀なる地位に復せしむ、露國のためには實に幸ひなりと謂べし、近く五七年來露國を輕視せる獨墺諸國が日露の握手を悅ばず、第二協約を快しとせざる洵に偶然ならざるには非ずや

（三）

日本も亦協約に由て、等しく北顧の憂を減ずるを得て、力を他の方面に伸すを得べし、少くも海軍擴

張に鋭意する餘裕を有するに至るべし

我が陸軍は必らずしも露國に備ふるのみを目的とせず、然かも戰時百萬以上の大兵を完全に出征せしめ得んと計りしは、主として露國の復讐戰に對應するが爲めならずや、吾人は支那の分割に出て東洋の大禍亂を來さんことを惧るゝこと深きが故に、換言すれば、淸國の領土を保全し、東亞の平和を支持する職分あるが故に、尙ほ現時の陸軍力を主持して、聊かたりとも之を減するを得ずと做し、彼の陸軍縮少論に反對すと雖も、海軍擴張論には則ち絶對に賛成するを躊躇せず、明白にいへば、陸軍の現狀を維持して而して一方海軍を擴張せんこと、是れ吾人の主張とす、露國が動もすれば復讐戰を爲さんとする掛念ある時は、吾人も亦勢ひ陸軍の擴張を避けがたしとす、露國が今や百餘萬の精鋭を東亞に進出せしめ得ると明確疑ふ可らざれば也、幸ひに第二協約に由て彼れと對應準備の必要なく、主として海軍擴張のみに力を用ゆるを得るに至りしは、實に大なる幸ひにあらずして何ぞ

吾人が海軍擴張の必要を感ぜしは、北守南進の大方針より出づ、我が利權を伸張すべき眞の方面は、全く太平洋に存すとの信念より出づ

獨逸の一新聞紙は、米國を目して『日本の最も恐るべき競爭者』と稱したりき、然り、我が同盟國が今や獨逸を以て最も强勁なる競爭者と爲すが如く、吾人は彼の米國を以て最も畏るべき競爭者と爲さゞるを得ざる也

徒らに僞善者の如く誠しやかなる諛言を陳列するを休めよ、米國彼れ自身は實に太平洋を以て自家の

庭池と爲さんと欲し、而して日本を以て最も目障りとなる競爭者と信じ做すにあらずや、其の海軍を擴張するにも、明らかに日米開戰論を絶叫しつゝあるに非ずや、吾人は素より日米開戰の愚なるを知る、又百方して開戰を避くるの智惠ある經世家の任なるとを知る、然れども彼れ鋭意して海軍を擴張し、以て太平洋を威壓するを休めざる以上、我れ亦海軍力を大にして以て其の均衡を保つの實に平和を保險する所以なるとを信ぜざる能はず、否、其の然かく餘儀なくせらるゝを覺ゆるのみ

米國の海軍擴張論は、稍々浮誇なるものたるや爭ふ可らず、第一は彼等の人口約一億といふも、其の一割七分即ち千七百萬以上は獨逸人にして、伊太利人は其の五分を占め、墺地利、露西亞、愛耳蘭等の人民約一割餘を占む、現に歐洲より入込む移民のみも、年々百萬人を下るとなく、斯くして人口激增するも、其の人種純ならず、隨つて國家の統一上頗ぶる憂慮すべきものなきにあらず、玆に於てか外患に由て人心を一致せしめんと欲し、心ならずも強ひて日米開戰論を唱ふる者なきにあらず、第二は資本家が殆んど總ての政治機關を操縱し、議會は勿論、新聞紙をも擧げて其の皂隷たらしむるより、資本家中の造船業者等、政府をして大に軍艦を建造せしめて、以て利器を得るがため、政事家又は新聞紙をして頻りに日米開戰說を鼓吹せしむる形迹あり、斯の如き根據薄弱なる海軍擴張論は、必らずしも掛念するに足らざるが如きも、斯くして建てられたる海軍力を以て、無遠慮に手を太平洋方面に伸べ、商工業上の競爭に加ふるに政治上の壓力を以てするが如きあらば、其の結果の意外にも憂慮すべきものたるや言を俟たざらんとす

且つ米國の國を立つるや、未だ眞の戰ひらしき戰ひを爲したることなく、戰ふ毎に少しく勞して多くの効果を獲たりき、其の墨其哥に捷つや、南部諸州を併せて豐饒なる太平洋岸の諸州をも獲、其の西班牙とサンチアゴ、マニラに開戰するや、玖巴と比律賓とを併せ獲たりき、吾人より視れば、其の戰ひや素より國命を賭せしに非ざる也、然かも領土を獲るの多き、殆んど意料の外にあり、玆に於てか自から『常勝者』を以て任じ、且つ常勝の効果の多き算盤以上なるを信じて、眼世界を空ふする氣あり、然かも況んや其の天與の富、或は世界に冠たる如きあるをや、此の氣を負へるものにして太平洋上に無敵の海軍力を有するに至らば、蕞爾たる日本島國の如き、一蹴して能く粉虀し得べしと做さん、是れ豈危險ならずと謂つ可んや、抑もリンコーン、ワシントンを有せし彼等は、今や漸く敬重すべき正人義士の血液を稀薄ならしめたるが如く、モンロー主義を一擲して遠く領域を太平洋上に占めしのみならず、近くば一拳闘に於て黑人のチャンピオンが自國人のチャンピオンに勝ちしとて、到る處の都市に黑人を窘迫したる一事に徴するも、彼等の心術略々推知すべし、故に彼等をして畏憚する所を知らしむるは、是れ彼等をして輕佻に事端を開くことを爲さゞらしむる所以にして、眞に平和支持の權道ならずんばあらず、即ち我が海軍を擴張して略々彼と比敵せしめ、彼をして獨り太平洋上に跋扈せしめざるは、是れ我が太平洋の平和を保持する所以にして、實に我が天職ならずや

日露協約を以て米國を敵視するものと做すは素より妄也、然れども日本をして能く彼の最も恐るべき競爭者に備ふるを得せしむるは、此の協約の疑ふ可らざる効果なりとす

英國首相アスキス氏議院に於て公言して曰く、英國は素より獨逸と戰ふべき目的を有せず、去れど英國の海軍力は常に獨逸海軍を目標とせざるを得ずと、吾人も亦心より信ずる所を曰はん、日本は寸分だも米國に敵意を有せず、然れども其の海軍は米國海軍を目標とせざる可らざると、猶ほ英國の獨逸に於けるに同じと

（四）

日露協約に對する清國の地位は、頗ぶる考慮を要すべきもの也、吾人は切實なる注意を之に拂ふを禁ずる能はず

北京よりの報によれば、攝政王は略々此の協約を承認すべしといへり、承認するも、承認せざるも、今の清國の力を以てしては、到底日露兩國の意向を變ずる能はず、即ち協約の効力に一毫の變化だも及ぼす能はずと雖も、向後兩國に對する態度の親和的なると否とは、其の關する所尠少ならず

試みに利害よりいへば、東亞殊に清國に力の及ぶ所のもの、日本を除けば唯だ露英佛獨米の五ヶ國あるのみ、此の内英國は日本の同盟國にして而して露と協約し佛國に親み、而して佛國は露と同盟し、英と親み日本と協約す、且つ日露兩國の協約が始めより英佛に内示せられしに徵するに、其の同意を得しものたるや疑ふ可らず、切實にいへば、此の協約は主たる日露は勿論、英佛も共に之を支持するものと視做すを至當とす、既に然らば、清國が之を承認せずして反對の態度を執る場合に當つて、之を援助するものは單に獨米の兩國に過ぎずと視ざる可らず、獨逸は陸軍に於て歐洲隨一と許すも、長鞭馬腹に及

ばず、東亞には一個師團以上の兵を出すゝら難んず、否、英露佛の向ふに廻りては、一兵だも出し得ざるべし、米國の富を以てするも、亦之を如何ともす可らず、乃ち此の二國假令清國を援けんとするも、竟に恃むに足らざるや數に於て明々白々たる、三尺の童兒も惑はざるべし、清國のために圖るもの何ぞ此の恃む可らざる兩國を恃みて而して日露英佛に抗す可んや

清國たるもの寧ろ日露協約を迎ふるに善意を以てし、能く誠意を推して二國と親和し、延きて英佛と親和を重ぬるに如かず、記せよ、清國の領土保全と門戸開放、機會均等の主義は、第一協約の聲明せる所にして、而して第二協約にも亦此の主義を保持し尊重すべきを明記したるとを、清國たるもの深く此の聲明を尊重し信用するを以て最も智ありとす

抑も清國の弊は、支那傳統の外交政策として、兩虎數虎相爭ひ相傷き相倒れしむるを能事としたりしに在り、遼金元に對するに此の策を以てして而して失敗したりしは七百年前の秦檜にあらずや、凡そ兩虎數虎をして相搏たしむるは力を用ひずして而して敵を倒す最妙の策なるが如きも、是れ己れ最も智にして敵の最も愚なる場合に限る、然かも敵の常に愚ならざる以上、此の策も時に隨つて取捨せざる可らざるに、今の清國は之を膠守して毫も變通する所以を知らざるに似たり、看よ、彼の阿片戰爭の例を引くまでもなく、現に楊子江流域に於ける英國の勢力を驅逐するがため、獨佛米を引き來るに及びて、却つて益々列國の力を滋蔓せしめたるは、是れ數虎相和して却つて反噬するに似たるものにして、全く清廷の誤計ならずや、曾て日本を窘むるがため、露佛獨を誘ひ來れるは李鴻章の智謀なりしも、然かも滿

州紛糾の禍因は實に茲に胚胎し、膠州灣を獨逸に租借せられて、而して滿州は殆んど露に致されたりき、日露戰役の後も、淸國は之を兩虎として相搏たしめんとしたりしのみならず、尙ほ米獨をも指嗾して紛糾せしめんとしたる形迹なきに非ず、日露協約の如き蓋し茲に慮かる所ありて締結せられたるものにあらずや、卽ち淸國自から求めて協約の締結を招ける也

外交を以て單に權變のみと做すマキアベリズムは既に陳腐也、國家と國家と相交はるに、至誠を以てするは最良にして且つ最智也、淸國たるもの今にして茲に悟るあり、至誠を以て日露兩國と相交はらば、始めて慶福を享くべき乎、傳統政策を擲つて翻然正道に歸せんと、吾人淸國の爲めに計りて言ふ

（五）

日露協約は極めて手輕に出來上りたるに拘らず、其の反響の意外に大なるに視るに、關係する所の汎きや多言を要せざるべし、列國の外交上に信用勢力ある倫敦タイムスが、此の協約を稱讚して世界の政治上に深遠なる意義を有するものなりと爲せるは、蓋し知言也

此の協約の結果、此の協約と日英同盟、露佛同盟と相待つて、東亞の局面は暫らく動くと莫かるべし、吾人は敢て斯く測度して過らざるを確信す

然りと雖も日英同盟の期限は今後五ヶ年のみ、假令永久に繼續せらるゝも、更に申盟の機に際するを忘る可らず、而して日露兩國の滿州に於ける鐵道を淸國に讓渡すべき期限も亦甚だ遠からず、此の機會に於て如何の波瀾を生すべきか、是れ最も重要也、獨米外交の活動最も注目す可き也、而して東亞の安

危治亂の機玆に繋がる、否、世界の治亂全く玆に關する也

米國海軍の缺點

（上）

吾人が前論に於て、我が海軍擴張の米國海軍を目標とすべきを言ふや、客有り、眉をひそめて曰く、米國は將さに世界に冠たらんとする富國也、其の富を以て海軍を建造す、英獨兩國ならば知らず、貧しき日本の如きは到底之と競爭し能はじ、强ひて競爭せんとせば破産の外あらざらんと

答へて曰く、米國の富は洵に貴說の如し、然れども其の無限の富を以て無限の海軍を建造し得ざる事情あり、軍艦あるも海軍々人を得ざる掛念あれば也

客曰く、何の謂ぞや、願くば詳しく與かり聞かん

答へて曰く、米國の富を以てせば、百隻は勿論、千隻の戰鬪艦を造る亦易々たるべし、然れども之を操縱し利用すべき海軍々人を得がたし、試みに彼の太西洋艦隊が威風堂々として太平洋に廻航し來りし當時の狀況を視よ、其のマゼラン海峽を通過するに方りて、既に若干の水兵の逃亡するあり、智利、秘露に至るに及びて益々甚だしく、逃亡者の數殆んど百を以て算せしにあらずや、然る所以は他なし、米國人の資質實に軍人たるに適せざれば也、彼等の多數、寧ろ少くも五割までは、他國人又は他國人の血

統を引けるものなるが故に、愛國心稀薄にして、殊に奉公の念甚だ少し、即ち國家のため軍務に服膺するが如きは其の欲する所にあらず、實は一種の被傭者として其の勞務に服するのみ、故に賃錢の高低、勞働の安危に由て進退するを例とす、軍艦內に勞働して遙かにマゼラン海峽を迂回し、遠く東洋に航するが如き、實に此の船內勞働者の好む所に非ず、是れ逃亡者の踵を接して出てたりし所以ならずや、平時既に然り、戰時一身を殺すが如き危險なる場合に方つては、乃ち略々推知すべきのみ、且つ米人の氣質として、黃金を尊ぶこと甚だしく、而して黃金を得るの難からざる、相率ひて身を致富の一途に致すを常とし、軍人たるが如き素より其の好む所にあらず、去れば優秀なる海軍將校を得るに難く、假令之を得るも多くを得ること難し、殊に水兵に至て最も然り、夫れ將校あるも優良なる水兵なくんば、是れ頭腦有て而して手足を缺くに齊しき也、故に米國の富を以て多くの軍艦を造るも、空艦のみ、其の海軍將校たり水兵たるべきものゝ員數より打算するに、自から制限無きことを得ず、天は二物を與へず、日本には海軍々人多きも富少く、米國は之に反す、而して其の制限を受くるや彼此略々相同じとす、米國の海軍力何ぞ無限に膨脹するを得んや、即ち日本の優に之と競爭し得る多言を俟たざるのみ

（下）

然りと雖も海軍擴張の競爭を爲すが如きは、實に好ましからざる事也、凡そ軍備は『平和の保險』なるも、若し列國相親みて之を節し、若くは之を全廢するに至らば、人生の福祉は實に測る可らず、列國財政の大部分の軍費なるがために困むこと現今の狀態也、若し大に軍費を節し、若くば全廢せば、生民の負

擔を輕くする効果は偉大ならん、若し之を轉じて平和的産業的方面に用いば、人生を益する幾んど測る可らざらんとす

米國に在ても、其の議會に於て列國と軍備制限を協議すべく調査するがため、若干の委員を撰定するの提議出てたりき、是れ恐らくばワシントン、リンコーンの血統を繼承したる純米國人の所爲なるべし、英國大藏大臣ロイドヂョージ氏曰く、列國は今や軍備競爭より來る浪費の流行病に罹れり、然れども我等も防禦すべき最大の帝國を有するを以て之を奈何ともす可らざるのみと、軍備は『平和の保險』なりと雖も、實は甚だ高價に過ぐ、吾人は世界の平和を希ふがために、敢て軍備の忽せにす可らざるを信じ、殊に太平洋の平和を支持するがため、海軍擴張の已む可らざるを主張すと雖も、實は已むを得ざるのみ、已む可くんば列國相倶に軍備を縮小して以て人類のためにせんと、是れ根本的理想也、然かも始終此の理想を皷吹せざるは、舟中大學を講ずるを欲せざれば也

公論

我國經濟の前途

法學博士 戸田海市

一

近來我國運の前途に關して屢々悲觀的言議を耳にするに至つた。曰く我國は日淸日露の兩戰役を經て世界の强國に相手取らるゝに至つた、然るに我國の富力を見れば實に哀れなもので、世界の二等國三等國にも及ばない、國富を人口に割宛てゝ見れば我國の貧弱なることは更に甚しい。然るに我國を相手取る所の强國は其富我に五倍十倍十五倍するのみならず、其經濟の進步の急激なることは目も眩まん斗りて、我國の十年に爲し得る所を一年掛らずに成就する有樣である。成程我國は武に於ては世界に冠たるものであるが、今後强國と戈を交へんとすれば二十億三十億と云ふ軍費を容易に調達することが出來ねばならぬ。日露戰役の際には幸にして外債に依賴することを得たが、今後は到底外債を賴みとすることは出來ぬ事情となつた。故に假令へ今日我國民は血を絞る思を爲して多少の軍備を擴張し得た所で、危機に臨んで之を活用することは出來ぬ、從つて我國民は列强より如何なる屈辱を蒙つても淚を吞んで之を忍はねばならぬ、若し此狀態にして一時に止まり將來我經濟が大に發展するの望があれば、

國民は須らく隱忍時機の來るを待つと云ふ勇氣も起るのであるが、其實國土狹小にして富源の缺乏せる我國は到底歐米大國と肩を並ぶるの望みない、從つて今後我國は常に列强より蒙むる屈辱を甘受せねばならぬ。此の如き有樣にして稍暫く續くときは遂に國民の元氣は阻喪せざるを得ない。近年佛蘭西國民の元氣が著しく銷磨した原因は種々あらうが、普佛戰爭の大敗に由て到底獨逸に對抗するの實力なしと自覺するに至つたことが其最大原因であると

論者は更に語を進めて曰く、我國の前途は國際關係より見て此の如く悲觀せざるを得ざるのみならず、國内關係に於ては更に大に患ふべきものがある。從來我國は年々五六十萬の人口增殖があつた、新興國民としては大なる增殖率と云ふことは出來ぬとしても先つ相當な所である。然るに境土狹く富源に乏しい我國は今後到底是れ丈けの人口增殖率を維持して行かれない、一般教育の進むに從ふて慾望の程度は日に高まつて來るに反し、之に滿足を與ふる丈けに經濟が進むことが出來ぬとすれば、我國民も意氣阻喪遂に佛人と齊しく人口制限を行ふに至るであらう、歐洲諸國では人口過剩に苦しむときは盛んに移民を外國に送つて人口の壓迫を免れるの途もあるが、我國の有樣を見れば米と云ひ濠と云ひ、滿韓と云ひ、何れの方面を見廻しても我移民を迎へる所はない。近頃我移民地として南米に着目する者もあるが、是も十萬二十萬の邦人が入り込めは必然排斥が起つて來る。只だ今日迄は幸にして一般人民の生活は非常の困難に陷つては居らぬ、例へば職工の給料を見ても物價の騰貴と略同樣の程度を以て騰貴して居るが、更に患ふべきは教育ある中等階級の生活狀態である。此階級者の所得は物價の騰貴に係はらず增加を示さない、故に其實際の所得は物價騰貴と反比例に減少しつゝある譯である。夫れも今日迄は中等以上の教育を受ける者が少なかつた爲め、兎も角も生活を立つることが出來たが、近來教育の進歩普及の爲め此階級の生活難就職難は日に益甚しくなりつゝある此階級は全人口の上より見れば一小部分に過ぎずとは

ろし云へ、精神的には國民の支配者たる地位を占めて居るから、其生活狀態の如何は國運の消長に甚大の關係がある。今日の如く其生活難が益甚しくなつて行けば必然其思想は不健全となり、或は急燥過激な破壞思想を傳播し、或は自暴自棄の廢頽的傾向を釀成するに至る。現に今日幾分か此兩傾向が實地に現はれ來つたことは爭はれぬ事實であると

以上は近頃屢々耳にする所の種々の悲觀說を綜合したものである。一體此の如き悲觀說が近頃盛んになつたのは一は久しく不景氣の續いた爲めであつて、景氣が回復すれは世人は又樂觀的となるが常である。然し我國の經濟が從來の如き方向を取て改むることを知らねば、予輩も將來必らず悲觀論者の云ふが如き結果を生ずることを信ずる。何となれば今日の如き方向を取ては我國の經濟は眞の進步は出來ぬからである。成程今日の不景氣は早晚回復するであらうが、夫れも我經濟の進路を一轉せざる限りは永續きの出來る景氣は來らない、忽ちにして又不景氣に沈淪することゝ信ずる

二

我國の經濟は維新以來長足の進步を爲したるは吾々も信じ、外人も許する所であるが、然らば如何なる方面が眞に長足の進步を爲したかと云へば、西洋摸倣の產業に限られて居る。汽船汽車電車や、郵便電信や、銀行保險は西洋の制度技術を其儘に直寫して大資本の力を藉り、學理を應用し、機械や分業を採用して大仕掛に經營せられて居る。勿論此等の事物は何れも國民經濟の骨組み、道具立を爲す大切なものであつて、之が爲め他の一般產業の進步を促がすには違ひないが、骨組み道具立斗りで中か身が同樣に改造せられなくては眞の經濟の進步は望まれない。其中か身と云ふは我國民の朝夕需用する所にして、又之が爲め所得の大部分を費す所の日用品である。此日用品の中眞に近代的の進步を爲して居る重なものは矢張り西洋摸倣の紡績位なもので、其他吾人の日用生活に缺くべからさる米麥を初め、味噌、醬油、酒や、下駄傘や、家具家財や日本家屋と云ふ如き日本固有品の產業は多少の進步あ

りとは云へ、大體數百年來の慣習に從ひ、非資本的非科學的に生產せられて居る、從つて其價は驚くべく高い、下駄と云ふ簡單な木の片れか五十錢一圓と云ひ、疊と云ふ粗末な敷物が二圓三圓と云ふ法外な價を有して居る、吾々の所得は僅少なる此等日用品を得るが爲めに大部分を取去られねばならぬ。只だ僅かに石鹼香水麥酒や電車電燈と云ふ便利なハイカラ品が出來る樣になつた斗りでは吾々の富は決して大增加を爲すことは出來ぬ、又吾々の日用品が近代的に大仕掛けに廉價に出來る樣になつて初めて吾々は麥酒でも石鹼でも電車電燈でも充分に利用するの餘裕が生じ、從つて此等の摸倣事業も繁榮し得るに至るのである。今日歐米が富强を致した原因は決して贅澤品やハイカラ品が安く出來る樣になつたが爲めでなく、其日常生活に必要なる普通の品物が總て科學的資本的に生產せられる樣になつた爲てある

然らば何故に我國に於ては國利民福に最大の關係ある卑近の日用品生產業は甚だ幼稚で、依然數百年來の慣行を襲踏し、獨り經濟界の道具立てとハイカラ品とが進步したかと云へば、是迄吾々が徒らに西洋の直寫的摸倣を事として居たからである。若し我國民にして碧眼紅毛、洋服を穿ち、麵麭と肉とを食ひ、洋館に住ふ者であつたならば、萬事萬端西洋摸倣に由て富國强兵を致し得るのであるが、幸か不幸か吾人は有史以來西人と全然異つた生活慣習を有して進み來り、彼れと共通の點即ち彼を摸倣し得る點は甚だ狹小な範圍に限られて居る。故に我經濟發達の根本策としては我固有產業を進步せしむるの外はない。若し此固有產業が資本と科學の力を藉り、廉價多量に生產せられる樣になれば、我國土は甚だ狹小なりと雖も國富を五倍十倍ならしむるは敢て難くない、海外移民は全然不能としても人口の壓迫を免れ、依然として相當の人口增殖率を維持することが出來る。成程我固有產業が右の如く近代的に改造せられたとしても、元來我國は絕東の小島國であるから西洋大國と同程度迄經濟を發達せしめることは出來難いかも知れぬが、我國民は稍熱帶住民に

近き生活慣習を有つて居て、西洋人の如く徒らに物質的生活の豊富なることを必要とするものでない。故に西洋に於けるよりも我國に於ては個人の生產したる富の一層大なる部分を政府の手に集めることが出來、從つて我國は彼れと同一程度迄經濟が進歩することを得ずとしても彼れと同一程度に軍備を充實し戰費を調達し得て一等國たる威嚴を保ち得るのである

今日我國の中等及高等教育は之を西洋先進國に比すれば尚ほ幼稚なるに係はらず卒業者過剩の有樣を呈し、教育ある階級の生活難は日に甚しくなりつゝある。其原因は他にあらず、今日の教育自身も西洋の摸倣を主とするが爲めである。今日の學校は狹小なる範圍に限られて居る西洋模倣の事業に役立つ人間を養成するに止つて居るから、少しく卒業者が殖へても忽ち過剩を生ずるのである。若し日本固有の產業に從事し且つ之を改造する樣な能力ある者を養成するならば、幾ら卒業者が殖へても尚ほ不足を感ずるであらう。(日本經濟新誌第七卷第四號我國目下の社會問題と教育問題參照)、又今日實業家が徒らに不景氣を嘆じ意氣阻喪して居る大原因も、經濟の方針が西洋摸倣を主とするが爲である。今日實業界の人材をして手腕を振はしむるに足る事業と云へば幾百萬幾千萬圓と云ふ大資本を運用する近代式の大事業でなくてはならぬ、此の如き大事業が澤山に無くては、假令へ一面に小規模の商工業や農業を營む餘地は充分にあつても實業界は不景氣を嘆じなくてはならぬ。我國は資本の甚だ缺乏せる國とは云へ近年は兎も角相當に資本も增加し、加ふるに外資輸入も容易となつた、故に大資本活用の舞臺が餘程擴張せられなくては人物の過剩を生じ資本の過剩を生ずるのである。然らば我國に於て此の如き大人物大資本の活動し得べき近代式の大事業の範圍は如何と云ふに吾人の日常需用すること少なき西洋摸似の事業丈けであつて、最も多く需用のある日用品の產業は大資本も新智識も入り込むことの出來ぬ舊式の小事業に由て營まれて居る。此日本固有の產業を近代的に改造せざる以上は新人物も新智識も活動することが出來ぬ。試に

見よ、今日資本の過剩に苦しめる我實業界の將校連は電燈、電鐵、瓦斯、紡績等僅に數種の摸倣事業に密集して相爭ふこと恰も蟻の砂糖に集まるが如くである。故に此等の事業は何れも既に過大脹膨過度生產の結果を呈し又は將に呈せんとして居る。世間或は是れ不景氣なる目下の經濟界に於ける一時的現象に過ぎずと云ふ者もあるが、予輩の見る所に由れは我固有產業の區域に大改新を行ふて之を近代化せざる以上は、少々景氣は回復しても實業界の將校連は到底充分に手足を延はすの餘地はない。予輩は敢て偏狹なる偉人崇拜論に與する者ではないが、一國の人材の活動舞臺の廣狹如何は經濟の消長に至大の關係あることを信ずる者である。百姓や大工や小商人には相當な仕事があつても、新敎育を受けたる人物や組織的能力ある人物が髀肉の嘆を發する樣では國民の元氣銷磨し產業不振となるを免れないや

三

世人或は我國民經濟の前途は主として輸出貿易を盛大にして世界の富を吸收し來ると否とに係はつて居ると論ずる者がある。予輩も亦輸出を隆盛ならしむるの有利にして出來得る限り此方面に努力するの適當なるを認める者である。併し乍ら大に輸出するは大に輸入せんが爲めであることは經濟學の初步を學んだ者も知つて居る所である。若し吾人にして歐米人又は他の外國人と大に相類したる生活慣習を有して居るならば、吾人は日常必要とする品物を大に輸入して利益することが出來るが、其實吾人は諸外國人と著しく異つた生活慣習を有して居るから、吾人の日常最も多く要する所の品物は外國より輸入することは出來ぬ。吾人にして大に富まんとすれば是非共日本米や味噌醬油や下駄傘や和服や其他の日用品を多量廉價に得るの途を立てねばならぬのであるが、此等の品物の到底之を外國より輸入するに由なく、自から其生產の改良進步を圖るの外はないのである

世人は又我經濟振興の根本策として保護貿易政策を採り、舶來輸入品を防遏して其生產業を國內に盛なら

しむべしと論ずる。予輩も亦空理に耽る所の自由貿易論者の如く一切の保護政策に反對する者ではない。併し保護政策こそ我國經濟振興の根本策であると云ふのは、是亦西洋直譯の議論であつて我國特有の事情から割出した達見ではない。歐米各國は互に同一の生活慣習を有し、其の生産し消費する所は各國殆んど同一である。故に自由貿易を採るときは、後進國は萬事に付て先進國から激烈な競爭を蒙むるに反し、保護貿易を採れば後進國は萬事先進國の爲す所を模倣して内國に其産業を起すことが出來る、故に歐米に於ては貿易政策の如何は各國の經濟に絕大の影響を及ぼすものである。然るに我固有産業の大なる部分は歐米の競爭以外に立つものであると同時に、保護政策を採つた所で内國に起し得る舶來品生産業は吾人の日常生活に重大の關係を有するものでない、從つて其産業の大なる發展を爲すことは六ヶ敷い。勿論保護政策の下に此種の産業を國内に起すに方りては、其生産方法は全然西洋に摸倣することが出來るから幾らか大資本運用の途が開け從つて實業界の將校連や學校卒業者の活動し得る舞臺を廣める結果となるが、保護貿易は一面に於て國民一般に高價を拂はしめて保護事業に從事する小數者を利することになるから、妄りに保護策を擴張する譯には行かぬ

四

以上に因て明かなるが如く我國民經濟を發達せしむるが爲めには、輸出を隆盛にすることも又或程度に輸入を防遏することも必要であるが、富國强兵の根本策としては吾人の日常生活に缺くべからざる卑近の日用品を生産する固有産業の組織や技術を近代的に改造し科學と資本の力を籍り、機械や分業を採用して廉價多量に之を生産するの途を講ずる外はない。今日迄の如く單純に西洋の直寫摸倣一點張りでは、到底國家の獨立を維持し國運を隆盛ならしむることは困難である。此事が我國に於て上下一般に亘つて充分に解せられ切實に感せらるゝに至れば、國民一般の努力は必らず此方面に集中せられ、實業家の着眼も政治家の經綸も學

者の研究も教育の設備も皆固有產業の改良を中心として行はるゝに至るてあらう。但し我固有產業を發達せしむるが爲めだからとて、別に物理化學や數學に日本特有の原理がある譯てなく、又組合會社の組織や金融交通の制度も大體の原理に至らば異なる所はないのてあるから、吾々は西洋に於て大に發達したる此等の原理を我特有の事情に適用するの工夫を廻らせば宜敷い。更に進んて西人の未だ發見發明せざる原理を吾々の手に因て成就し、之を我特有の事情に適用することは固より望ましい事てはあるが、是は中々困難てあるから、吾々は先づ日本特有の事情が何てあるかを知悉して世界共通の原理を應用する方から取掛るべきてある

西洋人は往々我國民を猿知慧と嘲り、創造力なき劣等民族てあると罵るのてあるが、今日迄の我經濟界の方針を見れは悲哉吾人は此嘲罵を甘受しなければならぬ。今日迄西洋摸倣は實に極端に奔つて居る。試に思へ、或事柄は西洋人が嬉しと云ふから屹度嬉しい事に違ひないと信じて笑つたり、西洋人が悲いと云ふから夫れに相違ないとして泣いたりする者があるとすれば人は必らず之を狂したりと云はん。然るに一歩立入つて吾國の實際を視れば實に我國民は擧つて此狂人の爲に倣つて居るものてある。近頃西洋て飛行機熱が盛んになつたと云へば、我國でも忽ち數十の飛行機特許の出願が現はれる。勿論予輩は此の如き發明を爲すことは大賛成てある、此等世界的事業に付て西人と名譽を爭ふことは男子の快心事てあつて、又輙すれば萎縮せんとする國民の元氣を皷舞するにも必要てある。併し乍ら顧て吾人の卑近なる日常生活の有樣如何と見れば空中飛行處の騷ぎてはなく、今日尙ほ吾々は道路と稱すべき道路をも具へて居ない。吾人は飛行機の發明に苦心する者あると同時に、如何にすれば雨天と雖とも差支なく通行の出來る道路を廉價に造ることが出來るかを考へる者を要求する。西洋建築の出來る技師も無論必要てあるが、予輩は更に便利低廉な日本家屋を供給し得る大建築業や技術者を要求する者てある。日本

米や酒味噌醤油や漬物や下駄傘や和服を近代的に生産することを工夫するのは、飛行機發明や極地探検と同一又はより以上の名譽を荷ふべきものであることを知らねばならぬ　（完）

一種の社會問題

法學博士　河津暹

（一）

年々公私の専門學校を卒業するもの幾千、萬人の多きに上り其一部分は田園に歸りて父祖の遺業を襲ふものあり若くは其資産信用に由りて新に事業を計畫し以て自己の運命を試みんとするものなりと雖も其多數は官衙に入り又は民間既設の會社等に入りて官吏なり民吏なり兎角月給取とならんとするものなり、公私の事業が人材を要すると甚だ多くこれ等の卒業生を吸集して剰すとなからんには學校を卒業すれば直に相當の位置收入を得べく從て學校は恰もこれ等の位置收入を得る階梯門戸たらずんばあらざるなり、就職難の如き忌はしき問題起り得べからざるなり。然るに我國社會の組織漸く整ひ官衙は勿論民間有力の會社は多くは新智識あるもの其樞要の位置を占め從て毎年潮の如く卒業するもの、爲に剰す所の椅子甚だ多からず、勿論これ等の既設の會社等の椅子も多少の變動あり、又我國の如きなすべき事業の少かざらる國に於ては新設の事業會社も亦決して少しとはせざれども職を求むるもの數多きに過ぐる勢を示せり、こゝに於て就職難の問題を生ずるなり。世人よ、卿等は勞働者階級に關する問題を重視し少からず其解決に苦めりこれ等教育あるものの位置に關する問題は其性質に於て範圍に於て差異あ

りと雖も社會問題として決して劣ることなきを記せざる可らず。或はいふ學校卒業者が就職につき少なからず困難を感ずるは最近一兩年のことにして實は經濟界が不況を呈したる結果なり、換言せば一時經濟界が好景氣なりしに乘じ諸會社等が事業を擴張するに伴ひ少からず學校卒業生を吸集したりしに經濟界が不況となり到底更に卒業生を吸集すること困難とあり否次第に由りては之を解雇せんとしたる所もあり又之をなしたる所さへありしやに聞き及べば重ね〲供給過多の顯象を見るに至り以て今日に及べりされば經濟界にして十分に恢復し事業再び活氣を帶び來らば供給過多の顯象は雲散霧消すべし何んぞ今日に於て供給過多を絶叫して世間を眩惑するを用ゐんやと。其の言多少の理由あり予輩も經濟界恢復すればこれ等人材の需要を增加すべきは信じて疑はざる所なりと雖も論者の如く供給過多を以て單に一時的顯象なりとは信ずる能はず供給過多の裏面には稍深遠なる理由の存するものあるを信ぜんとするものなり。試みに思へ、官衙は法律豫算等の束縛を受けて其事務を擴張するの餘地の甚だ多からざる明なり從て每年志願するものを悉く消化する力なきなり。民間事業とて既設のものが假に其事業の範圍を擴張することを得ざるは勿論新事業とてこれ等卒業生を消化し盡す程に興るべしとも覺えず、反之一面には智識の普及、校舍の整頓等夥多の理由により專門的智識を有するものが年を逐うて增加し來れるは數字の示す所にして何等の疑を容るゝ餘地ある可らず。たとひ經濟界にしてよく永く不況を呈することなしとするも供給過多の顯象は遂に免る可らざるなり是れ蓋し大勢にして避くべからざるものなる可し。

（二）

人材の供給過多は必竟事業の整頓、社會組織の完成、知識學問の普及を顯はし邦家の爲には慶ぶ可き顯象なる可しと雖も卒業生にとりては如何にも氣の毒なる次第なり。この種の供給過多は少からず學問をなすものに影響するなり。其の重なるものを想像せん乎、學校に在る時より每に卒業後の位置を案じて虛心坦懷に學

事の研究に專なると能はざるゝものゝ數を增加す、特に官衙其他有力なる會社等にては成績優秀なるものに非れば遂に之を採用せざるものあるを以て靜に學問を研究して他日の用に立てんとするよりも寧ろ少しにてもよき成績を得て就職の志を貫かんと腐心す。學問するものゝ氣忙はしくなりたるは爭ふ可らざる事實なるが如し予輩はこゝに實例を以て之を證明するとを欲せずと雖も其事實なるは消息に通ずるものゝ是認する所なり是れ果して慶ぶ可き顯象なりや予輩は其の然らざるを信ぜんとす。第二にはこれ等敎育ある靑年か其の求むる位置を得ると能はざらん乎、往々にして意氣頓に銷沈して却て有爲なる未來の妨をなすものなきにあらず更にこれ等敎育ある不平の徒を增加せんか社會を呪ふもの生じ來らずといふ可らず社會は爲に幸福を享けずして害を享く可しこれ等は予輩の杞憂に止るものなる可しと雖も之を先進國などの例に鑑み未だ全くこれなしとも明言すると能はざるなりかりにこれ等の結果は斷じてあらずとするも、兎角人物經濟上甚だ望ましからざるは予輩がいふまでもなきとなり。世人はこの問題につきて注意するとを要す。

（三）

供給過多が遂に免る可らざる勢なりとすれば世の子弟をして高尙なる敎育を受けしめんとするもの又は高尙なる學問を受けんとするものは、學校と職業とか次第に分離せんとする事實を看取して以て計を立てざる可らず。前にもいふ如く今日までは學校といへば一面には糊口の道を授くるものにて學校さへ卒業すれば夫れ相當の位置と相當の收入を得たりされば地方の子弟は皆踵を發てゝ都に遊び相當の學校に入らんとを希ひ兩親の止むるも聽かて家を出奔したるものあり、父兄親族のものも子弟か學校を卒業するを賴みとし無理算談しても學費を支出するものあり今日の如く物價は騰貴し諸事奢侈となりたる以上は子弟に學費を給するとは並大抵のとにはあらず、其は兎角、子弟がよく卒業し相當の位置を得べきものとすれば之に學費を給するは其の資本と見るを得べく從て、子弟に之を

給して怪まざりしと雖も、前にもいふ如く學校と職業とが分離し來り學校を卒業することは職業を得る一要件たるに止り又は職業を得るに稍都合よき位置に上りたりといふに止り職業を得るの保證とならざるに至るべしとすれば學校を以て糊口の道を得べき門戸階梯となし之に重きを置くは甚だ危險なりといはざる可らず。學校は職業を得べき一要素たる敎育を受くる所なることを深く念頭に置かざる可らず。このこと今日前に於ても理に於て異る所なしと雖も、社會四周の事情が之に加ふるに第二の意義を以てしたりしなり然るに社會の秩序が整ふに從ひ第二の意義は漸く消失し第一の意義のみに復するの兆ありといふなり。若し先進國等に於て見る如く學校と職業とか分離すべきものとすれば其の當然來るべき結果は高尙なる學問は之を修むを得る資力あるものに非れば自ら之をなすこと能はず換言せば職業を得る手段として高尙なる學問を修むる餘裕と資力なきものは相當なる修養を畢へなば成るべく早く社會に出づるを得策として社會に於て其技量に據りて未來を造くるこそ適當なれ。世の敎育家中動もすれば學校を以て職業を授くべきものなりと前提し、上下高低一切の學校を其目的に由りて改造し便宜ならしめんと試むものあり予輩は之を疑ふものなり。このことにつきては多少の意見あれども問題外に出づる虞あれば之をここに論ぜず

（四）

予輩は學校と職業とが分離する傾向ありとはいへり然れども學校を卒業するを以て職業を得る階梯となすもの消滅すべしといふにはあらず從來は世人は學校を以て職業を授くる所なりとなしたりしものが學校に於ては單に人格學問智識を修硏する所となすもの丶數が漸く增加すべしといひたる譯なり。學校を卒業して職業を得んとするものが消滅せざる間は所謂就職問題は或程度或範圍までは殘存せざる可らざるなり。

予輩の多少見聞する所に由れば、現今學校卒業生にして會社等に職を求むるものを見るに、多くは既設の有力なる會社に職を求めんとするもの丶如し。是れ畢

して極めて通俗なる意義に於て出世の捷徑なりや予輩多少の疑なき能はざるなり成程既設の有力なる會社に位置を求むるは極めて安全なる道程なるべし。何となれば其會社の信用も敦く資本も亦多く、恰も官衙に投ずると異る所なければなり、然れども安全といふ點よりすれば或はさもあることながら、其の信用の敦き丈會社の組織も亦鞏固にして從て其事業を遂行する上に於てさまで多數の人材を吸集する必要あらざるのみならず、これ等會社は多數のものが争うて志願する所なるが故に原則として容易に其目的を達すると能はず。反之小會社個人企業の如きは成程危險なるには相違なし若し其の主人公にして情理を解せず後進のものを引立つるに意なきものならんには到底出世すると困難なるべし即ちこれ等小會社に關係するは恰も鬮を引くに均しく其危險も少からざると同時に若し幸に適當なる位置を得我等の上に立つものにして吾人を信頼し吾人をして手腕を揮ふを得せしめんには吾人は恰も其事業又は其一部分を荷ふに均しく功罪共に著しきを得るを以て吾人は少からず愉快なる位置に立つを得べし予輩私に思ふに世に我等がなしたる事業の結果が著しく顯はるるほど面白きものあらじと。この感想にして太過なからしめん乎、吾人は大會社の極て小なる分子として活動せんよりは寧ろある會社、事業の比較的大なる分子として活動せんを以て快事となすものなりこれ等の理由を以て予輩はこれ等職業を求めんとするものに忠告す。徒に大會社大事業に着眼して職を求めんとするよりは小會社小事業に着目して十分なる成果を得んとを心懸ることこそ寧ろ適當なれ。只憾むらくはこれ等小會社小事業は人材を要すると甚だ少からざるに之を知るの便極て少きことなり。予輩は之につき特に名案あるに非ず只こゝには需要するものと供給者とか互に意思を通ずると比較的容易にして彼互其利益に浴せんことを希望せざる能はざるなり

以上は予輩が頃日會々觀取したるものゝ一斑也。讀者にして此問題に對し少からざる感興を有し教を垂るゝあらば予輩は之に由りて更に攻究の地歩を作るを得ん

日露戰爭以後に於ける列強の關係

法學博士　立作太郎

極東に於て我國が明治二十七八年の戰役に從事する頃歐洲三國同盟に對する露佛同盟成れり。露佛同盟は獨墺伊三國同盟の成れる前後より漸く成立の氣運熟さんとせるも、露佛兩國の當時の國情に於て同盟成立の障害存したるのみならず、獨逸が百方該同盟の成立を妨げたるを以て此時に至りて始めて成立を見たるなり、是より前露國及び佛國は共に三國同盟に對して孤立し、英國は猶亞弗利加及び地中海に於て佛國に對抗し、近東及中央亞細亞に於て露國に對抗し、三國同盟中の伊太利と地中海の現狀維持に關して協商を有せり。

露佛同盟成るや獨逸は該同盟の歐洲に於ける壓力を減殺せしめんと欲し、馬關條約締結の後、露佛兩國と相携へて遼東半島に關する三國干渉の擧に出でたり。露國が勢力を極東に張らんとする意思あるに乘じ、獨逸は露國と默契する所ありたる如く、明治二十九年及明治三十六年にはバルカン半島に於ける國際勢力の現狀維持の主義を基礎とせる協商が露國と獨逸の同盟たる墺國との間に行はれ、露國は近東に後顧の憂なくして鋭意極東の經營に從事せり。獨逸は明治三十年二宣教師の殺戮されたるを口實として明治三十一年五月六日遂に膠州灣の租借を認めしめ、其後三週間にして露國は露國艦隊の根據地を得るの口實の下に旅順及大連の租借を認めしめたり。明治三十三年北清事變の際露國は兵を滿洲に入れ、英國は同年十月獨逸と結べる條約に依り、清國の領土保全の維持を約したるを以て、之に依り獨逸をして露國の滿洲占領に對して抗議せしめんと欲せるに、獨逸は條約中に所謂清國は滿洲を含ま

ずと爲して之に應せず。而して當時我國が露國と協商せんとする色ありしより、南亞戰爭に關する英國は極東に於て我國と同盟し、以て極東に於ける其の利益を保護せんと考ふるに至り、三十五年二月第一日英同盟成るにいたれり。獨逸は一方に於て露國をして極東の經營に鋭意せしむると同時に、他方に於て其の極東に於ける大成功の障害を設けんと欲したるものゝ如く、私に我國の外交官に日英同盟を結ぶことを勸告せることあり。日英同盟の發表あるや、露佛兩國は共同して宣言を發し、兩國政府が極東に於ける事變の爲め自己の利益を保護する必要あるときは相當の手段を其間に協定すべきことを公にし、日英同盟に對抗せり。

露國が滿州の撤退を肯ぜざるより我國と衝突し日露戰爭起れり。然るに開戰後二箇月を出でずして我國の同盟國たる英國と露國の同盟國たる佛國との間に協商の行はるゝ一見奇なるが如き現象を見たり。英佛兩國は十七世紀の半以後屢相爭ひ、互に强敵を以て目し、十九世紀に入りても佛國がアルジエリヤを併せんとするや、英國は之を妨げんとし、チユニスを保護國と爲すや英國悅ばざるの色を示し、亞弗利加のナイジヤー河地方及びコンゴー河地方に關しても兩國相爭ひ、殊に埃及に於て英國が占領を爲すに及び佛國は强く之に反對し、英國がスーダンに遠征隊を派するや佛國も亦遠征隊を派し所謂フアシヨダ事件を生ず、明治三十一年中英佛の間に危機迫れることあり。其他亞弗利加が內に於てザンジバー、マダガスカル及、モロツコに關して爭ひ、亞弗利加が外に於てニユー、フアウンド、ランド、及暹羅に關して爭ひ、兩國の間に爭議の原因絕へざるが如き觀ありしも、英國は埃及、スーダン及ナイジヤー地方に於て意を逞ふし、佛國もアルヅェリヤ、チユニス、及コンゴー地方にては意を逞ふし、英佛間の紛爭の重要なる原因は漸く減ずるに至れり。此に於て殖民地に於ける已成事實を認むるの基礎に依り、兩國が和解を得し得べきに至れり。而して佛國に於ては殖民的擴張熱衰へて、英國は主として獨逸に對する關係の變化より佛國に近くことを求むるに至れり。此に於

て英佛接近の素地成れるに會日露戰爭の破裂に各交戰國の一方の同盟たる英佛兩國をして却て益相接近せしむるの動機となれり。佛國は露佛同盟の關係より戰爭に引き入れらるるに至らんことを恐れ、英國も日英同盟の關係より佛國が戰爭に加はらば己も亦我國の爲に戰爭に加はらざるを得ざるに至るべきを以て兩國相接近し、相助けて中立を守り、戰爭の渦中に引き入れらるるを妨かんとす。此に於て英佛接近の談判は促進せられ、明治三十七年四月八日英佛協商成り、諸殖民地に關する紛爭を解決し、就中佛國が埃及に於て英國の施設に反對せざる代りに、英國がモロッコに於て佛國の行動を妨げざることを約せり。西班牙も亦埃及及びモロッコに關する佛英の宣言に加盟し、英佛西の西歐協成れり。

英國が佛國に接近するを求むるに至れる一の原因は、其獨逸に對する關係に在り。獨逸は國力漸く充實し、所謂世界的政策に發途し、海外膨脹に鋭意し、獨逸の發達する商業及工業は英國の利益を侵蝕せんとし、特に獨逸現皇帝ウイルヘルム二世が獨逸の將來は海上に在りと稱し、其の海軍を强大にせんとするより、制海權を把持するを國家存立の必要條件と爲す英國民の嫉視を招き、是に於て英獨兩國民間に敵愾心盛に行はるるに至れり。英獨及英佛の關係の變化は又伊佛の關係の變化と脈絡相連なる所無きを得ず。

伊太利が佛國に對して其の地中海の利益を保護せんとし、且つ佛國が羅馬法皇を助けて羅馬を法皇に恢復するを恐れたるより三國同盟に入り、其後伊佛兩國は政治上及通商上に於て相反目せり。然るに明治二十九年伊國がアビシニヤに於て大敗を爲して後、三國同盟が伊太利の地中海に於ける利益を保障すること無く、大陸に於て獨逸に對し從屬的の地位に立ち佛國との關係に於て經濟上不利益を受くるを免かれざるを見て、三國同盟を非難するの聲漸く佛國人間に盛なるに至れり。且つ佛國に於て舊教徒の勢力衰へ佛國が羅馬問題につき羅馬法王を助くるの虞なきに至れるより、佛伊の間漸く和解せんとす。明治二十九年九月伊國はチュ

ニスに於ける佛國の地位を認めて後、明治三十一年に至り兩國の間に通商條約結ばれ、明治三十三年には伊佛兩國間にモロッコ及トリポリに關する外交文書交換され、翌年ゼノア公の率ゆる伊太利艦隊のツーロン訪問は佛伊の接近を公表せり。佛伊の接近は伊太利の年來の古國たる英國の同意を以て行はれたると明白にして、又佛伊の接近の勢を促進せると疑を容れざるなり。

英佛の接近及び佛伊の接近が益堅固を致すは獨逸の外交上の勢力を弱むるものなるを以て、獨逸は機會を見て新結合の依賴し難きを示し、佛國を威脅して獨逸の外交の勢力の下に立つに至らしめ、新結合を其の萌芽に於て破壞せんとす。日露戰爭に依り佛國の同盟たる露國の連りに破るゝを見て獨逸は時機至れりと爲し、奉天の戰の三週間後三月三十一日を以て獨逸帝はモロッコのタンジーアに上陸し、佛國が英佛協商に基きモロッコ王に對して內政の改革の談判を行へる際に於て、モロッコの代表者に向てタンジーアを訪問せるは此國に於ける獨逸の利益を有効に擔保する爲め余の爲し能ふ限りを盡さんとするに決心せることを知らしむるを目的とすと爲し、モロッコの「サルタン」を以て自由なる專制君主と思考するを以て之と協商せんとすと公言し、次て諸國駐剳の獨逸大使に回章を發し、佛國は終始獨逸を疎外して英佛協商及び西佛協商を結べるを以て、獨逸はモロッコ問題に關して如何なる方法に於ても束縛せらるゝこと無しと說き、而して千八百八十年のマドリッド條約（外國の公使館に依りモロッコ人に與へられたる保護の問題に關する條約）の記名國より成れる列國會議を開きてモロッコ問題を解決せんと提議せり。佛國外務大臣デルカッセは列國會議の提議を拒絕せんとせるも佛國に於て之に對する軍備缺け、露國も佛國を助る能はず、英國の陸上の援助は深く賴むに足らさるを以て對島の海戰後十五日にしてデルカッセ止むを得ず辭職し、佛國は終に列國會議を開くを認むるに至れり。明治三十九年一月列國會議アルヘシラスに關する會議中獨逸は佛國を孤立せしむる爲め種々の策略を用ゐしも積極的に獨逸の主張を助く

るものは墺太利一國に止まるに至り、獨逸も遂に讓步して三月二十六日主要なる點につき協商成れり。會議中の獨逸の高手的態度及詭計に近き謀策は諸國の心を獨逸より離さしめ獨逸は新結合を破壞するの目的を達せさるのみならす、却て新結合を强固にし、佛國人をして日露戰爭中其價値を疑はしめたる露佛同盟の價値を解せしむるに至り、又英露の接近を促進するに至れり。(アルヘシラス會議の委員ニコルソン及カシニ伯の間に英露接近の下相談を遂け、ニコルソンは歸英後露都に協商談判の爲め派遣されたりと傳へらる)

明治三十八年八月五日のポルツマス條約後一週間にして第二日英同盟條約結はれ、又日露の間にポルツマス條約に依り豫見されたる滿州鐵道に關する協約、日本海オコツク海及ベーリング海の漁業に關する協約、通商條約等の諸條約結はれたる外に一般的の意味の約束か結はれ、(明治四十年七月三十日)相互の現在の領土の保全を尊重し、又一方か清國と結へる條約上の權利及相互間に結へる條約上の權利を尊重すへきを約す(第一條)。又清國の獨立及領土保全幷に同國に於ける列國商工業の機會均等主義を承認し、且つ各自の執り得へき一切の平和的手段に依り現狀の存續及機會均等主義の確立を擁護支持すへきを約す(第二條)。又明治四十年六月十日日佛の間に印度支那に關する最惠國の取扱の趣意の宣言と共に上記の日露間の一般的意味を有する約束と同趣意の約束結はれたり。此の如くして我國は極東に關する日英同盟、日露協商及ひ日佛協商に依り、露佛同盟及ひ英佛協商に基く歐州の新結合の系統に加入するに至れり。而して日露協商及ひ日佛協商は英露協商を促進せしめたり。

英露の兩國はボスフオラス海峽、バルカン半島、小亞細亞、波斯、印度、西藏及支那に於て利害を異にすると思惟され、久しく相反目し、日露戰爭の際ハルの漁船砲擊事件の如きペテルスブルグ號及スモーレンスク號事件の如きナイト、コンマンダー號事件の如き皆兩國の反目を促せしも、佛國か其間に介在して和解を計るを以て事無きを得たり。(ハル事件か佛國の調停に依り國

際審査會の決定に付せられたるは人の知る所なり）日露戰爭後、露國は外に對して進勢を取るの餘裕なく、英國は獨逸に對する關係より歐州大陸に友邦を求むるを以て英露接近の氣運漸く至り、アルヘシラスの會議の際に於て英露接近に關する意見の交換を不正式に行ふの機會を得て、明治四十年八月三十一日英露協商成れり。協商の明文の定むる所は波斯、アフガニスタン及ひ西藏に關し、此等の方面に於ける兩國間の爭因を排除するを試みたり。英露協商は露國の同盟たる佛國と英國との間の協商の効力を更に鞏固にするの効あり。

日露戰爭の結果、專制國たりし露國波斯及ひ土耳古に於て立憲制度の布かるゝを見るに至りしが、土耳古の立憲制度の基礎未た脆弱なるときに當り、明治四十一年十月五日名義上土耳古の附庸たりしブルガリヤ公の獨立を宣言するあり、幾も無く十月七日名義上土耳古の主權に屬し、實際に於て墺太利洪牙利の統治せるボスニヤ、ヘルツェゴヴィナを墺洪國に併合し、之に憲法を布くことを宣言する墺洪國皇帝の詔勅の公布あり。此に於て最近の近東事件起れり。是より先日露戰爭の前年明治三十六年九月露墺兩帝はミユルッステッグに會見し、兩國の間に土耳古內政改革案を議し、土耳古に勸告してマセドニヤに國際的憲兵を置かしめ、且つ國際財政委員を設けしめたり。然れどもマゼドニヤ地方の擾亂止まさるを以て日露戰爭後明治四十年露墺兩國は列強の委任を受けてマセドニヤの司法制度改良の案を立て、土耳古に之か採用を迫らんとせしか此の際を以て墺國は伯林條約（第二十五條）に規定せるサンジヤック鐵道布設の認可を土耳古に要求せり。露國外相イスヴオルスキーは該鐵道に對抗してダニユーヴよりアドリアチック海に出つる鐵道を布設するの要求を爲せり。明治四十一年九月十五日露外相は墺外相エーレンタールとブフラウの莊に會見し、細密なる協議を爲せる如く、露外相は遂に主義としてボスニヤ、ヘルツエゴヴイナ二州の併合を認めたるも、併合の時期を明示せられさりしものゝ如し。露國は千八百七十七年一月の條約に依り二州併合を認むるを約せるを以て併合を爭ふ能はさるも、墺太利の二州併合を機としてダー

ダネレス及ボスフオラス海峡の軍艦通航禁止の原則の廢棄を求めんと欲せり。故に列國を歷訪せんとして伊太利及び佛蘭西に赴き、未だ英國に向はざるに已に巴里に於て二州の併合を報するエーレンタールの書に接し、十月七日には二州併合決行されたり。露國外相ロントンに至れは英國は海峡閉鎖の原則の廢棄に同意を與へず、此に於て露國外相は英國外相と協議して二州併合は伯林條約の違反たるを以て此の問題を該條約記名諸國の會議に附せしむへきを協定せり。然るに墺太利は二州併合を列國會議に附することに反對したりしも英佛露伊の輿論の反對烈しく、土耳古に於ける排墺貨熱頗る劇甚を極めたるより二州併合を全然列國會議に付せすとの主張は最早之を推持せさるに至り、唯列國會議開會前、列國政府間に豫め文書に依る意見交換を行ふべく、其意見交換の結果は列國會議に於て全然承認さるへき者と爲せり、これ形式上の讓歩に過ぎず。

露國の輿論は二州併合に烈しく反對し、セルヴィヤは同種族同宗教の露國の後援を賴みて墺國に對して軍備を脩め、土地の代償を與ふることを求めたり。然るに四十二年三月二十二日獨逸帝の露帝に與へたる親翰に於て、露國に單純に二露併合を公認するを勸告し、露國にして速に態度を明にせざれば墺軍はセルヴィヤに侵入し、獨逸は墺國の爲に露國に備ふるの地位に就かさるを得ざることを述へ、兵威を挾みて露國に迫りたるより露國は外相及び陸相の猶主戰論を唱へたるに拘はらず、藏相の極力反對せる爲め遂に屈して英佛伊と共にセルヴィヤに勸告して領土上の代償を要求せさるの宣言を爲さしめたり。最近東方問題の落着後露外相と墺外相との反目止まず、昨年の「フオルトナイトリー、レヴュー」事件（九月の同雜誌上に露國側の內意を受けて墺外相の不信義を鳴らしたる文出てしより墺國側より十一月號に於て露相の外交の信賴し難きを記せる文を掲けしめて之に答へたり）以來益反目の情を强め一時外交關係の中止を見るに至りしか、本年三月に至り兩國の外交の親密的關係に復舊し、バルカンに關する兩國の政治的主義の完全に合致せるとを言明する文

書を公にせり、バルカンに關する政治的主義に關し露國は(一)バルカン半島に於ける現狀維持(二)各種人民に對する權利の平等を基礎とする土耳古の新政及新秩序を維持し、且つ鞏固にすること(三)バルカン諸小邦の獨立、安全及ひ平和的發展の三點を擧く、墺國は此等の三點に關しては異議を抱かすと爲せり、然れ共近東の低氣壓が此の協商の爲に全く去れりと認むるを得す。

露國は近東に關して現狀維持主義を基礎として墺國との外交上の紛爭を止め、極東に於ても同一の主義に本きて我國との接近を益親密にする日露新協商を結へり。新協商は現狀を侵迫すへき性質の事件發生するときは、現狀維持に必要なる措置につき協定する爲め隨時商議を爲すへしと爲し、前協約が現狀の存續の擁護支持を平和的手段に限れると異なりとす。極東に關する日露新協約は日英同盟と共に歐洲に於ける英佛露の新結合と相呼應する極東の結合を組成するものなり。

日露の協商成りて後は、極東の近き將來に於て最も注意すへきは日米の關係に在り。ペルリ我が開港を强ひて後ハリスの如き君子人公使となりて我國人を誘掖する所多く、米國艦隊曾て下ケ關砲擊に加はり償金を我國より收めたることあるも、明治十六年議會の議決に依り之を我國に返附せり、條約改正に付ても最も早く我國に同情を表せるは合衆國なり。日露戰爭に際しても米國人は概して我國に對して同情を有せり。然るに日露戰爭以後日米の間に種々の問題を生し、或は突飛にも日米戰爭の將に來らんとするを說く者あるに至れり。日米間の問題は移民問題、滿州問題及ひ太平洋覇權問題とに區別し得へき也。移民問題は其禍源を米國西海岸の一部に限る者といふを得へく、日露戰爭後移住民の頓に著るしき增加を爲せると、白人勞働者の團結の計策及ひ新聞紙の煽揚とに依りて喧囂を致し、終には學童問題の如き餘波を生したるも現今は我國の自から移民に制限を加ふることに依り小康を得るの狀態に在り。然れとも日米間に存する問題が移民問題に止まらは前途を悲觀すへき理由を存せさるが如きも、滿州問題につき今後の發展を刮目するを要する者あり。鐵道中立の米國の提議日露の反對に由りて頓挫し、日露新

協約新に成れるに對して米國の政治家の感想如何。思ふに米國の政治家にして公平の思想に反るを知る時は自國が亞米利加大陸に關してモンロー主義を唱へ、亞米利加の事は亞米利加自ら之を處置すへしと爲すに顧みて、亞細亞の事は亞細亞に領土を有する國の爲す所に委し、唯米國人の商業上の利益を不當に害せらるゝを防くを以て滿足せさるを得ざるべきも、國際關係は理屈のみに依りて支配せらるゝものに非ざるのみならす、合衆國に於ては經濟上の問題が政治上の問題となるの傾向多きを以て、問題の前途に關して刮目を要するの理由を存するなり。北太平洋の霸權の問題は未た現實の問題といふへからさる如きも、今日に於ても合衆國の有力の人士にして合衆國が霸權を北太平洋に握るへきを說く者あり。ローズヴエルトの如きすら同趣意の言を爲せる以てを見れは、パナマ運河開鑿の後に於て此の如き思想か滿州問題又は移民問題と結合して如何なる結果を生すへきやを注意するを要するなり。

近東及ひ極東に外交上の低壓氣を存するのみならす、歐洲北部に於ても低氣壓は北海の邊を去らす。英獨の關係に於て主として海權上の競爭を存し、英國は所謂二强國標準（二强國の海軍力に匹敵すへき海軍力を標準とする者にして普通の解釋に依れは二强國の海軍力に加ふるに一割の割增の增加を以てす）を維持し獨逸の海軍力の迅速なる增加に對して警戒し、獨逸の增加に對して其以上の增加を爲さんとして相競爭せり。

現今の外交界の低氣壓は極東、近東及ひ歐洲北部に存し、歐洲北部の低氣壓に至りては近き將來に於て消散するを無かるへきも、卒然暴風雨を致すの憂少なし近東に於ては露墺の協商以來低氣壓稍勢を減したるの觀あり。極東に於ては近き將來に於て日米の關係に警戒を加へさるべからす。今日に於て最も警戒を要するは極東に在り。

極東に於て日露新協商及ひ日英同盟に依り、日英露の結合を爲し、歐洲に於ける英佛露の結合と相呼應す。此に於て歐洲に於て英佛露の結合に對立する獨逸か、極東に於て日英露以外の國殊に米國に接近を求むるは自然の勢なり。知らす獨米の接近か果して極東に於て實現して活動するの日ありや否やを。（完）

倫敦寫生通信

漱石生



カンタベリイ往復（六月十二日發）

チョーサーのカンタベリイ、テールスのカンタベリイ！英國第一位の寺院のあるカンタベリイ！往つて見たいとは豫て思つて居つた。

行くには大學の講義の無い日でなけにや都合が惡るい。雨降りの日では都合が惡るい。夙起した日でなけにや都合が惡るい。都合のいゝ日が僕には是迄無かつた。

處が昨日の土曜日は、どうした間違か七時に眼が覺めた。前日は一日雨だつたが、今朝は曇つては居るが降りさうには思はれぬ。すは今日こそと朝食もそこ〳〵に宅を飛び出したのが午前八時半。ハイベリイ停車場前迄歩るいて、其處からホーボル

ン迄電車。セント、ポールス寺院に遠からぬホーボルン、ヴイヤダクト停車場へ飛込んで、カンタベリイ、イーストへの三等片道切符を買求める。此の價五志二片、邦貨の二圓五十八錢だ。カンタベリイ經由ドーワー行の汽車は九時四十五分發だといふ。時計を見ると、まだ九時十五分だ。そこでベンチに腰を下ろして、僕等の旅行虎の卷たるベデカーをポッケットから出して讀む。

カンタベリイまでの里數は六十二哩、一時四十五分乃至二時間を要するとある。途中メドエー河を見逃がすまい、チヤタム町を能く見やう、カンタベリイ停車場へ下車して直ぐ停車場前のドンジョンが岡を見落とすまい、左へカスル、ストリートといふのを眞直ぐにさへ行けば寺門へ行き着かれる、その門前にマアロー紀念像がある、カセイドラルの見物が濟んだら、セント、オーガスチン學校内の古跡を尋ねて、それからセント、マーチンス、チヤーチへ登つて見やう、などゝベデカーを展きながら私かに心積りして居るうちに、早や切符を切り始める。

定刻に汽車は南を指して動き出る。合乘は獨逸人夫婦に英人二人。十人詰のだから頗る樂だ。そして坐席は日本の二等のよりも坐り心地がいゝ。汽車はやがてテムズ川の鐵橋を渡る。六月も央ば近いのに、今日も淡くフオッグがかゝつて居る。川下のサウザーク橋、川上のヲータルー橋は見えるが、その次の橋々は見えぬ。左手に、幾層の家々を抽んで、セント、ポールスの大殿堂は聳えて見へるが、それに遠からぬ大火紀念碑は、これ亦霧で朧氣である。川にはいつもながら荷船が幾十艘と上り下りして居るのが見られた。

汽車は急行だから、小さな驛はずん／＼拔かして行く、エレフアント、アンド、カスルといふ停車場には、郊外遠足でもするのか、八つ九つから十二三歲位までの小學生徒が、教師に率ひられてプラットフオームに整列して居つた。ローカルの汽車を待つて居るのであらう。いづれも小さな手籠や、カバンや、ハンケチ包みを提げて居る。おつかさんの心盡しのサンドウキッ

チや、ケーキや、林檎密柑なんどが入つて居ることであらう。衣て居る物も晴衣に屬するものであらう。皆んな嬉しげな顔をして居る。素通りする僕等の列車に對して、手を振つたり、麥藁帽を振つたり、ハンケチを振つたりする。その可愛らしさに、何とは知らず、僕は涙ぐんだ。僕の小學時分には汽車は固より無かつた。然し遠足といふことはあつた。明日は遠足だと申渡されると、その夜は、いくら寢やうと思つても眠むられなかつた。その頃牛肉は高價物だつた。その高價牛肉を十五匁か二十匁か細切りにしたのを煮て、それに筍の蟬の處、それに水蕗の煮染めか何か添へて竹の皮包みにして貰ふ。お結びには胡麻鹽がかゝつて居る。春の遠足の辯當はいつも斯んなだつた。そして身體に合はしては大き過ぎる此の辯當包を襷に背中へ背負つて、集合の時刻に二三時間も早く學校の運動場へ行つたものだ。樂しかつた。彼等も今頃は嘸かし樂しいことであらうなど丶考へて居る中にヘルン、ヒルといふ小驛て汽車は止つた。キクトリアから出た列車が向ひ側のプラトホームに居る。これを僕等の列車の前部へ聯結して、それからは、ひた走りに走る。

クリスタル、パレースの長トンネルを拔けてから、がいよ〱ケント州の田舍になる。八九月頃になると、此邊の野畠はホツプて綺麗だと聞いて居る。畑は日本のの様に區劃が小くない。大波のやうな高みはあるが際立つた岡が無い。このたゞ廣い野畠が一面にホツプの黄金色の花て蔽はれて居る光景を想像して見る。如何にも綺麗に相違無い。

ケントは林檎と櫻實とがまた名産だ。だから處々林檎畑や櫻畑もある。雜草無しの芝生に、幾間置きにか、實に規則正しく果樹が植えてある。そしてその果樹畑が幾町歩に及んてるのもある。到底も川崎の梨畑のやうな小つぽけなもんぢや無い。

汽車はベケナム、ブロムレー、ビクレー、スワンレーなどいふ驛を素通りする。このブロムレーの南二哩半許りの處にヘース、プレースといつて、ヴリアム、ピツトの生誕地があるさうな。チャタムが亞米利加問題

に就て大演説をやる前に、フランクリンが訪問したとがある。それも此のヘース、プレースであつたさうな。それから二哩許りの處にまたシーザー、カンプといつて、羅馬人移住の遺跡があるさうな。

汽車はなほもフオーカム、メオフアム、ソール、ストリートを素通りする。やがて前方に、線路と十文字に野畑の間に一條の川が隱見する。メドエー河なのだ。此のあたり、線路の土手に蕨が密生して居る。他の處では、マアガレットやバタカツプが生えて居て、たま〳〵低い灌木もあつたが、故意と造つたものか、此邊は綺麗に蕨ばかり生えて居る。金澤に居た昨年は、僕は蕨狩には四五度も行つた。獲物はいつもあり餘る程あつた。珍らしからうと思つて、その頃東京住居の父母へ鐵道便で送つたほどだ。金澤の蕨はいゝ。こつちの蕨はどうか知らん。蕨摘みに此處までは遠い。送るには餘りに遠い。しかも僕が當地(こつち)へ來ることになつた爲めに呼迎へて東京へ住まはしめた父と母は郷里へ還さなきやならぬことになつた。それも亦都合で此夏は、父ほどは、秋田に幾十日か暮らすのださうな。妻は東京に居る。弟は佐世保の艦(ふね)に居る。相訣るゝ時、蓮の實の飛ぶや東にあるは西、と詠んだ時の光景が眼に浮ぶ。

それまでは野原に隱見して居たメドエー河が、野が平らなのと、土手が低いのとて、左右とも、うねくつて何處までも續いてるのが見えるやうになる。蕪村の、春の川山なき國を流れけりだ。碧梧桐(?)の、春の川末は霞みてうねりけりだ。それに帆船のあちこち浮んでるのが見える。

川上に、右に、ロチエスターの寺院(カセイドラル)と城とが見える。上ばかり見えて、下は青葉に埋れて居る。俳句には陳腐だが、煉瓦堅く厚く積み上げた城の塔の、幾星霜の雨風に曝されて黑ずんで居るのに、オークか、バーチか、根本(ねもと)から青葉の繁つて居る樹林が之を取圍んで居る實景は崇大であつた。

汽車は鐵橋を過ぎて、倫敦を去る三十四哩餘のチヤタムでやつと停車した。十一時前だ。

チヤタムとロチエスターとは、もはや連續してしま

つて居る。ロチエスターは古風な静からしい町だが、チャタムは不整頓な騒々しげな町である。造兵廠や兵營がある。河上に堡壘もある。千六百六十七年の戰爭に和蘭の艦隊は此處まで侵入したのださうな。

汽車は此處を出てから、例によつて、ニユー、ブロムトン、レイナム、ニユーイントン、シツチンボーンなどいふのを素通りにしてフエツバシヤムで二度目の停車をする。

それまで合乘の僕等五人は互に口一つきかずに居た尤も獨逸人夫婦は向ひ合て獨逸語で何かたま〱聞いたり答へたりして居たが、此處で停車した時に、亭主の方がカバンから繪葉書やうのものを取出した。横目で見て見ると、海戰が描いてある。軍艦が二三艘に水雷が四五艘、互に砲火を交へて居る樣だ。空中にチエツペリン六と記るされて居る飛行機も飛んで居る。飛行機からも軍艦へ輕砲を打つて居る。何をするのかと見て居ると、吸ひさしの紙卷煙草の火を、右手に畫いてある軍艦の艦首の大砲の口へつけた。するとピチ〱と一直線に斜め左へ火が燃え進んで、チエピリンに屆いたと思ふと、パチツと音して飛行機が燃えくだけたこの獨逸人といふのはもう五十は越して居るが、こんな子供らしいことをして喜んで居る。見て居た細君も面白さうに笑ふ。僕等三人もお附合に微笑む。すると今迄獨逸語の亭主が英語で、『面白いでせう。あなたに一枚あげませうか』と、僕等三人に一枚づゝ呉れた。これが緣で、今まで淋しかつた車室は少しは相互の話で賑かになつた。汽車がその次の次のカンタベリイに着いた時僕一人は下車した。十一時卅五分だつた。

カンタベリイはストユア河に接した、人口二萬四五千の小さな町だ。町は小さいが、六世紀以來アーチビシヨツプの居所として世界に名を知られて居る。ヨークにも大僧正が住居つて居るけれども、此處の大僧正が英國僧侶の首位を占めて居るのである。六世紀の末近く、女王ベルサは此處のセント、マルチンが丘にさゝやかな耶蘇教の教會を建てた。異教徒を改宗せしめ

んとしてセント、オーガスチンが羅馬から英吉利へ來た時此處に滯任した。國王エセルベルトが一萬の人民を率ゐて耶蘇教に入つたのもセント、オーガスチンの力に依るのである。そんな事歷のある處ではあり、大寺院が建築せられて大僧正が住居ふとになつたので、チョーサーの昔このかた巡拜者の絕え間が無いのは尤な譯である。

停車場を出ると、眞向ひに道路から二三十間離れて所謂ドン、ジョンが閣がある。その二方に殘つて居る古るい城壁、石積みの頑固なもので如何にも古風だ。閣そのものは小さな塚やうのものだつた。でも高さが十三間餘りあるのださうな。

出がけに案内記で覺えて置いたやうに、少し左へ行つて、右へカスル、ストリートを何處までもと隨いて行く。四五町行くと、マーシリー、レーンといふ小路になる。町幅の狹い具合や、家の構造が、何となく伊太利のゼノアを懷はしめる。

此の小路を拔け終ると、眞向ひに、寺院境內へ導くクライスト、チャーチ門が見える。その古びさ加減か如何にもいゝ。所謂直立式の門で、幾多の人物の浮彫がそこゝ缺げかゝつて居る。

此の門の前の廣場の中央に詩神リリックの大きからぬ銅像が立つて居る。それは此のカンタベリイ生れのクリストファー、マーロー――沙翁前の大劇曲家紀念の爲めに建つたものだといふ。

寺門を潛ると眼前にカセイドラルが聳えて居る。直立式の宏壯な建物だ。といふより外に言ひ樣が無い。建築に就いて無學な僕は實際から言ふより外に仕方が無い。

元と此處の寺院は、エセルベルト王が、その宮殿と共々に、セント、オーガスチンに奉納したもので、後ち或は火災に遇ひ或はデーン人の侵掠に遇つたりして、一時は見る影も無いやうになり、ランフランクが再建したが、それも千百七十四年に燒けてしまつた。今のはヰリアム、ヲブ、センスが建築した部分がその大

部を占めて居るといふことである。そんなことはどうでもいゝとにかく全長八十六間足らず、音樂堂（クワイヤ）の長さ許りでも三十間はあるし、本堂（ナーヴ）と脇道（アイル）の幅が十二間あるといふ。そして中央の大塔の高さは三十九間あるといふ。これでその宏大なことほどは分らう。

僕は王や大僧正の像が無暗に壁龕（ニツチ）に嵌め込んである南門を潜つて本堂へはいる。壁なり色硝子窓なり、總てが古色を帶びて居て、奈良の御寺へ參つた時のやうな心地がする。

本堂正面の石段を上ると、音樂堂（クワイア）を限る結界（スクリーン）がある結界は十五世紀の作だといふ。これにも壁龕やうな處があつて、英王六人の石像が嵌めてあつた。

この石段の左右に脇堂（トランセプト）が一つづゝある。左側の、西北脇堂と稱する處が、かのトマス、ベケツトが千七百七十年十二月の二十九日慘殺された處なのだ。それで此の脇堂を殉教堂とも稱して居る。仰いて、窓の色硝子の繪を見る。ベケツトの一代記が描いてある。

僕はそれから音樂堂へ入り、西北脇堂を見、セント、アンドリユース塔を見、又も石段を登つてトリニチーチヤペルを見、奥正面のコロナを拜し、セント、トマスの奇蹟を現はした色硝子窓を見たり、此處へ葬られた、ヘンリイ四世の大理石像を見たりして、今度は西南脇堂から地下のクリプトへ下りる。ノルマン初期の樣式が窺はれるといふ。千五百七十六年頃に、時のエリザベス女王が此處を佛蘭西及びフランダーからの亡命者の用に供したものださうて、その爲め此處の南側の脇堂は、今猶ほ佛蘭西のチヤーチとなつて居るのださうな。低いが仲々廣い。そしてアーチを美しいと見た。

今度は西北脇堂の小門からクロイターへ行つて見る。非常に大きなものだ。アーチの切交（きりちがひ）に色んな紋章がある。此の寺院の恩人共の紋章だといふことだ。

寺院の裏へ出て見る。ブリク、ヲークといふ道だ。それに接して一列の高いアーチがある。初期ノルマン式のものださうな。その頽廢の狀、如何にも古を偲ばしむるものがある。

寺院の外（そと）は、小さな道の他（ほか）は、例の英國特有の芝生

だ。その芝生には萬年菊に似た野草が一面に咲いて居る。僕は仰いて再び寺院の外形を眺める。壁は黑ずんて居る。石がぼろ〱に剝げさうに見える。境内は森として居る。實にいゝ感じがする。僕は飽かず寺院を見上げて立つて居つた。

クライスト、チャーチ門を出て、マーローの紀念碑を右にして二三町行くと、左へ曲るモナストリイ町といふのがある。その町のはづれにセント、オーガスチンの舊跡がある。今此處は傳道學校になつて居る。境内に昔のアベー、チャーチの廢趾があり、オーガスチンか初めて建てた寺のセント、パンクラスの廢趾もある。そしてオーガスチン、エセルベルト王、ベルサ女王、三人とも此處の墓地に埋葬されて居るのである。門へ行き着いて見ると、

拜觀料六片。學期中は二時より五時半まで、休暇中は十一時より五時半まて

と掲示してある。時刻にはまだ少し早いので、後戾りしてロングボート町といふ坂道を上つて左へ折れてセント、マーチンス、チャーチ境内へはいる。

境内といつても實は墓地なのだ。小山の一端、四方生垣を繞らしてあつて、ロングボート町に面して、さゝやかな門があるに過ぎぬ。

この墓地の一番高みに小さな、極めて小さなお寺が見える、まさか斯んなのぢや無からうと思つて、折よく墓地を出て來る一少年に是がさうかと訊くと、「ザツ、ライト」といふ。

墓地の中の石がら小道を上つて行く。餘程高いと見えてカンタベリイ町が眼下に展開して見える。いゝ景色だ。

寺へ行きつくと門扉は堅く鎖してあつて內部の一班を窺ふとの出來なかつたのは遺憾だつた。たゞセントオーガスチンの來ない前に旣に女王ベルサが用ひたといふチャーチ、——「英國のマザー、チャーチ」と呼ばれて居る原始のチャーチと、——エセルベルト王が洗禮を受けたチャーチと、斯う思つてその古風な外觀を眺める許りてあつた。

二時も過ぎたから、歸途オーガスチンの舊跡を訪ふた。傳道學校は近代風の小綺麗な建物だ。セント、パンクラスの廢趾といふのは庭内の一部にあつて、苔蒸した斷礎のみ存して居る。いはゞ懷古の想を深からしめる。殊に倫敦を出る時曇つてな空が、カンタベリイへ着く頃から霽れそめたのだが、寺院を出る時は雨でも降らしさうに又曇つて來た。此の曇つた空、この苔蒸した斷礎、いかにも取合せがいゝ。そして境内鳥聲人語もきこえぬ。カンタベリイ寺院を見た時よりも一層いゝ感じがした。

歸りに繪葉書を買つて、郵便局へ行つて書いて出したりしたので、二時十分の汽車には固より間に合はぬ。大分待つて四時十八分のに乘つた。

曇つた空はまた晴れさうになつた。時々日光を洩すこともあつた。廣漠たる野畑、點綴するに平家または二階造りの農家を以てして居る野畑の景が、午前の淡霧の景と違つて別種の感を與へる。

朝は見なかつたが、土曜日の午後だからか、小川の岸に踞んで釣を垂れて居る洋服の大公望も見た。天氣になつたからか、幾町歩の芝原に幾百の綿羊の放してあるのも見た。ロチエスターの古城は、曇つてた朝の方が却てよかつた。

汽車は、六時三十分にキクトリア停車場へ着いた。此節の倫敦は日がまだ高かつた。

女子示威運動（六月十九日發）

婦人參政權問題は年と共に愈よ八釜敷くなつて來る。日本とは國體の異ふ、そして頗る婦人の自由を尊ぶ歐羅巴て、殊に學問技藝の上に於て遙かに男性を凌駕する女性の多い、そして獨立一家を爲して居て男子同樣納税の義務を有しながら參政の權利を有たぬ女子の數が非常に多い英國で此の問題の愈よ八釜敷くなつて來るのは無理からぬ次第と云はねばならぬ。

昨日、夕暮れ、宿から遠からぬハイベリイ、コイー

ルツへ散歩に行つて見た。此の公園の東北の隅に接して三叉道がある。人がウヂャ〳〵居るから、其方へ歩を移して行つて見ると、その三叉道の中央に一脚の椅子を置いて、その椅子の上に突立つて一婦人が大道演説を試みて居るのである。椅子を取巻いて十重二十重の人だ。婦人四分に男子六分の聽衆だ。言ふまでも無く、婦人參政權に關する演説である。辯士の後ろに大旗が立てゝある。それには

女子に投票權を與へよ、

六月十八日、土曜日、午後六時半示威運動擧行、

同感の女子は來つて之に加はれ、

と鮮かに書きつけてあるのが讀まれる。翌日の示威運動行列加入勸誘の大道演説が、倫敦で此夜四十八ヶ所で同時刻に催うされて居ると、警戒の警部が、同じく警戒に來て居る巡査に話して居るのを小耳に挾んだ。忘れずに示威運動を見物しやうと思ひながら歸つた。

ハイド、パーク、コーナーの大通りの中央にエリントン侯の大銅像がある。その前あたりが見物に好都合と思つて行つて見ると、はや蟻の通る隙もなく人が立列んで居る。時は六時四十五分だつた。已むを得ず、北側の歩道（フトパス）に立つて待つことにする。幸ひ僕の前の處は見物が二人列びて、それも餘り丈（せい）の高からぬ女だから、肩越しに行列は能く見えさうだ。

示威運動の行列は、テムズ河畔、エストミンスター橋とヲタルー橋との間で、正五時半集合、勢揃ひの上、正六時半發足、ノーサムバランド町、ペルメル通、セント、ゼームス町を經て、ピカデリーの大通りを西に進んで、ケンジントン通りの倫敦第一の大會館、八千人は優に容れ得るアルバート公紀念會館に向ふのである。會館での開會は正八時半と聞いて居るから、先頭が此邊を通過するのは七時前後だらう。はや間もあるまいと思はれる。

僕の後ろが三四列も出來た。前から後ろから、右から左からと推されるので煙草も吸へぬ。

七時になつたが行列はまだ來ぬ。その中西から東へ、

東から西へと、此の大通りを疾走しつゝあつた自働車馬車が影を收めてしまつた。危險を慮つて何れも横町へても避けしめたのであらう。言ふまでも無く、僕等見物の前には十間置き十五間置き位に巡査が立つて居る。騎馬の巡査も見える。

そのうち公園の中から衞生隊が列を組んで、擔架を携えて出て來た。僕等の前を行列の通る時刻の近いたのが知れる。

やがて來るのが見えると見えて、前列がざわつき出した。

笛と太鼓の音がきこえるやうになる。

來る〳〵。時計を見ると七時廿分だ。

先頭第一に、騎馬の婦人が居る。丈の低い肥えた逞ましさうな女だ。それが有名なドラモンド夫人なさうな。總指令官だと聞いた。

ドラモンド夫人の眞後に旌旗を高く捧げて堂々と進む女がある。僕の横に居る青年が、その横の連に『君、君、あれがシャーロット、マーシュ孃だよ、三月入牢してた』と言つた。入牢なんか屁とも思はぬやうな顏をして居る。旗には「女子社會政治同盟」と縫ひあらはしてあつた。

次に四列を爲して、此の同盟軍が組織した婦人樂隊が行進する。紫がゝつた揃の衣裳で、樂器は笛と太鼓とだ。四五十人は居たらう、歩調を揃えて整々として進む。曲は特に作つたマーチだといふ。

その次に大隊長といふ格か、又一人の騎馬婦人が見える。中肉中丈の四十位に見える立派な女だつた。僕の前に居た女が『あれがヘヴフィールド夫人ですよ』と隣の連れの女にさゝやいて居た。

その次に白衣白袴の婦人が同じく四列で行進する。いづれも右手に長さ一間はある長い銀色の棒を捧げて居る。棒の尖頭には銀色の鏃が着いて居る。四五百人は居た。聞けば此等はいづれも此の選擧權運動の爲めに一度入牢した連中ださうだ、それで名譽の先陣を承つて居るのだといふ。

それからはいづれも四列でいろんな團隊が通る。團

體毎に大旗を先頭に立てゝ居る。銘々小旗を持つてる隊もある。花束を手にして居るものもある。そして大抵はみんな右肩から左脇へ、厚い幅廣の襷をかけて居る。地は白で、それへ紫で「女子に投票權を與へよ」と縫ひ出してある。

通る〳〵。幾組も續々と通る。大旗には種々な銘が縫ひ出してある。銘には

「課税を爲して代議士を出さしめざるは虐政なり」

「忍耐せよ」

「希望は强固なり」

「婦人課税反抗同盟」

「精神一到何事か成らざらん」

「勝利は近し」

「更めず、讓らず、悔ひず」

といふのがあつたのは確に記憶して居る。ノーザンプトンの女子隊であつたと思ふが、「ノーザンプトンより出したる四人」と大書して、その下にその六名の名前が書き列ねてある旗もあつた。大旗はいづれも立派なものだつた。

大隊(?)大隊の間には音樂隊が二組づゝ居て、交互に行進曲を奏して行列に元氣をつけて居る。マルセイユの歌——佛國革命の歌を吹奏する隊が少なからずあつた。

小旗には三角形のもあれば、普通の長方形のもある。綠、白、紫の三色旗が多い。それは「女子社會政治同盟」の旗色なのである。中に一隊、監獄の壁を現はした小旗を捧げて居たのもあつた。警官のポンチ繪を現はした小旗を捧げて居たのもあつた。

行列中、異彩を放つて居たのは、大學卒業の女子連であつた。醫學士連、文學士連、例のガウンを羽織つて、房のさがつたカップを冠つて居る。いづれも肩を聳かして、何糞男共といつた面魂をして居る。見物は此等に對して「ブラボー」と叫んだり喝采したりする。

閨秀文士團體のうちには僕の辱知のハラデン女史を認めた。

看護婦の一團もあつた。看護婦の制服とそのカップ

だ小綺麗なので人目を惹いたやうだ。

工女の一團もあつた。選擧權を要求するの是非は僕の此處で辯ずべき限りでは無いが、豫て工場に使役せられて居る女の極めて薄遇なとを耳にして居る僕は、彼等の一團に對して覺えず憐憫の情に動かされた。「女子自由同盟」といふ一團の先頭には白百合の大束を捧げて居る女が居た。歸つて聞いたのだが、それはデスパードといふ知名の婦人ださうな。

美術家の一團はリボンと花とを結ひつけたパレットを各手にして居つた。

ハムステド團體は、いづれも靑葉の枝を捧げて居た。「ハムステド、ヒースのを折つて來たんだらう」と僕の横の男が笑つて話した。

女俳優連は銘々薔薇と靑葉とを結びつけた杖を捧げて居た。

行列のどの邊だつたか今記憶して居らぬが、四輪小馬車を二頭の白馬に曳かしてるのも目に留つた。それには淸楚な衣裳をつけた少女に圍まれて、四人服をつけた女が乘つて居た。ホエー孃といふのださうな。

僕は行列の次第を一々書かうとは思はぬ。記憶しても居らぬ。

とにかく四列行進でもつて遲からぬ步調であつたが、それで居て後尾の馬上の某女將軍が僕の前を通りすぎたのが八時廿五分であつたといふのでその長さが推測されやう。一時間と五分かゝつた譯だ。盛んなものだ。

しかも行列はそれで終を告げて居るのでは無い。その徒步隊の後には二人乘、四人乘、八人乘と人數は違ふが、或は馬車、或は自動車で徒步に堪へぬ老婦人や貴女が從ふて居る。車にはいづれも例の三色旗をたてゝ居る。馭者がつけて居るリボンも三色だ。或る自動車は坐席を殘す外、花で滿飾をやつて居つた。綺麗だつた。試に數へて見たら、此の馬車自動車は七十六臺あつた。

最後に汽車の客車程の大きさの大馬車に、十二三以下の少女のみを滿載して居たのが一臺、その後に騎馬の警官が四名、それでいよ〳〵行列は通り終つたとに

なつた。時計を見ると八時三十三分だつた。

行列が通つてしまふと、今迄横町へ避けしめてあつた乘合馬車、乘合自動車、私用馬車、私用自動車が一時に姿を現はしたので、さらでだに交通繁き此のハイド、パーク、コーナーは車で動きのとれぬやうになつた。今迄立つてた見物共は人波を打つて四方八方へ散ずる。僕は車に轢かれはせぬかと、幾度か膽を寒からしめて、やつとハイドパークの中へ逃げおほせるとが出來た。

附記。

今日の新聞を見ると、昨日先陣を承つた名譽の戰士、即ち斯道(?)の爲めに一度監獄の門を潜つた連中の數は六百十七人だつたとある。行列の全長八哩だつたとある。音樂隊の總數四十組だつたとある。大隊の數七箇だつたとある。ニユー、ジーランド、オーストラリア、カナダ、南亞非利加、亞米利加、佛蘭西、獨逸、和蘭、瑞典、那威、デンマーク、伊太利から一名以上の代表者が此の行列に加はつて居たとある。英國の各州で五人なり十人なり代表者を出さなかつた州は無いとある。總數一萬人以上だつたとある。アルバート、ホールは此の女子軍で塡まつたとある。パンカースト夫人の『下院若し我等の要求を容れずんば、その地位の危きを上院に讓らざるべし。總理大臣アスキス氏にして、若し國民の輿論たる下院の意見を輕侮するが如きとあらば、我等は奮起して何事か爲さざる可からず。革命必要ならば革命あれ』といふ演説は大會館が崩れはせぬかと思ふ程の大喝采を得たとある。運動費を醵出せねばならぬと說いたらエアトン夫人が筆頭に千磅と書き、ローレンス君が次に同じく千磅と筆を染め、或る女は自己所有の小舟の二百磅に賣れるのがあるからその全額をと二百磅と認めるといふ勢ひて、即坐に七萬三千五百磅、即ち七十三萬五千圓の運動費が出來たとある當夜現金て得た額丈けても二百十七磅十五志

三片、即ち二千百七十六圓六十二錢あつたとある。

下院議員シャクルトン氏が六月十四日に下院へ提出した「女子選擧權法案」は遠からずその第二議會を開かずには居られまいとある。ゑらいもだ。

メンタル、ポッシビリチー

文學博士　福來友吉

私は此頃こういふ事を考へて居る。人間の能力といふものは、今日普通にあらはれて居る所のものよりも遙かに大いなるものである。何かの機に觸れ緣に會へば、それが强烈なる力をあらはして來る。いはゞ一種の潜在せる能力とでも名つくべきものがあつて、普通にあらはれず又通常の人が氣が附かずに居る力がある。私は之を假りにメンタル、ポッシビリチーというて居るが之も餘り適當な言葉ではない。佛語に種子といふ語があつて佛敎家には此字でも分るが通常の人には分りにくい。て玆には最も俗に砕いて假りに人間の潜在能力と題して置く。

私は嘗て東亞協會の大會に於て「メンタル、ポッシビリチーと人格」といふ題で演説をした事があるが、今お話しやうとするのも、夫れである。メンタル、ポッシビリチーの事は、今後私が大に主張して世間に流布せしめようと思ふことであるから、同じ事であるけれども、御話して見よう、私が數年前から主張し初めて大分世間に流行して來た潜在精神の説と大に緣の深い説であるからである。否それよりも心理學上一層根本的の説であるからである。

吾々が日常色々な活動をするのは、詰り吾々の精神が活動となつてあらはるゝのである。即ち眼では物を

觀る、鼻ては物を臭ぐ、手足ては運動をする。其他いろ／＼な事をする。日常あらはるゝ斯くの如き精神の活動といふものは、吾々の精神の唯一の能力てあるか何うか。私は心理學の中ても特に變態現象の方を研究して居るが、其研究の結果、人間の精神能力は實に廣大なもので、今日吾々が現に實現して居る精神能力は僅かに其一部分てしかない事が分る。相當の刺戟、相當の暗示、相當の機緣さへあれば、普通に想像つかぬやうな非常な能力を現はすことが珍らしくない。其相當の刺戟、相當の暗示、相當の機緣によつてあらはるゝ非常な能力を稱して、私はメンタル、ポッシビリチー即ち人間の潛在能力と名つくるのてある。

人間が自己の生存を維持繼續して行く爲に、身體の各機關が各自の職分を盡して居る。之は人間の生理的活動である。又本能と云ふものもある。又習慣と云ふものもある。此中生理的活動と云ふ事は人間の意志で支配することが出來ぬものとされて居る。然しながら本來吾々の生理的活動と云ふものも、之は精神の活動から起つたものである。今日吾々が自分で彼是左右することの出來ないと云ふ生理的活動と雖、本來出來ないのてはない、出來るのてある。けれども現今の吾々の生存狀態に於てさう云ふ者を意志を以て變化する必要が段々と無くなつて來た。其れが爲に遂に支配しやうと思ふても支配することが出來なくなつたのてある。それて通常生理的活動は意志て以て支配することが出來ないとされて居るが、然し催眠術を應用すれば段々と精神て支配することが出來る。例へば血液を出したり止めたり――吾々が手を切つた時血液が出る。それを意志を以て止めやうと思つても止めることが出來ない。けれども催眠術を應用して止めるやうに暗示を與へると其出血が止まる。それを何遍もやると仕舞には此方から暗示を與へなくとも當人が有意的に止めることが出來る。然らば精神身體の能力と云ふものは限りのあるものかないものかと云ふに、無論無限と云ふ事は何事に付いても容易に云へる事てはないが、各自自己の人格といふものを以て此世界に生れて來て居る。

さうして銘々自分には是だけの事が出來る是だけの事は出來ないと、自分で自分の能力を大抵極めて居る。自分にはあの事は出來るけれどもこの事は出來ない。彼の人は此事は出來るけれども彼の事が出來ないと、互に自分自身の精神の能力に付いて大抵限りを認めて居るのである。けれども果して吾々の自分の能力に付いて限りを附けて居るやうに、其程吾々の精神能力と云ふものは小さいものであるかどうか。私は其、然らざることを信じて居る。吾々の人格と云ふものゝ中に現はれて居る能力は決してメンタル、ポッシビリチーの全體ではない。吾々の人格として現はれて居る精神身體の能力と云ふものは、メンタル、ポッシビリチーの一小部分であつて、其全體ではない。今其れについて多數の實驗多數の事實を列擧する餘裕がないから、唯二三の事實を述べて私の論ずる所が決して空論にあらざることを證明しやうと思ふ。

先づ吾々の感覺の力と云ふ事を考へて見る。吾々が通常物を觀たり聽いたりする此感覺の力はどの位なものであらうなどゝ云つて、隨分な迄測つた者がある。例へば眼の力ならば何十分の一燭光を照らしたときに初めて字が讀めるとか、其れ以上には働かないと云ふやうな具合に、人間の眼の力や耳の力といふものを實驗的に決めることの出來るやうに隨分考へて居た。所が私は其れは無駄な研究であらうと思ふのである。其れも或程度までは無駄でない。無駄ではないけれども、さう實驗して此所までと限つても、其實驗と云ふものは果して正確か不正確かと云ふ事に就て餘程疑が起つて來る。先づ吾々は太陽の光の下に於て物を視て居るから、暗室などに於ては通常見えないものとしてある。それは通常の精神作用に於ては無論さうである。けれ共催眠術を利用して研究すると非常に鋭敏な感覺を現はすとが出來る。平生は左程の眼力を以つて居らぬ人でも催眠狀態に於て多年練習すると恐ろしい眼力を現はすことが出來る。即ちハンカチーフを眼に五枚も六枚も當てゝ名刺を見せる。それをスラ〳〵と讀む者がある。之は現に私が實驗したことである。

また觸覺の如きも吾々は通常物に觸つて、判斷する場合にも大きなものであると手で觸つたばかりで分るけれ共、餘り小さいものになつて來るとなか〳〵分らない。所が催眠狀態に於てはその觸覺が大變鋭敏になるので、文字の如きですら、指で文字の面を探つて、此文字はどう云ふ文字であると云ふことを言ひ當てる。活版の文字でも同じく分る。私の實驗した一婦人は六號活字では六ヶ敷がつたが、五號活字は餘程六ヶ敷活字でもチヤント言ひ當てる。さうして書いた文字であると字が浮いて居るが印刷した文字であると凹んで居ると云つた。書いた文字なら墨の高さだけ幾分か浮いて居る譯であるし、活版で印刷した文字は少しは凹んで居る譯であるから理屈にチヤント合つて居る。さう云ふやうに平生には無いことが催眠狀態中に於て隨分現はれることがある。又臭ひでも其の通りであつて、英國生理學の大家カーペンターと云ふ人は或人に催眠をかけてさうして六十人の手袋を持つて來て試みたところが一々其手袋の所有主を臭ひで嗅ぎ當てたと云ふことであるが、手袋は吾々でも、隨分人の手袋などは垢臭ひのですから、之は垢の臭ひがするといふことと丈けは分るけれども、此垢の臭いは誰の垢の臭ひだかと云ふことは分らない。けれ共さうやつて實際上六十人の手袋を嗅ぎ當てた所を見ると、吾々の顔が百人百色であるが如く臭ひも亦百人百色千人千色であると思はれる。さう云ふ細かい差別があつても普通吾々には知れない、今後どうなるか分らず。亦吾人の祖先はどうであつたか分らぬが、現今の吾々にはさう云ふ差別は知る事が出來ない。たゞ女臭ひとか男臭ひぐらゐで濟まして居るのである。それから睡遊と云ふことがある。夜中眠つて居たのが、不意に起きて何處かへ行つてまた歸つて來て寐る人がある、——あゝ云ふ事が起きて居る時にも起る。私の妹もよく寐恍けをやる。何處へ行く〳〵と云つても默つて居る。さうして何をするかと思ふと、戸棚を明けて御膳を出して、五六ぱい飯を食ふ翌朝になつて誰が飯を食つた、と云つても自分は全く知らぬ事がある。此睡遊中に於ては非常に感覺が

鋭敏になることがある。眞暗な處て細かい字を書く人もある。或は裁縫などした者もある。さうして白晝に於てするのと少しも違はぬやうに出來たと云ふ話がある。またよく天狗に捉まつて行つたといふことがある。平生は怖ろしくて歩けないやうな險阻な山ても而も眞暗な處を間違ひなく歩くと云ふやうな事がある。

斯樣な事から考へて見ると、吾々が平生暗いから見えない〳〵といつて居るのは、即ち此通常の人格の狀態に於て見えないのてあつて、もし其者がある一種の精神狀態になると是迄見るとの出來なかつた物を見ることが出來る。是迄聞くことの出來なかつた細かい響を聞くことが出來る。けれ共今日吾々は暗い處は火を燈して見れば宜いのてある、電氣もあれば瓦斯もある。さう云ふものを使つて生存して居るから、そんな暗い處て物を見る必要がない。平常の吾々の世界てはさう云ふ必要がない。第一太陽と云ふものがある。天文學者などは太陽も仕舞にはなくなると云ふが、まあ明日や明後日になくなるのてないから、兎に角斯の如く太陽が照してくれる以上はそんな眞暗な所て物を見ると云ふことをしないてもよい。てあるからたとへ有る能力ても不必要な能力と云ふ者は段々人格から其姿を隱して了ふ。催眠狀態に於ては恐ろしい感覺の能力を現はして、平生の生活に復ると共れを使ふとが出來ぬ。けれ共是が使はれぬからてはないのてある。必要がないからてあつて若し必要があれば出來るのてある。それが即ちメンタルポッシビリチーてある。若し必要てあつて、相當の外界の刺戟があつて、緣あつて使ふことが起つて來れば次第に人格の內に現れて來るのてある。是は記憶に於ても然うてある。記憶のことなどには恐ろしい實例が隨分ある。生後十ヶ月目の經驗が年取つてからの夢の中に現れたとか、或は未だ物もよく饒舌られぬやうな幼稚の時に聞いた歌を物心附いてから啞となつてまるて饒舌ることの出來なかつたのが其前に聞いて居つた歌を歌い出したと云ふ例がある。一體吾々は過去の記憶の中て現在の生存の爲に都合のよいものを使つて行くのてある。吾々は人から叱られた

樣なことはよく覺えて居る。なぜかといふと、叱られた事を忘れて再びすると又其次に叱られるから、之は覺えて居なければならぬ。けれ共其叱られた時に頭を何遍掻いたと云ふやうな事は覺えて居る人はない。金を借りに行つた時には極まりが惡いから髀を撫でたけれども何遍撫でたかと云ふことは覺えてゐない。そんなことを覺えて居ても別に此次に金を借りる時に利息が安くなると云ふ譯でないから是は覺えて居ない。けれども實は何遍髀を撫でたと云ふことも知つて居るのである。たゞさう云ふ事を思ひ出すことが出來ないのである。思ひ出し事が出來なかつたからして頭の中に無いと思つたら間違ひである。思ひ出すと云ふことゝ記憶して居ると云ふことゝは二つの事實であつて、吾々は思ひ出すことの出來ないに拘はらず覺えて居ることが幾らもある。だから極りの惡るい時に頭を何遍掻いたとか或は羽織の紐を拈つたとか疊のケバを捲つたとかこれは皆記憶して居るのである。さう云ふ事が或妙な狀態に於て現はれるものである。

嘗て私は入澤博士の病院に行つてかう云ふ患者を見たことがある。岡田某と云ふ當時三十二歳の職工であつた。此男はどんな小さな事でも一遍經驗したことを後に至つて、其儘現はすのである。此男は一種のヒステリー發作をなす患者であつて、それが大抵毎日二時か三時に起きる。ヒステリー發作と云ふものは別に不思議なものでもないが、其ヒステリー發作に次いで現はれる精神現象が非常に面白いのである。一時身體が硬直して石のやうに硬くなつて居る。それが數分間續くと云ふと、今度は普通の睡眠狀態のやうになつて鼾をかいて居る。それが數分續くとヒョット起きて出る、それは午後の二時か三時であるが、當人は其時間と云ふことを忘れて了つて居る。丁度朝六時なら六時に起きた時の心持になつて居る。そこでどんな事をするかと云ふとヒョット起きると臥床を疊む。朝疊むだ通りにやる。それから齒磨揚子を持つて洗面所に走つて行く、肌脱ぎになつて冷水摩擦などを頻りにやつて居る。さうして「今日は好いとか惡いとか」色々挨拶などす

る。それて一生懸生にタオルで拭いて居ましたが「御免なさい」と云ふ何をしたかと思ふて看護婦に聞くと、今朝此人が肩を拭くときに隣の人に當つたから、それを今言つて居るのだと云ふ。それから「貴女のやうな好い人を女房（かみ）さんに持つた人は定めて仕合せだらう」と云ふ。何ぜあんなことを云ふと聞くと、看護婦が、ナアに今朝あんな言を云つて私に串戲を言つたのですと云ふ。それから、すつかり濟むで「お先へ、御免なさい」と云つて向へ行きかけると廊下に躓く。今朝も矢張り躓いたと云ふとてある。それから二階へ行つて食事を濟ませる。また部屋へ歸つて來て、今度は獨りで碁を打つ。丁度其日は人と碁を打つたので、其れを今繰返して居る。其石の並べ方は其朝打つた時と同じてあつたか違つて居たか其れは觀察しながつたが恐らく同じてあつたらうと思ふ。また其男が隣の部屋に行つて互に何か話をする。其話と云ふものは全く其の日の午前に話したと一分も違はぬ。おまけに自分自身の話ばかりてない。自分の言つた事も相手の言つた事も少しも違はずに繰返して居る。さう云ふ有様て些細の事に至る迄すつかり現はした。さうして暫く經つと又妙な工合になつて元に復へる。元に復つてから其日の朝から行つた事柄に付き尋ねても、ぼんやりして要領を得ない。

吾々は一時間の記憶と云ふものは十分位で思ひ出すことが出來る。と云ふのは吾々經驗した中の一小部分しか思ひ出さないからてある。例へば今朝御飯を食つたと云ふ事を忘れる人はなからうが、けれども其時お香々を何切れ食つたとか豆が幾粒てあつたとかそんな事は覺えて居ない。大體てある。ところが今の岡田某と云ふ患者はある一種の狀態になつて來ると全部を思ひ出す。其擧動と云ふものが、一時間に亘る事ならば一時間かゝつて再現する。活動寫眞よりも、完全に再現するてある。

筋肉の力でも自分の筋肉の力は此れ丈のものと限つて居るが、なか〳〵さうてない。所謂狐憑となつたり或は人格を變換させると云ふ事があるが、さう云ふ場合には平素非常に弱い力の人が非常に強い力を現はす

と云ふ事がある。甲の人間の時には足が弱いが、乙の人間に人格が變ると非常に足が達者になると云ふことがある。

亜米利加にミスボーシャンと云ふ女があつた。此の女が自分の人格の外にサレーボーシャンと第二人格を備へて居る。一方は非常に小心翼々たる眞面目の人で足弱であるが。一方は非常に悪戯者で浪費好で又健脚である。さうして互に仲がわるい。さうして時々人格が變換するので中々面白い事を爲出來かす。又其れと同じ様な事が胃袋にもある。吾々の胃と云ふものは一つの體に一つしかない。其胃が甲の人格の時には胃弱であるのに、乙の人格になると非常に強くなつて何でも食ふ。其一例は即ち狐憑である。平生は少しても食ひ過ぎると直ぐ胃が悪るいと云ふ様な人が、狐憑になると一升の赤飯を一遍に食つて了ふ。さうして何の氣もない様な顔して居る。油揚豆腐などをドシ〳〵食つても一向障らない。元の人間に復ると直樣タカヂアスターゼとか炭酸だとか何たとか云つて無暗に藥を服むけれども、狐憑になると同じ胃てありながら非常に強く働く。だから吾々の生理的活動は精神によつて色々變るのである。私は是丈けのものしか食ふ事は出來ない。是丈けの筋肉の力しかないと云ふけれ共、其れは吾々の身體を支配する精神作用によつて、非常に強く働いたりすることがあるのである。

斯の如き事例は隨分澤山あるけれども、先づこの位にして止めて置くが、或は天狗に捉はれて一日で東京から日光に行つたと云ふ事がある。さうして昔は天狗と云ふ者が雲か何かに載せて日光に引張つて行つたと云ふ事に言つて居るが、併し其の引つ張つて行くところを見た人が無いのであるから、是は或は人格が變換して自分で走つたのであるかも知れぬ。私は嘗て狐憑なるものを見たことがあるが、其れは人格が變ると非常に足が早くなる。て其の狐憑がどんなことをするかと思ふて後を尾いて行つたところが、どうして非常に早くなか〳〵追い付けない。然るに其れが元の人格に復つて了ふと普通の人間て餘り遠いから電車に乗らう

とか云つて居る。だから天狗に捉はれて一日に東京から日光に行つたと云ふことも、其れが實際上天狗と云ふものが雲に載せて連れて行つたのてなくして、人格變換の爲めに非常に足が早くなつたのてあらう。併し私は天狗の事に付いては實驗がないから何も申されぬが、兎に角さう云ふ工合に解譯が出來る。だから吾々の此足と云ふものは、一日に十里しか歩けないから吾々は十里しか歩む力は無い。二十里も三十里も歩くことが出來ないと云ふのは間違つたことてある。斯の如く吾々の感覺の力ても、記憶の力ても、生理的活動の力ても、なか／＼豫想外のものてあつて、吾々が普通想像することの出來ない程强い能力を持つて居るのてあると云ふことが大抵分るだらうと思ふ。

　斯の如く人間の能力は廣大なものてあるが其の廣大なる力と云ふものを一切悉く吾々が日常使つて居るかと云ふとさうてない。吾々が日常使つて居る能力は僅かてある。何ぜさう云ふ工合になつて居るかと云ふに是は色々說明がある。メンタルポッシビリチーの中のある部分の能力を生存上の目的に向つて都合よき丈けそれ丈け使つて居るのてある。まだ十分てない、もつと使つた方が都合がよいかも知れぬ。吾々が都合が好いと云つても、俄かに現はれる者てない、即ち電車、人力車、汽車と云ふ者が便利になれば足が弱くなる。電氣とか瓦斯とか云ふ物質が進歩すると吾々は精神能力を使はないても濟む。野蠻人は眞暗なところて星の光によりて人の顏を見ることが出來る。或は耳を地面に付けて聞くと、三里四里以上の敵の位置が分ると云ふのは、物質的勢力を利用することが出來ないから、止むを得ず精神の能力が發達するのてある。吾々の如きものになると、さう云ふやうな精神能力を使はなくとも宜い、吾々は暗闇ても燐火さへあれば物を見る こ と が出來る。電氣がなくても物を見ることが出來れば、宜い様だが、開化の世てはさう云ふものを使ふことを許さぬ。物質文明と云ふのは、ある意味から云ふと成るべく精神能力を使はぬやうにする。吾々の精神を出來る丈け儉約にして物質てやるとてある、眼て見ることを眼あ

て見ずして外の物て間に合せる。暗いところを見ることを養はなくとも電氣瓦斯て見るから、段々文明が發達したならば仕舞には口なぞて飯を食はないて機械が代理して食つてくれることになるかも知れぬ。結局マアどうなるか行先は分らぬけれども、現にさう云ふ工合てある。吾々は必要と思つてもメンタルポッシビリチーが實驗しないのてある。吾々はどうしてもそれが無いと生存することが出來ないと云ふやうな時期になつたならば或は現はれるかも知れぬが今日に於ては眞暗闇て物を見ることは願はしいと思つても外界の境遇がさう云ふことを許さぬから、如何に吾々は必要てあつても人格の中に現れぬのてある。それてあるからメンタルポッシビリチーと云ふものは、非常に廣大なものてあるがある場合に於ては現はれても尋常の人には出て居らぬのてある。それてある人に於ては自分自身の人格の能力の中に現はれて居ない所の其のメンタルポッシビリチーが、ある人に於ては人格から獨立して働くことがある。それはインスピレーションと云ふのてある。或は病氣などてさう云ふことがある。ヒステリー患者が十年苦しむて居つた。所が一朝海の中に落ちて驚いた。何うかして自分の一命を助けやうと思ふて勇を奮て助船に着いたが、其の時から十年來のヒステリーが癒つたと云ふことがある。或は神經衰弱者が火事の時に働いて、それよりすつかり神經衰弱が癒つたと云ふこともある。だからヒステリー患者は一種の精神身體の能力が人格から無くなつて仕舞つたと、斯う云いたいのてある。通常ならば吾々の人格の中に這入つて行動すべき所の精神能力がヒステリーに於ては一時人格から外へ出る。本來あるべきものが人格から取れて仕舞つて、人格の外に隱れて仕舞ふことがある。其れが何かの機會に接して現はれる。だから吾々の人格の外に色々な能力があるが、生存上現はるべき筈の能力さへなか〳〵現はすことが出來ない。何かの緣に接して忽然として人格の中に這入つて來る。だからヒステリー患者が海に落ちて癒つた。神經衰弱者が火事に出合つて強くなつた。火事てあるとか海に落ちると云ふ

ことにはメンタル、ポッシビリチーを引き出す一の緣である。吾々はたとへさう云ふメンタル、ポッシビリチーの能力を具へて居つても緣に接しないと其能力が實現せぬのであるから、其の緣に接することが大切である。其の緣はどう云ふものであるかと云ふことは或場合には豫言することも出來るが、ある場合には豫言することが出來ない。ある場合には人格的緣を作ることが出來る。催眠術は緣を作る。催眠術は言語で緣を作る。又實際能力の強い人の傍に居ると、其の感化によりて精神能力の弱い人も一種の力を得る。信仰の感化でも其の通りである。それで偉人に接するのがメンタル、ポッシビリチーを引き出す一の緣となる。さう云ふ場合に於ては、お前は斯う云ふことをせよと言葉で緣を開くのでない。實際大なる精神力の實現が一種の暗示となつて、伏在して居るメンタルポッシビリチーを解發するのである。それで此緣と云ふものは言葉ばかりではない。寧ろ口から與へた催眠術の暗示は薄弱である。實際世の中に現はれた活動の方が大なる緣を作ることである、また或る種緣は故意に作ることが出來ない。例へばヒステリー患者が海に落ちて癒つたと云つて、自分で海に落ちたところで癒るものでない。或は死んで仕舞ふかも知れぬ。神經衰弱が火事で癒るからと云つても放火したつて癒らない。狗子有佛性と言ふけれども、口頭の口案問答や、喝棒位の緣丈では中々本眞のものが現はれて來ぬのである。先死に關する活問題に面して立つ時、緣あらば忽然として現はれて來る。鷄の卵でも段々時期に接して中の雛が卵を割つて出やうとする。其時に母鳥が喙で殼を突つつく、此兩者がきつちり一致した時が緣でメンタルポッシビリチーが現はれるのである、無暗に突つつゐたところが殺して仕舞ふのである。親鳥が突つつくと殼が割れる、其瞬間が緣で、メンタルポッシビリチーが實現して來るのである。私は氣合と云ふことを非常に主張する。一寸した氣合で病氣なぞが治る。つまりは緣で以て病氣が癒るのである。此緣と云ふことはなか／＼難かしいことで、俄かに作り出すことは出來ない。然し其の

自然に起るところの緣と云ふものを利用して、緣に乘じて患者に暗示を與ふることは熟練で出來る。熟練により緣を作ることが出來るが、併し人間の拵へた緣では到底癒すことが出來ない場合がある。

其の外吾々は祖先からの先天的本能や國家のトラヂションなどによつて吾々の人格が作らるゝことが頗多い。可笑しい話だが人間の顏がどうかすると父母に似ないで乳母に似たり里親に似たりする。ある人は斯う云ふ。それは乳の關係である。まつり里親の乳を呑んだから里親に似る。乳母の乳を呑むだから乳母に似る。物質との關係によつて似るのであると云ふが。是はいかぬ說であると思ふ。何ぜなれば乳を呑んで似たならば牛乳を呑んだものは牛に似さうなものである。是は乳の關係ではない。嬰兒が始終見て居る其の見たものに似るのである。容貌もある意味に於て外界の緣に接して顏形が出來る。猛獸の間に育つ野蠻人は虎の吠聲などをうまくやると云ふことを聞いて居るが、我々にはアヽ云ふ聲を眞似ることが出來ない。幼少の時から猛獸の中で育つたならば、獸と同じ聲になる。鶯を御覽なさい。鶯は赤ん坊の時は敎親の聲を聞かせる。一遍か二遍聞くと其赤ん坊の時の聲が成長の後敎親の聲に似て來る。して見ると一遍感じたことは身體の上に色々な形に於て實現するのである。吾々の精神に於て感じたものは單に吾々の日常の行動に於て現はれるのみならず、身體、顏、聲などに現はれるのである。それでつまり吾々の人格と云ふものは外界の影響とメンタルポッシビリチーと云ふものから出來て居る。メンタルポッシビリチーと云つてもなかなか廣いものであるから、人格はその中の一部分を實現して居るのである。

更に今一歩進めて考へて見るとメンタルポッシビリチーはもつと廣大ではないかと思はれる。吾々がこの身體と云ふものを全然離れて考へて、精神の根元——佛敎で云ふ根本識——私は是を識元と云ふ言葉で表はして居るが、其の識元と云ふやうに即ち一切の精神の本に立復つたらどうか吾々が通常云ふ精神と云ふもの

は多少習慣を持つて居る。其の習慣なるものは何によりて出來たものかと云ふに外界の境遇に會ふやうに出來たものである。だから鼻で臭ひを嗅ぐのは樂であるけれども脊中で嗅ぐことは出來ぬ。てさう云ふ習慣は持つて居るけれども、其根原たるところの根本識と云ふものに立復つたらどうか、吾々が今日便宜的に使つて居るところの五官をはなれて精神の元に復ることが出來たならば、今日吾々が五官の働きて知ることの出來ないことを知ることが出來るかと思ふ。現に私がこのころ實驗した、熊本の千里眼――千里眼と云ふ言葉ては少し現はしにくいかも知れぬが、其れは物を隱して置いて見えるのである。私は便宜の爲に名刺について實驗したが、どのやうな物に包むで置いても中にある名刺を讀む又三枚も四枚も重ねて箱の中に入れて置く、それを一番上の名刺は何、二番目のは何と云ふやうに一枚々々に當てる、まるで別々に撥つて見たと同じやうに言ひ當てる。之は決して名刺に限つたことはない。外のものでも此の通りてある。そこて斯の如きことは眼て見るやうてないのである。先づ名刺の這入つてある箱を膝の上に置いて念じて居る、それには大抵は深呼吸をやる。深呼吸をやつて居ると段々無我の狀態になる。ヒヨツト斯う云ふ字であると云ふ事が浮ぶのである。それが明瞭に現はれるときと不明瞭に現はれるときとある。不明瞭なときには間違ふことが多いが、明瞭に現はれるときは決して違はぬ。だから斯の如き場合には此眼と云ふものは捨てゝ居るのである吾々は過去の永い習慣によつて太陽の光線の下に於て空氣の中に生存するに都合よき身體を具へて居るが、此便宜的の五官と云ふものを離れた時には、即ち純粹の無我てある。之は催眠術の狀態に於て、或は禪などのやうなことに於てもあることとて、全く身體そのものゝ存在をも知らないことになる。身體と云ふ感じが無くなつて了ふ。針をさゝれても痛いと云ふことはない。即ち精神が純粹の精神になつて了ふ。色々な妄想があつたり、手の感じがあつたり、腹の感じがあるとか云ふやうてはとてもいけない。即ち自分自身を忘れた樣

になつて了つて、純無我の狀態、さう云ふ純無我の狀態になつて來ると、さうすると平生の習慣によつて出來たところの五官によつて知ることの出來ないやうな一つの能力を現はすことが出來る。然らば我々が純無我の狀態になつてさうして通常是迄の人格の上に見えて居つた所の能力以外の能力を出すことに就ては如何なる方法があるかと云ふことも少し話して見たい。其實例として無我と云ふものはどれ丈け我々の精神に影響するかと云ふことを一つ話して見やう。

先づ擊劍に於て其他凡ての技術に於て無我なるものヽ尤も大切であると云ふことは、是は古人も云ふことである、禪の境涯と擊劍の境涯とは極致に於て一致すると云ふことは昔から云ふことである。宮本武藏が人間と云ふものは十分に精神が落付いて仕舞ふと云ふと如何に思ひがけなき時に斬り込んで來られても其刃を免れる丈けの餘裕は必ずあると云ふことを云つた。即ち禪の極致と一致するのである。先日現に聞いたとがあるが海上胤平翁は歌の名人で天下に知られて居るが又あの人は擊劍家である。一刀流で餘ほど磨いた腕である。で嘗てお目に懸つたときに矢張無我の話が出た。其時私に斯う云ふ風に話をした。あの人が一刀流の擊劍家で大部武者修行をやつたことがある。信州の小縣郡の矢澤村と云ふ所に行つたときに、其所に田中半次と云ふ弓の名人があつた。此人はなか〳〵强弓を引いた、矢の根の付いてゐない矢を放つて薪の太いのを一遍に割つたと云ふ位である。だから此人に出會はした擊劍家は皆舌を捲いたと云ふことである。それを胤平翁が訪ねて行つたときに矢張り、どうか私の矢を一つ受けてもらひたいと云ふ、ところが胤平翁も利かぬ人であるから、隨分恐ろしい勢の矢であるけれども一つ受ける氣になつた。そこで愈々立會つたところが、凡そ八間程隔つて居つたさうであるが、一方は矢を番へて一生懸命になつて狙つて居る。一方は刀を以て構へて居る。其の内に向ふの手を離れたかと思ふとヒユツト一本飛んで來た。まるで矢の來るところが見えない。是はいかぬと云ふので胤平翁大に考へて暫く待つ

て貰ひたい。私は一つ考があるから暫く待つて貰ひたい。と云つてそこで先づ座つて精神を落ち付けて念じて居た。暫く精神を落ち付けて雑念を拂つて了つた。それから今度やりますと云つて、再び立上がつた。今度は横なぐりに刀を持つて矢の番つたところと一寸程と思はれる所に刀の尖の見えるやうにして居た。やがて田中が發つた、ところが今度はその矢が非常に能く見える。精神を沈靜せしめて無我に近い狀態になつたので、矢の飛んで來る途が非常によく見えるから、ア、此所へ來たと云つてヒヨット拂ふ。此所へ來たとヒヨット拂ふ。三本とも何の苦もなく叩き落したと云ふことである。是は無念無想の狀態になつたからして矢の來るのが非常に能く見えるので、煙草一ぷくやつてから落しても宜い位に見えるのである。

だから吾々が何が早いとか遲いとか云ふことも、それて精神が狂つて居ると非常に早いやうな氣がするのである。頭腦の明瞭なときには人の話がよく聞きとれるけれども、頭腦の不明瞭なときには能く聞きとれない。講義などを聞いて居ても、妄念のある間には、何だか先生が早く饒舌べるやうで能く分らない。同じ早さで話しても、精神が沈靜して頭腦が明瞭であると、ゆつくり意味が分る。斯う云ふ事は山岡鐵舟先生が淺利又七郎先生かち極意皆傳を貰ふ時にもあつたことである。兎に角吾々の精神中に妄念があると云ふと、見ることの出來るものでも、之を見ることが出來ない。身體の感覺まで失くなるほど無我になると、今まで見ることの出來なかつた矢の形が判然見えて、いつでも叩き落すことが出來る。最初申した宮本武藏が精神が落付いて居ると如何に不意に斬込んで來られた刄の下でも潜ぐる丈けの餘裕は綽々としてあると云はれたのは決して是は僞の言でない。而して胤平翁の經驗は只通常のこの眼で見たのであるが、眞に我々が眼と云ふものを離れ耳と云ふ者を離れ、身體と云ふものを離れて根本識即ち識元の狀態に復つたならば即ち通常の五官の作用に依つて見ることの出來ない所のものを見ることが出來るのである。

メンタルポッシビリチーと云ふものは無限のものである。相當の刺戟、相當の暗示、相當の機緣に會へば其の力が躍り出るのである。而して此の事を知つて居るのは人間の生存上極めて必要な事であると思ふ。

（完）

熱帶地方の建築

工學博士　伊東忠太

熱帶地方の建築といつても澤山は知らぬ、此處には只印度埃及方面をのみ語らうと思ふ、印度も特に南印度は非常の暑さで、德干高地の或る地方では一年中の絕對最高溫度即ちアブソルート、マキシマムが百七十八度にも達することがあるから、それに對する建築も亦一種特別てある、日本の土藏を想像すると先づ一寸近い、上等のもの即ち生活程度の高い家になると、家の四周に非常に厚い土壁を築き、そして極めて小さい窓を穿ける。家には又四方に幅さ二間程も有らうと想はれる椽を廻す、不思議なのは屋根て、往々眞平にして泥て葺いてある、地方により薄い、小さい赤色の瓦て本葺に葺いたのもあるが、又農家などには草葺のものもある、此の如く家の四方に廣い椽側を取るのは、元と低緯度の地に在つては太陽が常に頭の上を通るのだから其朝日夕日の深く覗き込まぬ爲にするので、壁を厚くするのは、密閉して、日光に熱した外氣を遮斷する樣にとするので、日本の開放主義とは全然反對であるが、空氣が又日本とは違つて乾燥して居るから蒸し暑いなどいふことなく、それて少しも差支ない、日中步行いても汗などの出る事は殆んど無い、是れ皆空氣の

乾燥し居る結果直に蒸發し終るからてある、屋根を泥て葺くのは太陽が常に頭の眞上を通るからそれを防ぐ爲てある、地方によつては夜間甚しく涼くなる所がある、左様の處ては夜間屋上を利用して納涼場とする故甚だ便利てある、屋根が泥て平かても彼地は雨量が比較的少いから雨が溜るなどいふ憂はない、下等の生活をする、即ち百姓家の如きへ行つても構造には大した差はない、唯周圍に深い椽側の無い位の事て、厚き土壁式てあるが此様な建築の出來たのは尚色々他の事情にも由るので、上述の如き理由のみからてはない、例へば建築材料の上より言へば、樹木は椰子の如きヒヨロ〳〵した高いものがあるけれども、堅實なる建築適材とては存在せない、それ故石若くは土といふ方が木よりも手輕いといふ様な事も慥に一原因を爲して居る、

亞拉比亞の方へ行くと又一種特別の建築がある、私の通つて見た所はパレスタイン、シリヤ沙漠地方に住む亞拉比亞人の家だが、此地方は熱帯といふよりは寧ろ亞熱帯地方てある、此邊の上流の家屋は中央に中庭があり、之を取捲いて四周に室がある、建築材料は石若くは煉瓦て、之を積み上げて造つてある、そして外部には只壁あるのみて窓も何も有りはせぬ、假令窓が有てもそれは極めて小いものてある、空氣も光線も一切中庭からのみ取る、中庭には噴水の設けが有るから空氣はそれが爲に盡く冷却されて室に入るし、光線も中庭て幾らか弱められて來るから、室内はその爲に適常よりは涼しく爲るのてある、即ち直接外氣又は光線に觸るゝことを避ける趣向てある、或る家に於ては一つの建物の中の、即ち玄關の處へ噴水を置く處もある、其處は盡く大理石を敷き詰め、それを取り圍んて三方に室がある、是は畢竟水の自由になるのと大理石などが澤山な爲からてあろう。

埃及へ行けば、大體の方針は前に印度の所で話したと同様てあるけれども、一見唯豆腐を大きくした様な觀がある、即ち白壁て、それに小さい穴がポツ〳〵穿いて居るばかり、城の建築といつても宜しい、矢張り

壁を厚くして熱を防ぐ工夫がしてある、其他亞弗利加若くは南洋諸島の建築は行つて見た經驗は無いけれども、描いたものなどを見ると、只假小屋見た樣のもので建築といふ程の値打は無い。

要するに熱帶建築として熱を防ぐには他の法は無い唯壁を厚くして外氣を防ぎ、窓を小さくして强い光線を弱めしかも通風を妨げない樣にし屋根は成るべく熱の不導體で葺き、天井を高くするのである、日本などは溫帶であるから暑いといつても知れたものだ、只日本は非常に濕氣が多い、斯樣な地方は外には無い、梅雨季よりして夏に掛けては家の中は殆んど蒸風呂の中の樣である、此樣な土地では勉めて空氣の流通を能くせねばならぬから、如上の諸國の建築を直に眞似なとするのは適當な方法でない、矢張り夏は開放式でなければ堪えられぬ、その代り冬になると寒風の襲擊に堪えないで縮み上つて居なければならぬ、この點から我日本の住家建築は即ち一種の熱帶建築即ち夏向きの建築である、

要するに夏にも宜しく、冬にも宜しい家屋即ち防暑防寒兼備のものが一番理想的な完全なもので、之を造ることは必しも六ケ敷いことでもないが、我國に於て東北は勿論北海道に至るまでこの夏向きの建築に常住して平氣で居るとは、さても習慣の力は恐ろしいものである(筆記校閱濟)

ワイマールの追懷

文學博士　桑木嚴翼

此頃ヒユーネカーの『主我家』を漫讀してニーチエを論じた條に來ると、今ワイマールのニーチエ文庫にな

つて居る番人夫婦の家に關する記事があつて、端なく二年前の記憶を喚起した。

伯林一年間の滯在は旅行好な原君と正反對で、動靜の二極とまで知つた人には謂はれて居た。尤も時には近郊へ遠足位せぬことはなかつたが、自分獨りでホテルの選擇やら道順やらを研究したことは一度もなかつた。然し愈時節到來、約六週間の豫定で南獨から瑞伊を旅することになつて、七月末住み馴れた伯林を出發した。初についた所はドレースデンだつたが、こゝには伯林で半年起居を共にした新村君が居たから、やはり旅に出た心地はしなかつた。こゝから次に泊つた宿場がワイマール。十九世紀の獨逸文化の中心獨逸哲學の搖籃たるワイマール、イエナが自分の歐洲に於ける眞の初めての旅行地であつた。

荷物をとある宿屋に預けて其日はすぐイエナを急いて見物したが、其話は今こゝでは省いて置く。翌日は終日ワイマールの舊蹟を歷訪し、ゲーテの舊家を見て自分の學んだ小學校よりは理科の器械標本の多いことなどに感服し、シルラーの書齋を見て其窮乏のさまに憐憫の情を起し、公宮の詩人室やシュタイン夫人の舊跡などを見て當時の社交場裡を想望し、公園に入りて先づゲーテの山莊を訪ふ。百年前の獨逸諸侯の奢侈も知れたものだといふ感じを既に交々起したことだから、此別莊の見すぼらしいのも驚くに足らないがとにかくゲーテが今生きて居たら、こんな粗末な茅屋で、シユタインを慕ふもないものだ、と自分で呆れたらうと思ふ。番人の老婆を庭前で涼みながら經緯を綴つて居た、孫娘が案内をしたり、繪葉書などを賣つて與れた、多分十六七歳位だつたらうと思ふ、獨逸の田舍娘にありがちな容子だつたやうに覺えて居るが、此靜かな所でかういふ番人を見たのは兵隊上りの明亮な音聲で元家老職ゲーテ殿邸の說明をするのを聞くよりも遙に詩的なとは言ふまでもない。余は貧弱な自分のゲーテ文學の中から此娘に比べられさうなものを探出して獨りで興に入つた。然し今自分の追想は此點ではない。

四五人の婦人連れが馬車で此前に止まつた。自分は

此閑靜な下屋敷――今も文鎮の寫眞て始終想起して居る――を出て黄紫の野花が咲き亂れて居る所を案内記と同伴てトボ〳〵歩んて行つた。案内記に書いてあるだけて大抵見はぐさず、さてどうてもよいとは思ひながら、此邊に音樂家リストの家がある筈だ、どこかしらと、地圖讀みの格別に下手な自分はいろ〳〵に苦心して居る。と、突然近傍の棄石に腰かけて居た汚ない服裝――自分と比較したら何方とも言へぬが――の中老人が、何を探して居るかと問ふ。變な奴、よく港などに居る案内者の類かと思つて、好加減に返事をして居ると、自分も散歩して居るのだから此邊の名所を敎へてやらうとついて來る。迷惑とも思つたが、仕方なしに話をして行くと、彼所の沙翁の像を見たかといふ何だか此方が打解けないので、自分は案内者てはないから心配するな、自分は詩人だといふ。是は面白いとそろ〳〵話をする。さて此老翁の言ふ所を綜合すると、此人 Wolfgang Arthur Jordan といふ、ゲーテとショペンハワーとの名を交ぜたやうな人て、其兄 Wilhelm Jordan はニーベルンゲン歌を今風に書き直したりして名が知れて居る詩人だが、此人もいろ〳〵詩作を試みて、今は脚本に手を出して居るさうだ、既に二三種の作もあるが何れもまだ上場はされぬといふ。詩集一卷がある、Dichtungen von W. A. Jordan といひ、三版が出て居るさうだ。先づ舊派に屬する方て、今樣の印象派とか口語體とかとは沒交渉だ、然しゲーテシルラーなどよりは今の人に面白いといふ御吹聽だつた。――其後つい其詩集を見る機會がないが、讀者の中には御承知の方もあるかも知れない――先ゝ話をするから、自分も日本には中々新しい歐洲文學が入つて居る。デーメルだとか、リリエンクロンだとか近頃(其頃)の新聞にかなり詳く紹介されて居た、などと話をしたが、此失意(だかどうだか知らぬが)の詩人は勿論自己はそんな人より以上と信じて居るらしい。そんな話して持ち切つてリストの舊家へ來た。リストと其の女婿ワグナーとの遺物があるといふので自分だけ獨り入つて見た。番人の品のよい御婆サンに舊主人リストは若い時は美

しい人だつたと散々說明されて、中判の寫眞を一枚買はねばならぬやうになり、家を出て見ると待つて居る筈だ老詩人はもう見えなかつた。今日は老人何か詩興を得たかしら。然し自分が此一文を草するに至つた動機は此人の追懷ではない他にある。

案內記を見ると公園から出て十五分位の市端に近世の奇傑ニーチエの文庫がある筈であるから、まだ日も高いし是も一ツと道を探して行く。町はづれに出てかなり長い坂をダラ〳〵と上る、觀れば終日步き廻つた名所舊蹟が手に取るやうに見えて、狹い町の人家はすぐ畑や山とつゞいて居る。猶上ると新樣式のギラが見える、門には Nietzsche = Archiv と書いてあつたと覺えるが、そこに別札で Geschlossen と記してある。Geschlossen! 面白い語だ。まだ此地の生活に慣れない中、新聞の廣告で一週間分の劇場番附表を見て居ると、或曜日の所には數ヶ所の劇場に皆此語が書いてある。迂かり口をすべらして、妙に同じ題目をやるものだなア、と言つたが最期、口の惡い同席者の物笑いとなつた。此時にはまさか之を此家の持主の名とは思はなかつたが、聞く所によれば此家は此天才の妹フエルスター、ニーチエの持家で、天才の病氣が最早不治と定まつた後、病院から移された生ける遺骸の藏め所となつて居たのだが、其後諸學者有志家の相談で、ニーチエに關する一切の遺物を蒐集することになつたといふ。然らすれば、行く〳〵は「ゲーテハウス」などに劣らぬ舊蹟となり、リストの召使以上の知識と同情とのある哲人の實妹から新しく「兄は」といふ說明を何人も聞き得る筈だらうに、今は如何なる都合か「閉鎖」とあつては仕方がない。「要なき人を待申候」といふ格ですご〳〵歸らうとすると輕裝した若い旅人が來る。門の掛札を見て此人も大失望の體。何の機會だつたか忘れたが、此方から語をかける、此旅人は折角來たものだから殘念だといふので念の爲門番を呼出して談判を試みたが、制服の守衞先生頑として應しない。主人公たる妹氏も其頃は不在らしかつた。こゝて二人の旅客は如何ともすることが出來ず、暫く景色を賞しながら元來し道に引

かへす。旅客は想像の如く米人であつた、日本人から獨語で話しかけられたのを意外に感したといふ。ニーチエに就ても多少話を取り交したが、日本と米國との双方でニーチエが流行るとか流行らぬとかいふ位の事に過ぎなかつた。其中話が今日見たゲーテ、シルラー等の舊蹟と轉し、此旅人は連にシルラーの薄命を憫み、ゲーテの生活の當時にあつて豪奢と稱し得べきことを述べた、倖運見(グリユツクスキンド)だ！と評して居た。話しが伊太利に轉して、此人は月夜ヴエネチアに舟(ゴンドラ)を浮べたことを說いた、文士か、學生か、美術家か、或は平凡な旅客か、話しを其處まで進めることは出來なかつたが、とにかくわざ〳〵ニーチエの舊蹟を探くらうといふ人だから我黨の士に近いものだらうと懷かしくは思ひながら、話の熟せぬ中に、岐道に來てとう〳〵名も問はず告げずに別れて仕舞つた。

此旅客は猶數日ワイマールに止つて居たかどうか知らない。旅客か果してチーチエの遺妹と話しをし得たかどうか知らない。然し異郷で旅客と話すのは其國人と語るよりは印象が深い、旅客の面貌は其後屢見る活潑簡單な米國型といふことだけしか記憶せぬ位、其人に關しては何等知る所がないがもし此人が何かニーチエとか藝術とかに關する著述でもある人であつたら：……イヤさうだと信したい、と常に思つて居た。自分は後に萊府へ移つて其地の先輩三浦君に導かれて、四時間里程を汽車の都合で徒歩して、ニーチエの生地で又埋骨の地たるレツケンを訪ふた。頑童の時に遊だらうと思はれる古沼に群居る白鳥を興ありと見て小やかな田舍寺の墓地を弔ひ、橫に伏した墓碑を見て、まだ見ぬが故樗牛の墳墓を想起し、墓側に咲いて居た菫を帋巾に押して歸つた。以來ニーチエに就て今少し餘計に知りたい、と思ふ氣になつたが、知識の上はとにかく、此哲人とは心持ちの上に於て前よりは親しくなつたを感ずる然してニーチエを想出す時には其廢頽せる墳墓が念頭に離れないが、之と共に新しい瀟洒別莊風の文庫と其處で會つた米國旅客とを想出さずには居られない。

Egoists の著者 Hunoker は音樂の評論家らしい、ニーチエ文庫を訪ふて親しく管理者妹氏に面會したらしい其人は多分書生體の若人てはあるまい、あの旅客は先づ學生位だらうと思ふが、然し文庫の事を記した米人、とこの所てどうしても過ぎし年の事を想出さずには居られぬ。事實はどうてもかまはぬ、自分はあの旅客をヒユーネカーと信して置きたい。そしてワイマールの追懐に傳奇的な意味を附けたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

似た例を一つ附け加へて置かう。數月前の新刊書批評中に黒人某が其種族の爲に氣焔を揭けた著書の紹介かあつた。題して The Story of the Negro. The Rise of the Race from the Slavery といふ。著者Booker T. Washington は米國の國人らしいが、此書は倫敦の書肆から出版されて居るので、此著者か倫敦に滯在して居たと想像する餘地かないでもない。是て想出すのは自分か倫敦の二ヶ月を持て餘して日々大英博物館の圖書閲覽室に通ひ、此室の歴史によると、佛國革命の時逃竄の貴族僧侶學者たちが爲る事のなきまゝ皆此處に立て籠つたので、當局者の方ても切に狹隘を感して建て增しをした事などを想起したが、此時やはり此室の讀書子となつて居た黒人が居た。高帽フロックといふ扮裝、もとより印度の學生のやうに堂々たる風采てはないが、荷揚場や東區邊に漂浪して居る無賴漢よりも上品には見える。然し此讀書家はやゝ滑稽的な面付だつたが、時々此附近て遭遇する中年の黒紳士があつた、其容子は如何にも鷹揚て悲憤慷慨的の面魂だつた、滑稽的なハイカラ黒人か、或は志士的な老紳士か、何れかゞ此書籍の著書てはないかとふと感じた。何時までも反證か上らないて自分をして想像の快樂を永く續けることの出來るやうになるのを望むて居る。

換氣法

工學博士　中村達太郎

換氣とは空氣の新陳交代の謂ひてある、空氣の交代せざる室内に永く居れは遂に窒息して死するに至るのてある、巴理人は自殺を企つるとき室を密閉して目的を達するの習慣多しといふ、これ人が毎呼吸に空氣中の酸素を炭酸瓦斯に變じて漸々空氣を汚穢ならしむる故てある。幸に日本風の座敷に於ては障子襖に罅隙多く、其他椽側、天井周壁等に於て空氣の出入し得る孔口極めて多い故、たとへ障子襖を閉め切るも、密閉の處は少しも無い。又假に罅隙を密封せりとするも空氣は障子の紙、板、などを滲過して自由に出入し得るのてある。故に日本座敷に於ては窒死する患は無いのである。其代り冬日は寒氣に堪へがたいから一利一害は免かれぬ。

煉瓦造、石造などに於て巧に構造されたる家屋は罅隙も無く從て空氣流通も不完全てある、尤も煉瓦ても石ても空氣は滲過する力はある、硝子ても然りてある然れども滲過力の程度が紙及び板などに比較すれば微々たるものてある、是故に良き煉瓦造などに於ては天井及ひ其他適宜の處に孔口を設け、以て空氣の流通をさせることが必要てある、これ即ち換氣法の初歩てある。

さてたとへ新鮮なる空氣中と雖も、多少炭酸瓦斯は混入し居るもので、先づ空氣一萬分中四の炭酸瓦斯は普通あるのてある。若し漸々增して一萬分中六となれば最早人には有害となるのてある。若し高七尺の八疊敷座敷に一人居り且之を嚴重に密閉して完全に空氣の出入を妨碍し得るとすれば其座敷內の空氣は僅に二十分にして有害となるのてある。若し二人居れは十分に

て空氣は有害となる。

されば室内の空氣を常に清潔に保たしむるには一定の新鮮空氣を室内に輸送し、汚穢となりたる空氣を室外に排除することが必要てある。是の如く室内空氣の新陳交代を稱して換氣といふのてある。

されば汚氣の出口及び新氣の入口を有せざる室は又換氣の設備を有せぬのてある。完全なる其設備を得んには必らず前記出口及入口を要するのてある。

空氣を汚穢になすものは人の呼吸のみならず他にも澤山ある、燈火、爐火、等何れも其原因てある、又人の皮膚より發散する氣も亦呼吸と同しく之を汚穢になすのてある。それ故健康體と病人とを比するに同時刻に空氣を汚す程度は病人の方遙かに多いのてある、就ては病室に於ては空氣の新陳交代を普通家屋よりは頻繁にせねばならん、且完全に設備するの必要がある。其他劇場の如き多人數を收容する處に於ては換氣の設備が極めて必要てある。

是の如く必要なるに拘はらす換氣法に注意し始めたのは餘り古くては無い、十九世期に至りて英佛等の國々て試驗を行ひ漸々發達したのてある。千八百四十三年に於て佛國にて正當の換氣裝置を有する病院は唯一つありしのみてある、英國にては千六百六十年サー、クリストファー、レンは燒失前の下院議場の天井に孔を穿ち之に筒を立てた、これ甚不完全なる設備てある、即ち換氣とはいへぬのてある。千八百五十二年には焚火と煽風機の力により議場の換氣を行へり、其方法は幼稚てはあつたれど科學を應用して大室に換氣法を施こしたるのは記憶すべきてある。千八百五十四年に更に改良を加へ外氣中に含有さるゝ汚物を排除するため濾器を用ひて淸潔となしたる後室内に輸送する樣になし、其他種々の改良を施した。千八百五十六年には英國衛生局に於て住宅の採溫換氣法を調査せしむるため委員を設けた。又千八百五十七年には兵舍及病院の換氣調査委員が設けられた。同時に有名なるクリメア戰爭ありたる故兵舍及病室の換氣法研究盛んに起つた是の如く換氣法の研究は前世期の中頃に於て始まり其

末に於て先づ成功したのてある。

換氣法を大別すれば

一、自然流動法

一、火力幇助法

一、用機煽動法

の三つとなる。而して之を說明するも讀者に何等の興味を與ふること無かるべしと思ふ、故に余は玆に擱筆して讀者の倦怠を短からしめんと欲するのてある。

支那の扇子の話

玉川堂主人

支那のお扇子は一體長いものが多いので、一尺から一尺一寸位のゝが普通て御座います。ても此頃は段々短かくなつて參りまして、一尺から九寸位ののが多く出來るやうになりました。中には八寸位のゝもあります。私の店ては多く上海から取寄せますが、私の店丈けても年に三千や五千は賣れますから、日本全國ては可なり需用もありませうけれども、而しまだ〳〵支那のお扇子をよく知らない方が多いやうて御座います。主もなるお客は矢張り文人、畫家といふやうな人々てあります。

紙はよし、竹はよし、そして職人の生活が日本よりも安く行きますから、仕事が念入りに出來て居るのてどうしても日本のゝより上等の品が多いのてす。紙がよいから墨色がよく出ますし、竹がよいのに磨きが叮嚀てすから光澤が大變よろしいのてす。紙は普通は扇面紙、藏經牋等て、又絹地のものも少くないのてす。骨は支那人の最も吟味する所て象牙、鐵刀木、白檀等が多く用ゐられます。中には象牙に細かく彫物をした者な

どもあつて、それ等は一本五六圓のも少くないのです。婦人持のものは幅が半分位のもので、象牙に彫物をした骨のついたものでも三四圓位のものです。普通の塗骨や、竹などに蔵經牋や、扇面紙を刷つたものだと三四十錢から二三十錢も出せば可なりのゝが買はれます。日本の扇のやうに器用に出來ては居ませんが支那扇の方は遙かに品がよい割合に安いのです。

又支那の扇子の特徴の一つは紙を親骨丈けに刷つてあつて、子骨には刷らないのです。子骨の當る所は袋のやうな形になつてゐて、其袋のやうな所に子骨を揷めるのです。だから親骨だけ糊をはなせば、あとは拔き差し出來るやうになつてゐます。これは支那の扇は骨が大變よいのを使つてあるから一つの骨に扇面を幾枚も刷り換へることが出來るやうにする爲めて扇面にはいろ〳〵な書畫を書いてあるから、時々に取換へて見る便宜もあるのです。

支那の扇子が今少し世の中に知れたら、日本に於ける需用も確かに殖えるだらうと思います。（完）

東西の宗教畫歷史畫

文學博士　黑板勝美

歐洲見物の一半を博物館に費したる小生は又その半を美術館の視察に費しました、英國ロンドンの國立繪畫館は美術史研究に尤も都合がよい樣各時代各派の傑作を蒐集して居ます、佛國巴里のルクゼムブルグ博物館は近世の歐洲美術を支配するといつてもよい佛國大家の作を網羅して居ます、また伊太利フイレンツエのピチ又はウフイチ繪畫館は絢爛花の如きルネイスサンス時代を代表して居る、また獨逸ドレスデンの繪畫館

はラファエルの傑作中の傑作シスチナ、マドンナ一幅によつて名聲を他の第一流の繪畫館と等うして居る、といつた風に歐洲各國、大小强弱の區別なく皆繪畫館を有してその誇として居るのです。

　それて流派をいつたらいろ〳〵區別も出來ねばならんてしやうし、國によつて時代によつて之を論評せねばならぬので、一寸こゝに御話することは六ヶしいと思ひますから、少しくルーベンス、ヴエラズケーズ、またはレムブラントのやうな前代の大家によつて描かれた歷史畫や宗教畫について得た私の印象を申しましよう。

　歐洲の人物畫と風景畫とを比較するに、誰も知つて居るやうに、人物畫の方が餘程うまい、山水畫によいものもあるが、東洋のものゝ樣に漂渺たる神韻が足りない、たゞ自然を樂むといふにはよいか、自然の大きな力を認めらるゝものが少い、そして我々には特に人物畫がその價値以上に傑作であるかのやうに見ゆるがこれは恐らく東洋繪畫に於ける人物畫が割合に感心すべきもの多からぬが故てあらう。無論或時代には我が國ても佛畫などその絕頂點に達した時代もあつた、高野山の廿五菩薩など、フラ、アンヂエリコあたりの傑作と比較しても決して遜色はないのみならず寧ろその上に出てゝ居るといつてよい。また信貴山緣起や伴大納言繪卷などをはじめ藤原末から鎌倉時代を通じて盛に行はれた繪卷物の中にはその人物の活動せる有樣實に何ともいへぬものがある。が名家の後も忽ち一種の型にはめたやうな形式に捕はれた繪を書くやうになつて仕舞ふのが通弊て、時代が下るに從つてまた見るに足らぬものとなつて仕舞つた、そして既に之を拜むために描かれるので、彌陀なら彌陀、觀音なら觀音とそれのみを主として描き、普通の人間なるものが現はれぬ、それ故サブリミテーは表はれビユーテーも現はれるけれど、ヴアイタリテーの方は割合に見ることが出來ぬといつてよい、繪卷物にある普通人物を描がいたものにも大分偉いものもあるけれど、一々その人物の性格を現すこととなると、日本畫は到底西洋畫に及ば

ぬ、又近來の歷史畫を見るに、時代の服装儀式等は大分能く研究して描いたのもあるし、又多少近來は、日本畫にもモデルを使ふといふ遣り方を見る樣だが、扨て出來上つたものを見ると、日本畫はまだ西洋畫の樣にモデルを活かして使つて居らぬ、先達ての歌舞伎座でやつた出雲のお國は中々評判がよかつた、服装も能く調べてあり、髮の結ひ方まで能く其時代が出してある、けれども劇そのものの價値より考ふるに、唯時代の服装を能く現はす丈では劇としての價値が果して十分に現はれるであろうかは問題である、即ち淀君なら淀君、お國ならお國、名古屋三左なら名古屋三左と其個々の性格が現はれて能く働くかが問題である、唯其時代の服装だけ見樣といふのなら宜かろうけれど、別に性格人物を歷々と見え分る樣に現はさうとするならば、服装などは多少間違つても構はぬといふ側にならなくてはなるまい、畫も亦此二點に於ては劇と理の相通ずるものである、然るに日本の歷史畫などを見ると、色々或る題目を捉まへて描いては居るけれども、其描かれた人物が活動し居るかは常に疑問である。芝居で赤顔が惡がたといふ風に型に入つたのは面白くない、其點に於て西洋の歷史畫宗教畫なるものは非常に纏まつて働きを有するもの、一口に言へば究竟(つまり)活きて居るのである。

例へばルーベンスの描いたものを見ると、その宗教畫中の人物を一々檢査すれば、矢張り自分の一番能く知つて居る人物によつて之を組成して居る、又レンブラントが自分自身の肖像に於て尤もその筆力を示して居るが如く、彼は自分の性格ほど最も能く自分に知れるものはないので、それを描いたものである、彼の作品はアムステルダムのリヽクスミユーセムをはじめ、英國、佛國、獨逸墺多利等の繪畫館等にあるが、それには幼年より晩年に至る迄の肖像畫がすつかり揃つて居る或は兄弟と一所とか、或は妻君とか、おつかさんとか初中終自分の周圍に自分と一所に居つて、最も能く性格の知れたものを描いて居るが、其中に非常に傑作がある。これはルーベンスなどもまた同樣である。

ルーベンスの作では宗教畫が尤も傑出して居ると思ふ其畫中に常に彼自身の妻君が描き込まれて居る、基督の十字架よりおろされた時に、其弟子信徒は寄り集つて泣く、其中にマドンナが居るが、それが能く見ると彼の妻君なのである、人が死んだら彼は當に此の如き表情をするであらうと、自分の妻言は丶戀女房をモデルにして描くのであるから、自ら眞情の其中に現はれる事と想ふ。ルーベンスの畫を見るに、何時も同じ顔が畫中に現はれて來るが、これが私は面白いと思ふ、それて能く働いて居る、少しもイヤにならぬ、活きて居る、それ故ルーベンスの作は、其筆力畫風でも分かるが、描かれた人物の顔貌て見分を付ける方が却つて早いのである、

ゲーテが曾てルーベンスの評をした事がある、キンケルマンと云ふ人がゲーケに語つて、ルーベンスは仲々大家だといふが、彼の作中に、人間の影は右に爲つて居るのに樹の影は左に爲つて居るのがある、彼の樣な偉い人ても彼の樣な間違をするといつたに、それに答へてゲーテの曰ふ樣、それて宜しい、そこがルーベンスの偉らい處てある、畫工は天然の法則を知らねばならぬけれども、盲從を要せぬ、時には却つて自然を制馭すべきてある、アーチストは決して自然の奴隷てはないと、是は一面に於ては西洋畫の物を寫す場合に自然に拘泥し過ぎる弊を指摘するものだけれど、又一面ルーベンスが、自分の知り居る人間を特に刺激して描く、それは或る場合には自然ではないけれども、自然以上に出てて人に感興を與へるからて、此處に美術の値打があることを語つたものだ、是が歴史の研究と美術の研究との違う處てある、歴史ならば其時代のものとなつて飽く迄考へるべきて、少しても今の考になつて考へるなら必ず間違を生ずる、けれども美術は必ずしも其時代の思想にならなければならぬ義務は無い。

日本にも一寸これに似寄つたものがある、畫卷物の中て例へば河内の譽田八幡には神功皇后三韓征伐の繪卷物がある、それは足利時代、即ち六代將軍義教時代に描かれたものだが、それを見ると、決して上古の戰

爭では無くて、如何しても足利時代の戰爭である、人物は盡く其時代の人物である、甲冑を着て居るし、船なども鎌倉時代足利時代に支那邊と交通した如きものが描かれて居る、斯樣なものでも若しそれにして書家の本來目的を達し、神功皇后三韓征伐が出てさへ居れば結構なので、必ずしも神功皇后時代を調べて描くことが第一要件ではない、それをも得られたならそれに增してよい事はなかろうけれども、左樣はせずとも尚ほ神功皇后の征韓といふことが頭に來るならば宜かろう、能く楠公訣別とか又は兒島高德の櫻樹を白する處とか、其樣なものが多く描かれてあるけれども、格別深い印象を與ふるものはないが、是れ皆畫中の精神が活動して居らぬ爲てある。

日本ではモデルを使つても誰といふお構ひが無い、モデルを稽古するは宜いけれども是では駄目である、常々共に居り、自分が能く其性格から何もかも一切知り拔いて居るものを捉へて描くんでなうては其モデルは眞のモデルには爲るまいと思ふ。

又エラスケーズの作品を見たが、其中に西班牙王フイリップ三世四世の肖像畫を大きく描いた者がある、孰れも皆活きて見える、是は彼が初中終王に昵近して其性格を知悉して居たからであろう、特に此エラスケーズの畫で感心したものは、羅馬のガレリアドリア即ちドーリヤ繪畫館に行つて見ましたに、イノセント十世の畫像がある、實に是は傑作だと思つた、非常に陰險な、人を人とも思はぬといふ顏で、羅馬法皇の勢力の極盛時に於て、各國の帝王を自由に頤使したといふ頃の相が歷々と現れて居る、誰れ位陰險な顏に描れて居つてそれで、毛筋程の厭味も寫されて居らぬ、此繪ばかりは三度も四度も重ねて見たもの、その近邊を通過する每に、自づと其畫に引き附けられて立ち寄つて見たといふ程であつた。

日本に肖像畫といふものは何時頃からあるかといふに、隨分古くからある、先づ平家の末頃からで、其頃のものも今現存して居るので後白河法皇の宸影など結構なものである。殊に禪宗の日本に入つた時には禪僧の

肖像が多く、其中には多少見るべきものがあるけれど、殆んど型ばかりを描いたものでだん〳〵肖像畫としては薩張り價値の無いものとなつて居る、浮世繪などは其時代の風俗を知るものだけれど、性格などは薩張り現れて居らぬ、即ち畫として見るに活動が缺けて居る、唯渡邊華山のやの弟子の椿々山の作品に、肖像畫として活き〳〵とした善い畫がある、華山の描いたもので一番有名なのは、彼の先生なる鷹見泉石の肖像である、是は僅かに國華にも戴つたかと思ふ、椿山の畫にも華山の肖像がある、南畫の方で、筆は細かく柔くはあるが、實に能く人物の活躍して居るものがある、それ故日本畫とて決して肖像畫に不適當なりとは思はぬ、華山等は既に成功して居るでは無いか、それには司馬江漢等の描いた西洋畫の影響がある、華山は蘭學を修めたから、又西洋畫をも自己の渲染の參考にしたのではなからうかと思ふ。文晁のにも肖像で成功したものがある。先づ我國のもので、肖像畫に於て最も感心すべきはこゝらあたりの人であるが、是れも能く自分の先輩とか先生とかいふものを描くのは、其性格を最も能く知つて居るからであらう、肖像畫は歴史畫若くは宗教畫の本であるから、之を善く描くことが出來なければ到底歴史畫宗教畫に於ても好いものは出來ないと思ふ、此點に於て今の日本の歴史畫及宗教畫は用意が缺けて居る、歴史畫といはずに或る意味に於ては風俗畫といふ方が宜いかも知れぬ、

人物畫をモデルで研究することはミケルアンジエロもやつて居る、伊太利のフロレンスの一博物館にはミケルアルジエロの遺物が今も保存されて居るが、それ等のデッサンにも色々人體の模寫があり、筋肉の具合なども研究されて居る、又オックスフォードのモシユレアン博物館にもミケルアンジエルの描いた右様のものがある。羅馬のバチカンのシラナナチヤペラ、其處に懸けてある壁畫はミケルアンジエロ一代の傑作と稱せられて居るものであるが、壁畫といふも實は天井畫で、天井から欄間の上に掛けて一面に創世紀を描いたもの、有名なもので、羅馬の地を踏むものは皆一度

は行くべき處となつて居る、凡ての人物が盡く活動し、精神が鋭く現れてしかも崇嚴の上に於て天下一品である、ミケルアンゼロの伎倆は此書に存在して居るのである、畫と同時に彼の得意は彫刻であつた、そしてマーブルの彫刻にも亦畫と同樣の精神が現はれて居る、例へばフロレンスにあるダビットといふ大彫刻がある、又同市にある有名なメヂチーといふ家の寺に彫つてあるものなどを見るに畫と同じて、平面に見れば畫、立體に見れば彫刻と爲るといふ丈のものである左樣の方面の研究にも餘程根底の深いものがあるので、日本畫など描く人の準備とか用意とかいふものに比すれば餘程相違のある樣に思ふ。

例のラスキンの爲に有名となつたターナーなどの者は、言はゞ、一種の新派、惡く言はゞ朦朧派ともいふべきもの、嘗て日本美術院派の喜んで描いた作品の樣なもので、何處が好いか惡いか寫眞などては分らぬのだけれど、英國に趣きナショナルガラリーに行つて見たに、其若い時に書いたデッサンがある、ターナーの描いたものゝ遺物などが澤山ある、それ等を見るに、其朦朧派體を書き出す前の作品には仲々その研究を見るに足るべきものがある、彼の描く朦朧體派の畫には能く船がある、能く難破の處とか、船火事とか、トロイ戰爭中の船の畫なといふものがあるが、善い位加減に書き附けたものだろうとばかり思つて居つたら、遺物を見ると船のスケッチなどが發見せられた、即ち彼の描き出した一新體は十分研究の結果になつた者て、一々畫に根底がある、決して徒らに見ただけを描き形を模する丈のものてはなく、已に根底があつた、それから其の目に映じた儘を書くといふ風である、それ故見るに從つて漸次に妙處が目に映つて來るのである。彼の歷史畫宗教畫には活き／＼した中に一種の風韻がある。

ルネッサンス前と後即ち十七世紀頃の畫とラフエル、ミケルアンジエル以前、古い所ていふと、ジオット、フラ、アンゼリコ等の宗敎畫を見るに、藤原時代と鎌倉時代との相異がある樣だ、日本の佛畫などを見る時に

は、佛様の顔が人間らしくなり居るか神様らしくなり居るかによつて余は時代が分る心地がする、人間らしくないものは藤原以上てある、鎌倉以後になると人間の顔になる、是が丁度西洋のルネッサンス以前と以後とに符合する様に思ふ、即ち西洋の宗教畫にあるマドンナは想ふに佛教の觀音とその位置が能く相當して居る藤原以上の觀音様が、ルネッサス以上のマドンナと餘程類似の點があるが、ルネッサンス以後にはすつかり人間に爲つて居て最早や神様てはないが。只氣高い美しい婦人が現はれて居るのてある、余はジョット以下の伊太利の大家を日本の惠心仁海その他宅磨派の人々など丶比較したらば面白いてあらうと思ふ。そして進んてルーベンス、ヴラスケーズなどの宗教畫が、人間らしく活きて居るのが宜いか惡いかの問題も生じやうがそれなら此處に改めて一歩を讓り、單に歴史畫丈に付いてなり、この要素が我が國の繪畫に尤も必要なものといひたいのてある。

歐羅巴ては宗教畫といへば多く基督の一代記を描くのだから、詳には宗教的歴史畫とでも言ふべきてある。斯うして見ると十七世紀頃の名家の畫及び尙近代の畫の方に値打が有るかも知れぬ、是が時代の嗜好の趨勢てありはせぬかと思ふ。無論ミケルアンゼルの天地の創造なども非常に宜しいのはいふに及ばぬけれども、後の畫家は其型以上に出づるとが出來なかつた、またラファエル以後伊太利の美術は衰へて皆デコレーチヴとなり了つた、否ラファエル自身が已にデコレーチストてあつたのてある。バチカンにはラファエルロージといつて廊下がある、其廊下に描いてある畫はルネッサンス時代の裝飾として最も宜きものと爲つて居る。

其處て十九世紀に入つてラファエル前派なるものが生じた、是はラファエル以前の畫風に注目すべしといふ主張て起つたもので、一種の復古派てある、けれども亦昔の風物を其儘に取ろうといふのてはなく、唯其以前の精神を以て敢て今のものを寫すといふに過ぎぬのてある。之を日本の支那畫ていふと、丁度雪舟に似て居る、雪舟は宋時代の夏珪とか馬遠とかいふ人の畫

風を採り、其書風を本にして更に自己の天才を以て能く描いたのである。斯うするには多少古書の寫模といふ事も、一方には忘るべからざるものと思ふ。

古書の模寫には隨分議論も有る事だが、之を眞似て全然古い書に爲つて仕舞つては惡いけれども、古書の精神の如何なる處が今日の書に清新な味を附け加へ得るかを見るには、矢張り其研究を等閑に附すべきものてない、唯古書を以て美術史の材料とのみにしてはならぬ、今日の日本書界の如き之を如何にすれば宜きかと考ふるには、一面如何しても古書の研究の必要がある。

それには博物館の設備を考へなければならぬと思ふ、今日の樣な有樣ては志有る人にも左樣な事を爲し得ないのである。歐米ては博物館にはスチユーデントデーといふものが、一週に一度若くは二度位あり、一般人には入場料を高くして學生丈を無料にする、即ち平生無料の所が其日には一シルリングか一マークも取る、斯樣にして一般の入場者を防ぎ、雜踏を避けて學生に便宜を與へ、而して申込の順序により繪畫の模寫をさせる是れは又一方から言へば畫工の經濟を助ける事になる、一本立て飯の喰へる樣になるには餘程偉らくならなければならぬのだ、それ迄は衣食の道が無い、それ故古畫を寫して模寫として賣る、すれば研究と同時にそれによつて資金を得て修業が出來る、そして一本立になるに至つて之を止める、此事は同時に美術思想養成の上に良果を與へる事となる、古畫の實物は價貴くして容易に求め得ぬものであるが、其模寫を買つて普く家に藏するといふことが望み得られるからである、此點に何とか具眼の士の注意の向はんことを欲する。

(筆記校閲濟)

人物評論（八）

龜井總監論



△龜井總監論

靜觀居主人

龜井は肥後の人間て、そして縣知事から出身して警視總監になつたのてあるが、同じ肥後の人間て縣知事をしてゐる人に、或は龜井よりも警視總監に適當てないかと思はれる人がある。例へば福島縣知事の宗像政の如き、あの人などは警視總監にしたならば隨分エライ警視總監になるかも知れない。獨り警視總監ばかりてなく、臺灣の民政長官にしても或は統監府の總務長官にしてもエラィものかも知れぬ。要するに宗像は縣知事中ては最も鋭いてせう、さればといつて其鋭さが餘り見えない人だ。光澤消しだ。其外同じ肥後出身の人て、名古屋の知事の深野一三なども少し穩和過ぎるかも知れぬが、立派な警視總監になれる。然しこれ等の人は中央て屬僚をやつた事のない人だ。深野は一寸位やつたかも知れぬが、中央からお引立に預るやうな因緣を持つてゐない。そこになると龜井は餘程因緣を持つて居る。多分今の內務大臣が內務大臣になつた時自分が法制局て使つた屬僚の中から詮索して龜井を總監にしたてあらう。屬僚中てやるならば龜井が一番よかつたんてせう。そこて龜井に落札したのはチツとも無理がない。

處て、龜井其人はあゝ見えて居つて、機敏に仕事を運ぶといふ性質の人だ。氣の附いた事をサツサとやつ

て行く。そして氣の附く事も亦なか〳〵早い。そこて警視總監として決して不適任の人てない、多分平田さんをして不滿足を感ぜしめて居る處がなからうと私は思つて居る。或は平田さんは今の警保局長の有松を警視總監にしやうかといふ考を起したかも知れぬ。けれども矢張り有松を警保局長にして龜井を警視總監にした方が適任てあつたに相違ない。そして龜井の一つの長所は毒のない人間だといふ事てある。て龜井が警視廳て直ぐやつた仕事は表面にあらはれた事は色々ある例へば掏兒の檢擧などはなか〳〵エライ。がそれよりも一番龜井の頭を惱ましたのは其部下の選擇てあらうと思はれる。其部下の選擇といふ事については私は充分の成功とは思はない。さればといつてまア失敗てもないとして置きませうかネ。

そこて警視總監として先代〳〵人達との比較だ。龜井が今後どういふ手柄をやるか知れぬが、警視總監が政治の機密を司つて、總理大臣の手先となつて、政黨間の操縦に手を出すといふやうな事が今後も必要てあるとすれば、それは到底も〳〵大浦には叶はない。然しながら最近の警視總監たりし安樂てあるとか或は足立てあるとか或は薩摩の警視總監（安樂も薩摩人てあつたが、安樂よりも餘計に薩摩の色彩を帶びたる）園田安賢などに比しては、政治の機密を司るについても私は優るだらうと思ふ。けれども龜井の腕に適したる方からいへば、さういふ高等警察よりも普通警察の方に力を用ひて何時までも撓まずにやるのが、龜井の爲めにも、東京の爲めにも、延いては日本の爲にもよろしからうと思ふ。東京の今日の警察と、歐米の首都の警察——伯林とか巴里とかの警察と比較したならば日本のはまだ〳〵大分及ばぬ所があるてせう。さういふ所は大いに龜井總監の力に待たねばならぬことゝ思ふ。

△龜井英三郎氏

松井柏軒

◎今の官界て、大臣以下て異彩あるものを求めれば、

何人も安廣冬前、若槻、仲小路の兩次官等に指を屈するてあらう、而して龜井警視總監も亦其の一人てある、床次局長に至ては、迥然選を異にして居る、先づ後藤新平男と併せ稱される。

◎後藤男は才の人てある、能く斬れるやうだ、併し臺灣を我物顔に振舞ふ所など他日必らず蹉跌の禍因を爲すだらうと危まれる、議會ての様子を視ても略々察せられる、其の政敵は臺灣や滿洲ての男の缺點を檢べ上て置くが、唯だそれ丈けては政治問題とするに足らぬから、序の時にサラケ出して目に物見せると力んて居る。斯様な政敵を持つ丈け其れ丈け此の人には瑕瑾がある、併し仲々宜い所もあるが、所詮は才の人、智の人てある、床次氏は未だ大きな舞臺を踏まぬから、大きな善いともせねば惡いともせぬ、隨つて指摘すべき瑕瑾が無いのかも知れぬ、併し人物としては實に渾然玉の如してある、イヤ未だ渾然とまては往かぬてあろうが、必らず渾然たるべき資質を持て居る、洵に大なる未來がある

◎其れは其れとして、本題主人公龜井氏は、熊本出身て永く法制局に居て、故の井上毅子に用ゐられ、殊に今の内相平田男（當時は法制局部長）に少からず信任されたらしい、仲々の理窟屋て、辯論と爲れば挺ても動かぬのて、流石の井上子も持餘し、『龜井は到底使ひ得ぬ』といはれたのを、平田男が蔭になり日向になつて執成したとも一通てないそうだ、或る時などは井上子に伴はれて駿河臺袋町の平田男を訪ふ途中も、議論に花を咲かせて口角泡を飛ばし、飯田橋邊まて遣て來た頃、井上子劫を煮して、竟に辻待の車に乘つて一人て駿河臺へ駈けさせたともあるとか、此の負けぬ氣も知事と爲て大分圓滿と爲つて、良二千石の名到る處に傳へられた

◎本來が物に目鼻を附けずに措かぬ性質てあるから、龐統は百里の才に非ずなど濟まさぬ、細く搗けば低く鳴り、強く搗けば高く響くと自任して居るらしい、警視總監と爲つても、隨分目ぼしい改革は遣るやうだ

◎本堂といふ青森縣かて保安課長を仕て居た人物を拔

いて、赤坂警察署長にしてから、此の人の掏賊の巣窟を覆へす策を献じて來た時、氏は掏賊の根張りの廣く强いとを擧げて『貴公其の細首を亡ふ覺悟ならば遣るが宜い』と勵ますと、署長は一夜熟考しやうと引取つたが、翌朝更に來て『彌よ遣付けましやう』といふ『デハ遣れ』と許したといふ

◎一方に警察組織を改善すると共に、一方にはドシ〱惡黨を掃蕩する、隨分小氣味の宜い遣り方て、歷代の警視總監中先づ以て頌德表を上られる一人らしい

◎併し何處となく才人らしい處がある、といふのは斷乎として動かぬ底の度胸が無い、デハなかろうが少し足らぬ所があるやうだ、是が床次氏などに未だ及ばぬ點てある、茲に修養を積んだら、隨分大きな未來があるてあろう

◎少時の苦學と、艶禍とが根と爲て、ドウも健康が能くない、尤も當人も心を注いて、色と酒とをフッと斷ては居るが、聊か前途の掛念がないてもない、殊に細事も親裁の主義て、枕頭にさへ電話を設けて置くなど恰かも諸葛孔明細謹のやうな處もある、是は氏の長所てあろうが又短所てもある、而して其の人物以て觀るべしてある

△龜井英三郎氏

○○生

評する程の人物てはないネ。まア一言にしていつたら勉強家といふんだらう。然しあの男の勉强といふ裏には詰度名を好むといふ念慮が附き纒うて居る。非常に名を好む男だ。龜井はエライとか、アレは龜井が遣つたとかいはれることが大好きだ。別に大した學問があるてもなし、又主義主張があるてもないが、なか〱悧巧な男て、目先はよく利く。上官などの顏色て直ぐ其意向を察するといふ風だ、あの通り外觀朴訥にして田舍者らしく見えるが其機敏な事はどうして都人士も及ばぬ所がある。長官などの命令があるか、若しくは長官の意向が斯うだと氣が附くと、些しの躊躇もなく

ドシ〳〵やる。殆んど極端と思ふ迄遣る。長官の方ては餘り遣り過ごされては困ると思ふ事があるかも知れない。一體あゝいふ風の頭の男には、分る所は極く細かな所までよく分るが、又眞暗て丸て分らぬ所があるものだ。それだから仕事が兎角極端になるのかも知れない。

あの男は長官には頭を低くしてよく事へるが、部下には人望が無さ相だ。露骨(むきだし)にいつたらあの男に心服して居る部下は餘り無いだらう。一體上に頭の低いものに限つて、下には威張るものだからネ。それて詰り埋合せを取るんだらう。あの男は自ら用ふること甚しく總ての命令が乃公の方寸から出るといふやうな事をしたい方だから、部下に人望の乏しいのも當然かも知れない。

然し今日警視廳てやつて居る事が、皆あの男が思ひ附いたのだと思ふと大間違だよ。ソレア命令はいろ〳〵な處から出るものなんだ。然し其事は今はいふまい。兎に角、勉強家て名を好む男て、いろ〳〵な仕事を一生懸命にやるのも詰り名を好む所から出て居ると見れば間違はあるまいと、我輩は思つてゐる。

△龜井警視總監論

田川大吉郎

二十一二年頃龜井君が大學を出て法制局に入つた。其頃肥後人間の噂を聞いた事がある。德富猪一郎は肥後人中の歐化主義の代表者て、龜井英三郎は之に對する國權思想の代表者だ。要するに肥後人は二君を代表者として二つの思想の消長盛衰を今後に試みるてあらうといふ說てあつた。當時の法制局長官は後の文部大臣井上毅君てあつた。井上毅君が國權派的保守派的思想の統率者なる事はいふまでもない。其人々に見立てられ、其人々の後繼者として愛護せられたる龜井君の將來が斯くの如く多望に期待せられたることも殆んど廿年前の夢となつた。其間彼は全然循吏の生涯を送つて各地共相應の功績を收め、今期の內閣に至て終に現

職に榮轉したのである。彼の經歷に見れば少年の期待に多く背かない。思ふに彼の過去の生涯が斯く順潮であつた如く今後の生涯も必らず相當の榮達をなすであらう。彼は確かに未來ある政治家として朝野に望を囑さるゝ後進政治家の一人である。で、其人を見るに鋭敏餘りあり、其眼は如何なる箱の隅々までも及ぶ、其注意は微として穿たざるなしといふ風である。然しながら問題は彼が包容の德幾何を有するかである、彼にして其微穿たざるなき細心鋭敏の思察に加ふるに、汪洋海の如き包括の度量があるならば彼の將來は必らず今日の期待に背かず大いに發達するであらう、果して其德ありやなきや、私は之をありともなしとも斷定することが出來ない。只此點に關する疑を抱いて興味深く彼の將來を觀察するのみである。

彼が警視總監になつて以後、警視廳の方針治績は其以前に比して餘程活動して來たといふ、それは事實であるに違ひない。例へば掏兒が擧げられ、博奕打が屛息し、不德の新聞紙が嚴正に取締られたといふ部類の事は、小なりと雖も治績に關係の深い事柄であつて、彼の就任以來よき方向に數步を進めたけれども、以前川路氏が警視總監たりし時より樺山氏、大浦氏等が警視總監たりし場合には警視廳は一個の重要なる政治機關として世間から注目せられた。警視總監の位置は或場合には大臣以上である。假令以上でなくとも並行すべき位置と認められた、さういふ風の生氣活氣は今日に於ては見られない。それ丈け警視廳が事務的に秩序正しく整頓して來た。が、又それ丈け龜井君の政治的手腕が小さいのではあるまいかとも疑はれる。警視總監としての職務は龜井君のやる通りで遺憾なしとする而かも總監其人に政治上の力量が充ちて居るならば掩はんとして掩ふ能はざる光が、總監の言動の上に自然に發露し來る譯である。警視總監は其餘光を發揮するに最も適當な位置であるが故に樺山氏、大浦氏之に當れば、其人が格別政治上の運動をしたといふ事なしに自然に其位置が政治の中心點になり、歷代の內閣の死活に關係ある程の重き働を荷ふといふ事になつた。そ

れが今日の場合に於てはそれ程ではないやうに思ふ、少くとも世間はさういふ風に今の警視總監を見て居る。桂首相其人の眼より見れば、一警視總監の進退我に於て何かあらんと豪語しはしないか。斯くの如き態度は樺山氏や大浦氏の總監たりし時代の内閣首相の敢てし得ない所であらう。只龜井氏は自己本來の主張であるか否やは措いて、社會主義の彈壓に極力盡瘁いたして居る。勿論所謂社會主義者は我政府者の常に恐るゝ所て、歷代の總監は其彈壓に何れも力を盡して居たのである。けれども就中龜井總監の盡力が最も深酷痛切を極めて居る。社會主義者なきにあらざるも今日殆んど其聲を聞かざるは、龜井總監等が其方針を持する嚴正にして一歩も假借せざるの致す所である。此點に於て龜井總監は桂内閣の趣旨を最も忠實に奉戴するもので桂内閣は龜井總監に於て社會主義彈壓の名將を得たと中心より滿足して居るであらう。同時に龜井總監の名は社會主義者の彈壓者として長く後世に記憶せらるゝことであらう。世に龜井總監の名を成すことが多き中に此事も確かに其一つであらう、同時に龜井總監の德を疑ふものも或は此間に胚胎するかも知れない。方今の思想の分野の自由にして廣濶なる、人知れず多くの主義思潮が日本人の間に入り込み、默するものが必らずしも謳歌者とはいふ事が出來ない。龜井氏の初め身を起す時、異主義の他の一方の代表者と目せられたる德富氏は今日に於て已に全く同主義者であつて、等しく國家主義、帝國主義若くは保護干涉主義の群に投じて居る。兩人の間若し互に相爭ふとすれば、肥後人種の間に於ては確かに相爭ふべき二個の代表者であつたらうが、今日に於て相爭ふべき相手として德富氏を見る能はざるに至つたのは彼に於て幸か不幸かを知らない。只往年を顧みれば、彼自身も亦思想の多大なる變化に感慨を發せざるを得なからう。往年の平民主義者を今日の帝國主義者に化し得たるが如く、今日の社會主義思想に浸漸したる青年をして他日の社會改良主義者に化することを得せしめたならば、彼としては非常の名譽、滿足、勝利であらう。然し果して斯くなり得

るや否やは數十年後の時勢に問ふより外はないのてある(完)

△警視廳無用論

△△生

龜井警視總監の人物については、私はちつとも知らない。てお話することは何にもない。が折角のお尋ねてすから、私が平常思つてゐる警視廳無用論ても一寸お話しませうか。評論さるゝ主人公とまんざら關係のない事てもないから、役に立つなら立てゝ下さい。

私は一體警視廳は入らぬといふ論だ。今迄の警視廳はどうも政府の目附役といふ形がある。維新草創の際に政府を顚覆しやうとした者も可なりあつたが、當時はさういふ者を第一に壓抑する必要があつて、警視廳が出來たものらしい。其歷史的の因縁が附纒うて、今ても警視廳には一種の癖が脫けない。何時かの燒打事件の時も警視廳廢止論が出たが、私は其以前からさういふ論てあつた。

一體警視廳は東京の警察てあつて、東京市民の安全を保護することを任務とすべきてある。だから特別に警視廳などいふものを置かず、東京て自治制度のものを設けて、市てやる方がよいと思ふ。實際警察といふものは何てもない、人民の世話をする所だ。晝は電車だとか、醉ぱらひとかの世話をする、夜は泥棒だとか火附とかの取締をするといふ風に、極く柔かい低いものとしたいと思つてゐる。恰度江戸時代の自身番のやうにしたいものだと思ふ。

龜井といふ人は私は丸で知らないが、昔は警視總監といへばエライ人ばかりなつた。三島通庸とか、近頃ていへば大浦兼武とか、エライ、そして年を老つた人がなつたものだ。今度の龜井といふ人は若い、考も新らしからう。だからやる所もよいたらうと私は思ふ。

詰り警視廳といふものと政治の關係とを薄くして、そして市民の安全幸福といふ事に多く着目する。之が新らしき進歩したる警察のやるべき事と思ふ。而して

私はそれを龜井の如き若い、新らしき考の人に望むのである。

△龜井警視總監

城北閑人

龜井氏は熊本の廣取黌（嘉悦氏房の私塾）て內田康哉林田龜太郎と同級であつた始めは英語を學んだが半途て之を止めて司法省の法律學校に入り佛語に移りた（豹變の一）隨て大學の卒業も內田林田より一年後れた在學中は內田林田の磊落なのに比して眞面目な方てあつたが成績は却て兩人には及ばなかつた

右の如く始めは自由黨系の嘉悦門下に在りたが大學卒業後は反對黨の佐々友房の下に走りて國權黨に結び濟々校の舍監にもなつた（豹變の二）

龜井は內田林田の折花攀柳を攻擊して居たが地方官になりた頃から俄に道樂を始め忽ち斯道の勇者となり到る處艷名を轟した（豹變の三）其結果終に難病に罹りて一時は危篤に陷りたが幸に天未だ此好漢を殺さなかつた

然るに警視總監となるに及びて斷然酒を廢し（疾病の爲めとは云へ）食を節し薄く身に奉じて厚く部下を犒ひ且如何なる深更なりとも親ら各署長の報告を聽き時に弊衣破帽竊に街衢を巡視して警官の勤惰と下民の情態を察する抔其職務に忠實且熱心なる實に驚くべきものがある斯くて我等が年來憤慨して居た掏兒や博徒の橫行も剽盜竊賊の跋扈も脅喝詐僞の流行も帝都の下より全く掃蕩し盡さなければ止まざらんとす其勇其斷實に感嘆に勝へない警視廳の開設以來川路大警視以上の名總監と稱せらるゝも敢て不當でない我等は龜井氏が學生時代の平凡なる並に其官吏生活の前半の不振なるに引換へ官吏生活後半の拔群なる功績に喫驚せずんばあらず（豹變の四）

龜井氏は四たび豹變したが今度の變り樣が一番善い變り方だ氏には熊本人士に特有なる數多の短所が澤山ある若し自ら省みて深く戒め大く修養を積みたらんには氏の前途容易に測るべからざるものがある

文學博士根本通明講述

訂正五版

論語講義



（論語古寫本）

總洋布美装
全壹冊
七百四十頁
正價壹圓八十錢
小包料拾貳錢

本書が幾多類書の間に介在するは宛も野鶴の鷄群に在るが如し堂々として高く其地歩を占め常に萬目環視の中心點たり故に多年に亙りて彌々益々其光輝を發揚し今や學界に無雙の良書として一世の尊敬を荷ふに至れり此書もと博士の講義を速記して成れるものなれば述義最も明快にして親しく博士の謦欬に接するの感を與ふべきは之を言ふを要せず唯玆に篤學者の一顧を乞はんとするは本書に用ひたる經文が隋唐以前の古傳本にして最正最古のものなることなり今此經文に據れば版本論語に幾多の誤脫字あるを知るべく又誤脫本に據りて立言せる幾多の僻說あるを發見すべし故に本書の卷頭には特に古寫本論語の寫眞を揭げて其面目を躍然たらしめ卷末には古寫本論語考を揭げて其貴重なる所以を論定したり是亦學者の一讀を要する所なり。

發行所 東京牛込 **早稻田大學出版部** 振替口座一二一三番

發賣所 東京日本橋區本町 **博文館** 振替口座二四〇番

（中付の一）

東京帝國大學文科
支那文學漢文科講師 日下寛先生著

新刊

懐中 菜根譚講義

壹萬部限り特價金五拾錢 送料金六錢也

◉本書は道徳の修養○處世の秘訣を説ける書にて天下何人も讀まざる可からざるの書なり

全壹冊
新案懐中形製本
天金付紙數四百卅頁
正價金六拾錢也

三大特色
一、原文の外に讀方及字解を施し講義は實に平易細密なり
二、著者は有名なる漢文の大家日下寛先生なれば他の類書とは大に異れり
三、小形にして携帶に便特價五拾錢は空前の安價なり

賜天覧

日本武士道

大山陸軍大將題辭
東郷海軍大將題辭

文學博士重野安繹
東京帝國大學文科大學教師 日下寛共纂

武士道は大和魂なり大和民族の精華なり本書は武士道の先唱者たる重野、日下兩先生が憂世の余建國以來の武士道を事實に據て編述せられたる者なれば是迄有ふれたる書の如く空論を以て妄斷せる者とは同日の談に非ざる也苟も日本國民たる者は何人を問はず宜敷本書を座右に供へ以て國民の本分を知り給へ

菊判總クロース
紙數四百卅頁
正價金壹圓五拾錢
小包料内地金拾貳錢
臺、韓、清、三百匁

發行所 東京市神田區表神保町 振替口座（一九一一六八番） 大修堂
賣捌 東京堂、目黑、大阪藤谷

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

學士紳士鎖夏の好伴侶は本誌に限る 請ふ之を綠蔭淸風の間に繙け

雄辯

定價一冊貳拾錢
郵稅壹錢五厘

八月號

六冊稅共前金壹圓拾錢
十二冊仝金貳圓拾錢

△現代藝術と宿命觀……島村抱月
△遠大の志を立てよ……文學博士 前田慧雲
△いり豆黨の勝利……代議士 元田肇
△剛健の氣風……文學士 下田次郎

◎最近の風潮……法學博士 松波仁一郎
◎刑法と老人……法學博士 花井卓藏
◎禪學管見……理學博士 近重眞澄
◎旅行と演說……加藤咄堂
◎雄辯の要素……法學博士 鵜澤聰明
◎南極探檢の梗概……理學士 山上萬次郎
◎大隈伯縱橫談……記者
◎酒と藝術……文學博士 坪内逍遙
◎夏の感想……文學士 栗原古城
◎新島裏……河岡潮風

發行所 東京京橋銀座一丁目 振替東京二一九番 大日本圖書株式會社

△クレマンソーと樺山將軍……夏雲狂生
△當代名士の演說振り……法學士 失名氏
△雄辯と旅行……木村正二郎
△文明の世界的運動(ルーズヴエルトの伯林に於ける演說)……在伯林大學 田淵豐吉

現代に於ける朝野諸名士の高論卓說は悉く收めて本誌に在り

信用なき店舖及卑猥なる商品の廣告掲載は謝絶す

一味涼風爽絶可掬

文藝倶樂部

八月號

■小説 うづしほ　森鷗外譯

■小説 新一つ家　宮崎三昧

■小説 養子　西村醉夢

■喜劇 やきもち　田村俊子

■講談 夕立勘五郎　神田伯山

◎活社會△▲△　◎忙中閑△▲△

◎演藝界△▲△　◎懸賞俳句△▲△

◎長廣舌△▲△　◎句相撲△▲△

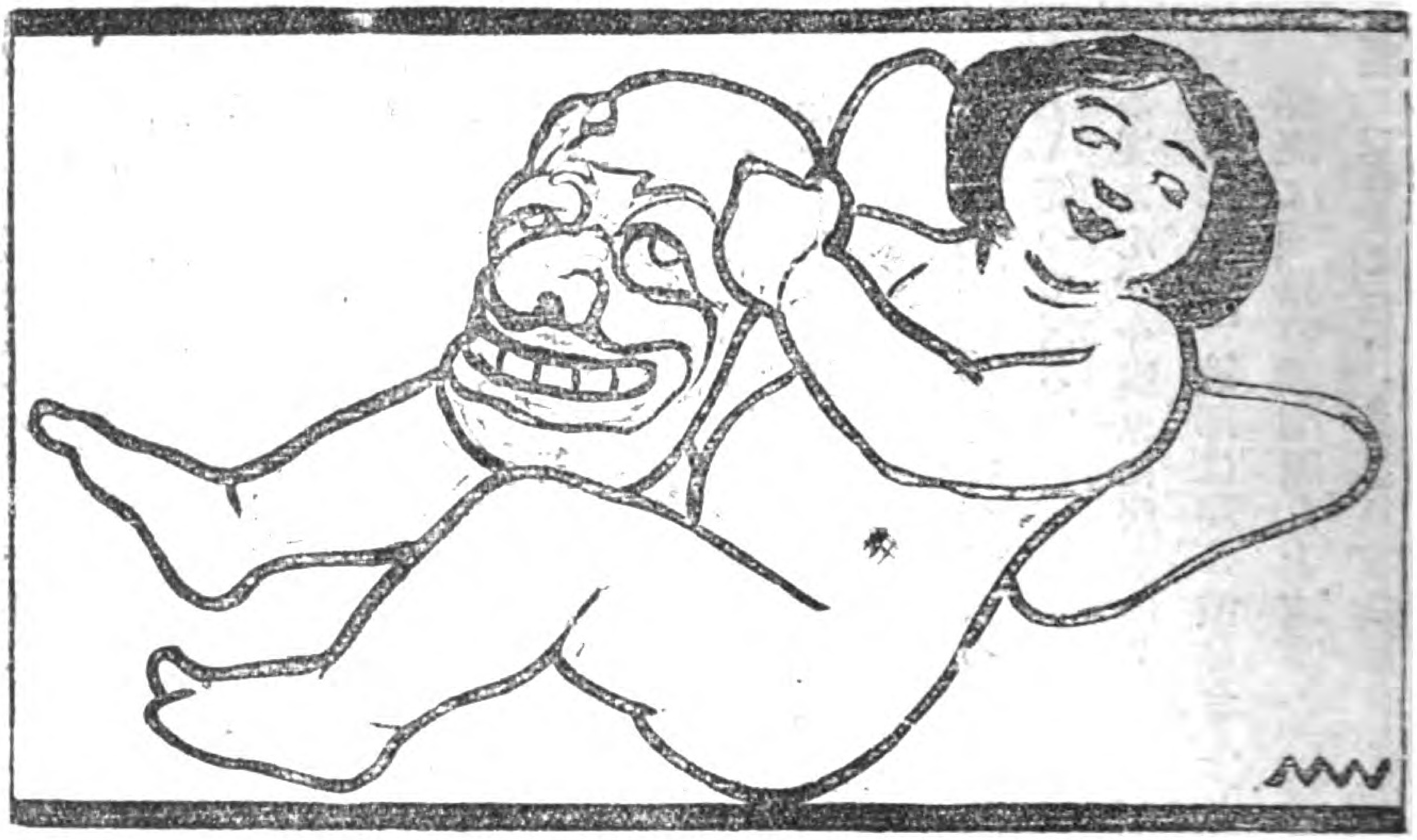
◎情歌△▲　◎一口噺△▲

◎端唄△▲　◎滑稽問答△▲

◎小品文△▲　◎雜題△▲

本誌定價
一冊二十五錢
四冊九十五錢
八冊一圓八十錢
十六冊三圓五十錢
郵税一冊二錢

東京　博文館　本町



舊痕

波山不規夫

一

朝から障子を〆切つて敏郎は卒業論文のこと許り考へた。論文を書く爲に新らしく買つた書物と、人から借りて來た書物を開いては閉ぢ開いては閉ぢ、徒らに氣許り惱ました。時々ペンを取つてノートへ書きはじめるが、其の度いら〳〵して其をノートから裂き取る、かうして幾枚も裂き取られて、紙の薄くなつた、閉目のところ許り脹れて居るノートを見て、彼れの頭はマス〳〵いら〳〵した。

彼れの考へは何うしてもふツくらと丸くなることが出來なかつた、いくら考へても其が遠くへ伸びて行かない、たとひ

遠くまで伸びて行つても、其が圓を畫いて彼れの頭へ踊つて來ない。敏郎は机の上に臂をついて絶えず髮を捲りながら、香の失せてところ〳〵黑い斑點の出來た自分の頭を思うて悲しんだ。遂に彼れはペンを投げ棄てゝ疊の上へ寢ころんだ。

卒業後の生活が直ぐ彼れの頭へ浮んで來た。彼れの行かうとする世界には、押合ひ壓合つて剛鐵のやうに固まつた人の群がウヤ〳〵呻きながら動いて居る。彼れの心は最う其の堪へ難い壓迫を感じた、散りかゝつて居る花のやうな自分の不安を直ぐ眼の前に思ひ浮べた。

「あと一二年落ち着いて勉强して居たい」と、敏郎はしばらく此の生活の壓迫から逃れることを考へた。が金と云へばまたグズ〳〵言ふだらうと思ふと、子供を東京に出して置いても一寸も其の境遇や心持ちを考へないで居る國の父や兄を恨めしく思つた。

「寺へでも入らう」

忌々しさうに天井を見詰めた敏郎の眼は思はず淚ぐんだ。

下宿の娘が郵便を持つて入つて來た、敏郎は其を寢ころんだまゝ受け取つた。娘は敏郎の顏を見てゲタ〳〵笑つて居る。

「お峯さん、今鹽原に居るの？」

「さうだらう」敏郎は幾分憤を含んで言つた。娘は笑ひながら敏郎の室を出て行つた。

郵便は鹽原の說明圖と十枚ほどの繪端書だけで外に何も書いたものは無かつた。繪端書を入れた袋の裏に「鹽原にて、みね」としてある許りて泊つて居る家の名は書いてない。家に居られないで鹽原へ行つ

たのだらう、そして溫泉宿の女中に住み込んだものと彼れは考へた。

彼れは昨年の夏自分の村に近い〇〇山に避暑して、自分の泊つて居た瀧の茶屋の娘と關係したことを思ひ出した。九月の半になつて〇〇山からお峯は敏郎を慕つて上京して來た。其から二人で今の下宿屋の前に家を借りて年の暮れまで世帶を持つた。

暮になつてお峯は一旦國へ歸つた、が瀧の茶屋へは行かないで近所の親戚の家に厄介になつて居た、そして敏郎との間に折々手紙の往復があつた。お峯は二月頃奉公すると言つてまた上京して來た。が好い鹽梅の奉公口がなかつたので、敏郎のところへ三日泊つてまた國へ歸つて行つた。其から二度許り手紙が來た、が其の後はお峯が何うして居るのか一寸も彼れは知らないで居た。

『卒業して新聞社へでも出るやうになつて、そして家の方から補助を貰へば十圓の家は借りられる。七月か八月になつたら手紙をやるから、しばらく辛抱して國に居るのだ、手習でもして居る中には直きに最う七月が來るよ』

停車場へ送つて行つた時に、かうお峯に言つたことを彼れは思ひ出した。

『お峯が若し今度七月になつて東京へ出て來たら何うしやう?』

彼れは愚かな夢を見たことを耻ぢた。起き上つて彼れはお峯から來た郵便を机の引出の中へ入れて前の椽側へ出た。

下宿屋のカナリヤが二三日前死んだ友だちを慕つて、勝手下の椽側で悲しげな聲で泣いて居る。間もなく薄曇つた東京の空にドンが鳴つて、慌たゞしい汽笛の聲が聞えた。

彼れは手のひらで耳を塞ぐやうな眞似をしてまた自分の室へ入つた。

二

午から敏郎は〇〇町の林君の下宿へ出かけた。道を歩きながら彼れはお峰のことを考へた。が何う考へて見てもお峰を振り棄てるより外に道がなかつた。――一寸顔がいゝだけ、何一つ文學上の話が出來るのでない、これまで他に二人三人の男と關係して居る、其に貧乏な係累、――こんなことを思ふと、最早やお峰の爲に苦しい生活の犧牲になる勇氣は出なかつた。

其に彼れは此の頃甚く局部の障害を氣にして居る、其の爲に彼れは女と云ふものを本當に味へない場合がある、其の時は女に對する興味を失つた全く絶望の氣分だ。

『何うしても己れは子が出來ないだらう』

其を思ふと彼れはマス〳〵お峰の犧牲になることを考へることが出來なかつた。

林君の下宿の側にあるH孃の店で敏郎は敷島を買つた。敏郎がH孃を知つたのはつい此の間で、彼れの苦心して書いた長篇小説が××雜誌の春期號に載つた時、林君に紹介されてからのことだ。がH孃は其の前から林君に聞いて敏郎のことは知つて居た。

H孃は二十四五になるがまだ處女で居る。其の暗い家庭の有樣等も林君から聞いて敏郎は略々知つて居る。

色の際立つて白い、細面な、何處までも處女の表情を隱さず表はして居る、H孃のさえ〴〵した美しい潤んだ眼は、騷々しい都の巷に居て何處か遠い深山の霞でも見て居るやうだと、敏郎はH孃の店へ寄る毎にさう思つて見た。敏郎ははじめて見た時から妙にH孃の面影に引きつけられた。

が其のH孃は林君のラブてあつた。
『詰らない、僧房へても入つてしまはう』
一寸H孃と立話をして店を出る時に敏郎はまた寺のことを考へた。

林君は學校から歸つた許りのところだつた。しばらく雜誌に出た敏郎の小說の批評のことを二人て話し合つた。林君は世間の惡い批評に對して非常に憤慨して話したが、敏郎は甚く打沈んて居た。
『僕は矢張り僧房へ入る方が一番いゝのだらう』と壁の方を見ながら沈んだ調子て言つた。
『僕は早く珠數てもかけたい』とも言つた。
『さうだ、先達珠數のことをH孃に話したら其を君に作らへて呉れるさうだ、H孃は非常に君に同情を寄せて居るよ』
と言つてニコ〳〵した眼元て敏郎の顏を見詰める。敏郎は林君の眼を避けて下を向いた。
『何て作らへたらいゝだらうと言つて心配して居たよ』
『然し君に對して僕は濟まないやうな氣がする』
『いゝぢやないか、H孃と僕と二人から貰ふんだと思へば』と唾を泡のやうに吹き出した唇をニコ〳〵させる。
『H孃もお經を習ひたいと言つて居たよ、昨年なくなつたお母さんを非常に慕つて居るんだ、H孃はなか〳〵君感心だらう』
最う妬ましいやら、口惜しいやら、馬鹿らしいやらて、ブク〳〵泡立つて居る敏郎の腹は冷笑と嘲笑

を口元まで縊上げない譯に行かなかつた。

「僕は君H孃の爲に失戀でもしたら一生駄目だ、死んでしまふ」と、不意にかう言つて林君は不安のやうな眼付をした。

「大丈夫だらう」

敏郎はマス〳〵塞ぎ込んでしまつた。

H孃は身が丈夫でないから性慾許りの身の丈夫な人の妻になると殺されてしまふと言ふやうなことを彼れは敏郎に話した、H孃は性慾の女ぢやない、自分も性慾の男ぢやない、こんなことまで彼れは言つた。

「あんな髪の薄い情愛のなさゝうな女を誰がそんなに愛して呉れるもんか！」

「ハヽ、自分が醜いので其んなこと言つて平均を取るのだらう」

敏郎は腹の中で笑はざるを得なかつた。が彼れは苦い顔をして全く沈んでしまつた。

「自分の幸福なことと許り饒舌つて君に濟まなかつたね、——然し僕は何處までも君を第二の自己だと思つて居る」

と言ひながら彼れは敏郎の手を取つて握つた、が敏郎は其を握り返さなかつた、敏郎は何とも言はれぬ厭な思ひがした。

「本當に自分の幸福なことと許りしやべつて濟まなかつた」と、かう二度申譯をしながら彼れは卷煙草に火を付けて、其を泡のやうに唾の吹き出して居る唇で濡して敏郎にやつた。彼れは親密の情を表はす爲に氣取つて斯んなことをするのだらうが、敏郎は何時も彼れの唾で濡した煙草を貰ふ時には何とも言は

れぬ厭な氣持がして、大概其を吸はないで灰にしてしまふ。

「僕は最う失敬しやう」

　と言つて敏郎が立ち上ると、

「餘り僕のこと許り話したので感情を害したのか、其ならいゝが――」と怒つたやうな調子で、彼れも立ち上つて敏郎の手を取つた。

　敏郎はまた坐つた。

　其から二人で夕飯をやつた。

　夕方からソロ〳〵風が立つて薄寒かつたので敏郎は慄へて居た。彼れの薄着して居るのを見て、林君は押入の行李からネルの襦袢を出して其を敏郎に着せた。

　歸りに林君は敏郎を送つて出た。

H孃の店の前へ來た時に「少し寄つて話して行かう」と林君が小聲で敏郎に言つた、が敏郎は其を好まなかつた。二人で道の暗い方にグズ〳〵して居ると、H孃が直ぐ其を見付けて、

「お二人で其處に何をして居らつしやるの」と言ひながら店の履物を穿いて下へ下りた、が道へは出て來ないで其のまゝ其處へ腰を下した。店の明るい瓦斯の光りで浮彫のやうにH孃の顏は美しくなつて見えた。

　林君は敏郎の側から離れてH孃の方へ行つた。敏郎は急いでH孃の店の前から遠ざかつて暗い方へ入つた。

「いや失敬した」と、暫くしてニコ〳〵笑ひながら林君が敏郎に追ひついた。

ブラ〳〵歩きながら敏郎は卒業論文のことを林君に話した。

「僕は君、ニヒリズムだなんて碌に知りもしない外國のものなんかに手をかけるよりも、日本の國語問題に關する論文でも書くとよかつたんだ」

彼れの言葉は少し荒々しかつた。

「日本の國語は今、漢字や英語や獨逸語の下に埋れて呻いて居る、今の中に何うかしないと日本語は亡んでしまふ！」

林君は默つて敏郎の云ふのを聞きながら歩いた。

「本當に早く何うかしないと日本語は亡んでしまふ！」とまた慨くやうな調子て、彼れは雲のある暗い空を仰ぎながら言つた。

「もう駄目だ、僕等はかうして死んで行くのだらう」敏郎は色の褪せた、不安な響に充ちた夜の町を見ながら深い溜息を洩した。

「然し論文は書けよ」

林君が心配さうに言つた。

「インキもペンも僕のは丸きり精が脱けて居る、何にも書けやしないんだ」

「其ぢや新らしいのを僕が買つてやらうか？」

「さうてもしたら或は書けるかも知れない」

「今度買つて君の家へ持つて行かう」

二人は穴八幡の坂の下で別れた。

敏郎は一人で急に暗い寂しい道へ入つた。

三

其の夜敏郎はさま〳〵なことを考へながら遅く眠りに就いた。翌日午近い頃敏郎は重い眠りから眼覺めた、苦味を帶びたとろゝのやうな唾が口の中に一パイ溜つて居る、彼れはまるで病人のやうな氣持になつて身を蒲團から半分起しながら枕元の火鉢の灰に其のとろゝのやうな唾を吐いた。棒でゞも叩かれたやうに頭が疲れて茫つとなつて居る。

午飯と一所に彼れは朝飯をやつた。

重く曇つて何だか壓付けられるやうな天氣の日だつた。敏郎は前の椽側へ出てぼんやり庭を眺めて居た。若葉の繁み、其の下の薄暗い空氣、白と赤のつゝじの花。是等を敏郎の眼は何時までも見詰めて居ることが出來なかつた、彼れはだん〳〵眼に痛みを覺えて來た。

彼れは凡ての風物から次第に香りと興味の失せて行くことを悲しく思つた。

時折りぼろを引き裂くやうな雀の聲が繁みの中から聞えた、其の度勝手下の椽側でカナリヤが烈しく泣いた。

ドンが鳴つた。カナリヤはまた烈しく泣き立てた。

敏郎は何を思つたか、不意に椽前にあつた下駄を穿いて、カナリヤの箱を勝手下の椽側から擔いで持つて來た、そして其を丁度自分の机の前のところの椽側へ置いた。

金網の中のカナリヤは雌が死んでから急に窶れて來たやうに敏郎の眼には見えた。彼れはカナリヤの

箱の前に坐りながら小さく口笛を鳴らした、カナリヤは彼れの口笛を聞いて一生懸命に其れに應へて泣いた、口笛の聲が壁の中からでも來ると思つてか、カナリヤは可愛らしい頭を後ろの方に廻して「ピイ〱」と其に呼びかける。そして呼びかけながら餌を突ついて見せる。

敏郞は凝とカナリヤを見詰めた。

いくら泣いても呼びかけてもカナリヤの聲には何の應へもなかつた、カナリヤはしまひに託つやうな訴へるやうな低い聲で、丁度廣い野末に寂しく鳴いて居る蟲のやうな聲で哀れつぽく泣き縮まる。そして其の後は默つてしまつて凝として動かないで居る。『同じい、僕とカナリヤと』

敏郞は凝と箱の中を見詰めながら、小さいほぐろのやうな眼で彼れの眼を見て居るカナリヤを懐しく思つた。

「ピイ〱」小鳥が高い空を鳴いて通つた。カナリヤは聲のした空の方へ耳を澄した。そしてまた狂ほしく泣き出した。

敏郞は箱の中へ手を入れてカナリヤを握りしめてやりたいと思つた。

裏の畑からハコベを取つて來て彼れは其をカナリヤの箱へ入れてやつた。

四

其から二三日して林君が何時もの快活な調子に似ず、蒼い顏をして敏郞の下宿へやつて來た。敏郞は彼れの荒々しい態度と打沈んだ樣子を見て甚く驚かされた。

(の)黒繻子の風呂敷包を解いて、彼れは敏郞の前に五十枚ほどの原稿紙と其からインキ壺とペンを置いた。

「これて卒業論文を書いて呉れ給へ」

彼れの聲は重く沈んで啞れて居た。其から暫く默つて彼れは敏郎の卒業論文の話を聞いて居た。彼れの顏はまるで病人のやうな色をして居る。全く元氣がない。敏郎は其を甚く不思議に思つた。

敏郎の話が終ると、林君は懷ろから二通の手紙を出して彼れの前に其を投げるやうに置いた、そして凝として居られないで彼れは室の中をブラ〳〵歩いて居る。

時々亂暴な調子で口を鳴したり、溜息を洩したりする。

一つは國の兄さんから來た手紙で、一つの方は其を書いた人の名前も宛名も書いてない。

敏郎は先づ名前の書いてない方の手紙から開いて見た。少し讀む中に彼れは其はH嬢が彼れにやつた手紙だと言ふことを知つた。

幾度お手紙をいたゞいても私の心は動きも變りもいたしません、
あなたの怖いお顏を見ると、私は怖ろしくなつてゾク〳〵慄へます、

手紙には斯う言ふ意味のことばかり書いてある。手紙の中にもH嬢の名前は書いてなかつた。其を卷直して狀袋へ入れる時に其の狀袋の安物であることに敏郎は氣が付いた。

國の兄さんからの手紙には誡めた言葉や、怒つた言葉が書いてあつた、『お前はまだ學業が中途ではないか』『今から女を思ふやうて前途の生活が開かれるか』『お前を斷はるやうな女の性格や價値は大概知れてるぢやないか』大體こんな意味の言葉で手紙は綴られてあつた。

『もう僕は絶望だ』と荒々しく言つて林君は疊の上へ俯臥に寢ころんだ、そして頭を兩腕に埋めながら苦しさうに身を悶えた。

『君の家へ手紙を出したのは、一體誰だらう？』敏郎は如何にも不熱心な調子で尋ねた。

『H孃だ』

林君は寢轉ろんだまゝ二つの手紙を風呂敷に包んだ、そして直ぐにまた起き上つて室の中をブラ〳〵歩きはじめる。

『H孃が自分で出す筈はない』

『あゝもう僕は絕望だ！』

彼れは障子を開けて椽側へ出た。

敏郞は自分で不思議に思ふ位林君に對して同情の念が起きなかつた、從つて熱心にもなれなかつた。また餘り事が突飛なので彼れは妙な心持にもなつて居る。

『林君は片思をやつたんだ』と思ふと、餘り馬鹿々々しくて吹き出したくもなつた。

其から敏郞は彼れを誘つて散歩に出た。

が彼れは始終立ち止つて許り居て敏郞と一所に步かない、敏郞は止むを得ず立止つて彼れの言ふことを聞かなければならなかつた。

『僕は憎めない、何うしたつて僕にはH孃を憎む氣になれない』

と太い溜息と一所に言つた。

『其は本當だ、當前だ、憎むと言ふことは取も直さず、君の價値を下げることになるのだ』

敏郞はかう冷やかに言つた。

『何うしても僕はあんな怖ろしいことをするのがH孃だとは思へない、あれはH孃でない、何うしたつてH孃ではない』

「矢張りH孃だよ、君は自分自身に戀してたんだ、自分で作らへた理想の幻に戀してたんだ、然し世間の所謂戀と言ふものは畢竟自分の理想の幻に過ぎないのではないかと僕は思ふ」

敏郎は何處までも冷やかに出た。が自分でも餘りに冷やかな態度だと思つて彼れは林君の前に自分の不熱心を白狀した。

「僕は冷めて居る。かう言ふとマス／＼君の心持ちを惡くするか知れないが、僕は事實の前に僞りを言ふことは欲しないから。本當を言へば僕は君の言ふことに同情を感ずることが出來ない、僕は最う戀を語るやうな男ではないんだ、しらばくれた男になつてしまつたんだ」

「いゝ僕はもう歸らう！」

が矢張り彼れは敏郎の側を動かない。二人は畑の中から薄暗い鬼子母神の杉森の中へ入つた。林君は道の側の汚れた石の上へ腰をかけた。そして溜息をついたり、H孃に對する不平や失望を敏郎に語る。

敏郎は彼れから少し離れた杉の木の下にぼんやり立つた。

學習院のペースを見て歸る人達が二人をヂロ／＼見ながら通つた。敏郎は何だか林君も自分も木や石塊と同物になつてしまつたやうに變な氣持がした。

「こんな暗いところに居ないでまた畑の方へ出て歩かう」

敏郎は前に立つて畑の方へ歩いて行つた。

靑々した麥畑が遠くまで續いて、ところ／＼の村落の綠の繁みが黑くなつて見える。其の上にはどんよりと薄曇つた空が一面に柔らかく廣がつて居る。薄雲の間を赤い太陽が今沈みつゝある。初夏の野は何處までも靜かであつた。

初夏の靜かな入日——敏郎は其を見て急に悲しくなつた。子供の時の生々した匂やかな氣持は太陽の面を見ても廣く打續く麥畑の何處を見ても見られなかつた。

「人間は君一種の怖ろしいスフィンクスなんだね」後から來る林君の方を振り向きながら彼れはかう言つた。

林君は敏郎の此の言葉を聞いて變な眼色をした。

『本當に僕は口惜しい、殘念だ』

『然し僕にはH孃にだつて同情があるよ』

林君は敏郎の顏を怖ろしい眼で睨みつけた。

「さうぢやないか、あゝして店を持つて、あゝした家庭に居ては君の態度を迷惑と思ふ理由もあるかも知れないと思はれるから……」

「君はさう思ふだらう」

と敏郎の顏を睨みながら肩を動かした。

『僕は今日は冷やかで駄目だ』

敏郎は最う默つて林君から逃げて居やうと思つた。

『僕は何うしたらいゝだらう……』

と泣出しさうな聲で言ひながら、脊の低い林君の身は妙な恰好をしてヨロヨロ麥畑の中の小道へ入つて行つた、足が少し惡いので餘計妙な恰好になつて見えた、其處で彼れは何か呟きながら矢鱈に足を動かして居る。

敏郎は林君の後姿を暗いと思つて見た。彼れは直ぐに〇〇山て或る人から聞いた林君の家の暗い秘密を思ひ出した。林君の祖父さんは死ぬ六七年は暗い一間に閉籠つた限り一足も垣根の外へ出なかつたと言つた其の人の言葉は記憶の袋を破つて今新らしく彼れの耳に響いた。

「その暗い室から――」

敏郎は片輪的に近い林君の樣子を驚いて見入つた。彼れは忽ち「因果」と云ふことを考へて其を怖れ出した、其の觀念を二千年も持越して來た昔の人の心持になつて、今彼れは新たに其の怖るべき事實の前に慄へた。

「あゝ僕は困つた」

と云つて林君がまたヨロ〳〵畑の中から道へ出て來た。敏郎は怖ろしい夢から覺めた時のやうに驚いて林君の方へ振返つた。

「君の失戀が却つて君の文學の生涯を作つてくれる、藝術へ來なければ此の世の中は到底も救はれないよ」

「僕は戀がなければ文學も何もない！」と彼れは敏郎の冷やかな態度を憤慨するやうに云つた。

「然し――」と言つたが敏郎は最う口を出す氣になれなかつた、彼れは獨りて深い物思に沈んだ。

二人て夕飯をやつてから敏郎は林君を送つて家を出た。

林君は歩きながら鎌倉へても行かうかと言ふやうなことを敏郎に話した。敏郎が二三年前學校を止めて鎌倉へ行つて居たことがあるので、彼れは下宿のことや寺のことや樣々のことを敏郎に尋ねた。

「僕の熱心な心を君からH孃に傳へて呉れないか」

と言つて彼れは戀の成立を敏郎に依賴した。

敏郎は林君を送つてＨ孃の店の直ぐ側まで行つた、が彼れは其より先へ行くことが出來なかつたので、其處から林君と別れた。

「君が卒業て忙しいところを本當に僕は失敬したね」

かう彼れは敏郎に詫びた。

「身を丈夫にしてくれ給へ、敏郎君」

とまた遠くから大きい聲をして言つた。

「君も」

敏郎もかう言つたが、彼れは精氣のない自分の聲を聞いて耻かしいやうな厭な思がした。

その翌日の午前に敏郎はＨ孃のところへ行つた、Ｈ孃は店で彼れと會つた。何か期待してる時の不安な心持がＨ孃の顏に表はれて見えた。

『是非話したいことがあるのですが』

と彼れはモヂ〳〵しながら言つた。『林君のことで、――僕のことも聞いて貰ひます』

が其の日はＨ孃は店を開けて出ることが出來なかつた。

「其では明日の午後二時頃私しあなたのお宅へ上ります」

と言つて彼れに約束した。

敏郎は其の日に林君に端書を出した、其には鎌倉へ行くことは止めて勉强して試驗を受けろと言ふ意

味のことを書いた。

五

物を待つ間の堪へ難いじれつたさを知つて居るので、明日は午時分に眼を覺まして飯を食べてから獨逸語の二三ページも讀んだころ、丁度H嬢の來る時刻にしやうと思ひながら敏郎は眠りに就いた。が彼れは五時には最う眼を覺ましてしまつた、其に厭な夢を見て身が汚れて居るので、彼れは二度眠る氣になれなかつた。悔やしい忌はしい思ひをしながら、彼れはやつと疲れた身を引き起した、そして急いで床を疊んで押入の中へ入れた。

彼れは直ぐに前の椽側の戸を明けた。

勝手で朝の仕度をして居る外には下宿のものはまだ誰も起きて居ない。外は霧が深かつた。庭向ふの往來は何時もの朝のやうに車の音が聞えるが其は深い霧の中に沈んで何時もの盛んな賑やかな響ではなかつた。雀の聲は庭の空氣を一層靜かにした。カナリヤが椽側の箱の中で狂ほしく泣き出した。敏郎の心は何となく不安を感じた。

彼れは二ツのバケツに水を汲んで湯殿へ行つた、裸かになつて彼れは其の冷たい水で身を奇麗に洗つた。其れからまた新らしく二ツのバケツに水を汲んで來て、髮を洗ひ口を嗽いだ。

今朝からするのは彼れには特別な意味があつた、其を思ひながら彼れはニコ〳〵し、そして其處に新らしい力を感ぜずには居られなかつた。

着物を着て下宿の裏の麥畑の中を、輕い濕つぽい朝風に吹かれて散歩しながらも、彼れは絶えず一種の心地よい思ひを感じた。が彼れは眼覺める前の厭な夢を忘れることが出來なかつた、以前關係した或

る醜い女のことを彼れは夢に見たのであつた。
彼れは其の穢れた記憶を振ひ落さうとでもするやうに時々頭や身を左右に搖振つた。
且蝶のことを思ふと最う凝として居られない。小說でさへ落ち着いて讀めない、無論卒業論文のこと等は考へられなかつた。
下宿屋から盥を借りて彼れは洗濯をはじめた、二時間位は何うにか其で過ぎ去つた。洗濯から思ひついて彼れはカナリヤの箱を掃除してやつた。
其から新らしい袷に着替へやうと思つて敏郞は行李を押入の中から出して開けやうとした、が彼れは急に懷かしい顏になつて其をためらつた。彼れは亂暴にまた行李を押入の中へ押込んで、さも落膽したやうに机の前へ來て坐つた。
彼れはまたお峰のことを考へたのである。敏郞の行李の中にはお峰の單衣が二枚と赤い肌襦袢が入つて居る、帶を縫ひ直した時の紫色の切端もある。
彼れは是等の記憶を拂ひ退けやうと努めた、彼れは机の上に置いてあつた鏡を取つて亂暴に押入の中へ投げ込んだ、そして火のやうに顏を赤くしながら室を出てまた外へ行つた。
押入の隅には針箱や鬙や髮結の道具や箱枕や油じみた記憶がまたさまざまあつた。彼れは何うしても其を忘れることが出來なかつた。
麥畑の小道を步いて居る敏郞の口からは落膽の溜息がしばしば洩れた。
空が重々しく壓付けるやうに曇つて居て、敏郞は絕えず其に胸をいらいらさせた。

五分、十分毎に小止みなく死んだ友を求めて泣くカナリヤの聲が胸を掻き挘るほど痛ましく悲しく彼れの耳を惱ました。

三時打つてもＨ孃は來なかつた。

四時近くなつてやつとＨ孃が見えた。風呂に入つて居る處へ下宿屋の亭主が來てＨ孃の來たことを彼れに告げた時には、敏郎は胸の血が沸き立つほど嬉しく感じた。

敏郎が湯殿から出て來たのを見て、庭に立つて彼れを待つて居たＨ孃は顏をポーッと赤くして挨拶した。

「私つい遲くなりまして」

話は別になかつた。

しばらくしてから言ひ惡さうに林君のことが敏郎の口から話し出された。林君の一昨日彼れの處へ來たことや、其の亂暴な態度に對する彼れの驚きや、話を依頼されたと云ふやうなことを、如何にも言ひ惡さうに彼れはＨ孃に話した。

「だつて私はあの方は何ても御座いませんもの、本當に妙な厭らしい――」とＨ孃も俯向いて言ひ惡さうに言つた。

「あの方は餘ッぽど何うかしていらつしやるんだと私思ひますわ、私の心が些とも讀めないんですもの、私もうあの方のお顏を見るのも厭になりました」

敏郎は默つてＨ孃の沈んだかすかに顫へるやうな聲に耳を傾けた。

「私も迷惑ですし、あんまり解らないお手紙を度々下さるんですもの、私惡いと思ひましたけど、とう〳〵あの方のお家の方へお知らせしましたの、其より仕方が御座いませんものでしたから私には、お家の方からお手紙が參りましたさうですね」

「僕も林君の兄さんから遣した手紙は見ました」

然し且孃の林君にやつた手紙を見たことは言はなかつた。

言ひ惡さうにもぢ〳〵しながら、

「私實はあなたにお頼みして話して戴かうかしらと思ひましたけれど――」

其れは出來なかつたのだ、さう思つて敏郎の鋭敏な神經は直ぐ其處に美しい想像を書くことを忘れなかつた。

「私林さんは名を呼ぶさへ厭な氣持ちがしますの」

最うから解つて見れば進まぬ話を續ける必要もないと思つたので、敏郎は話題を別な方面に向けた。

しばらく今の小說界の話等をした。

「本當に私詰りませんわ、此の頃の小說は味が無くつて二ペーヂと讀んで見る氣になれないんですもの」

と敏郎の顏を見ながら迫るやうに言つた。話をしながらも敏郎は無意識に深い溜息を吐いた。

彼れは且孃に手渡して林檎を剝いて貰つた。

○凡ての物から香りが失せた、光りや輝や水のやうに流れて居た夢心地の代りに凡てのものはザラ〳〵した心持ちの惡い皮膚を現はした。

○子供の時代が戀しい。夏の朝早く露濕つた土の上をヘタ〳〵歩いた子供の可愛らしい足が戀しい。
○最早や物と物とは分裂した、そして其の裂目から怖ろしい地獄の不安が生じた。
物と物とはかくて抱合することを碍げられた。僅かに接觸がある許り、が其には無意義の如く思はれる苦悶がある。
○心と心と相抱合せんこと。火のやうに美しく燃えたきこと。
○太古の森林の中に赤いケダシを見出すことが吾々の藝術である。
こんなことを彼れは熱心にH孃に話した。

其れから二人して山の手線に沿ふた青々した麥畑のあたりを散歩した。時々細かい霧のやうな雨が二人の顏を吹く位に霧が重かつた。
H孃と並んで歩いて居ると敏郎は堪へ難いほど重苦しい壓迫を感じた、時々息忙しくもなつた。
また二人の間に林君のことが話された。が其は話にはならなかつた、二人は兩方の心を知りながら直ぐに其を止めてしまつた。
麥畑の間に挿まれた田の中で蛙が切りに鳴いて居る。敏郎は種を蒔いた許りの苗代を見ながら蛙の聲に耳を傾けた。
「僕はあの蛙の聲を聞くと堪らなく悲しくなるのです」
と沈んだ調子で言つた。
「あなたとかうやつて會つて同じ道を並んで歩いて居ながら――」

彼れの聲は曇つた。そして彼れは俯向きながら歩いた。矢張り俯向きながら歩いて居るＨ孃の顔を見て彼れはまた續けた。

「此度あなたと會ふ時今日の氣持さへ味はれなくなるかと思ふと――」

泣きさうな聲で言つた。

「大丈夫ですわ」

Ｈ孃は慰めるやうに云つた。

「僕は凡ての障碍物を拂ひ退けて心と心と接したいのです」

かう云つた時敏郎はＨ孃の手を取つて握りしめたいと思つた。

「あなたは自分の顔が獨りで解りますか？」

と彼れは寄り添ふやうに並んで歩いて居るＨ孃に向つてかう尋ねた。

「他と接觸する時、自分と云ふものが僕には僅かに解るだけです」

Ｈ孃が彼れに寄り添ふやうにして歩くのを彼れはＨ孃が彼れに對して同情を現はしたのだと解した。

二人は何時の間にか下宿の裏へ來て居た。

「あら私ちッとも氣が着かずに居ましたの、畑を一廻りして來ましたのねえ」

と云つてＨ孃は子供々々しい樣子をした。歸る時に、敏郎は自分の慕つて居る小說家の某から貰つた「落葉」の繪端書をＨ孃にやつた。繪端書の裏には某の美しい字で「君の憧るゝ落葉を贈る」と書いてある。

Ｈ孃は紙を出して「落葉」の繪端書を其の中へ包んで大切さうに懐ろへ入れた。

其からＨ孃は敏郎が出して見せた多くの小說書の中から「白夜集」だけ擇つて借りた。

彼れは途中までH孃を送つて行つた。
H孃は敏郞に學校の卒業試驗を受けることを賴むやうにして云つた。
「其れからあの珠數のことは本當なのですか？」
「あゝ何うぞ作らへて下さい」
其れを言つた時敏郞の眼は淚ぐんだ。
が林君のことに就ては一言も二人の口から話されなかつた。

六

H孃の來た翌朝早く起きると直ぐ敏郞は散步に出た。昨夜は殆んど眠らなかつたので彼れの感情で動き變りする頰の肉は見えるやうに瘦せて居る。
まだ濃い霧は晴れなかつた。
H孃と並んで步いた道を彼れは步いた、H孃の步いた足跡を拾ふやうな心持ちで。――草の生えた道の端をソロ〳〵步いて見たり、小石の上をコツ〳〵させて見たり、時々H孃と眼を見合したことを思ひ出して彼れは胸を張りながら溜息を吐いた。
ステツキを持ちかへたり振つて見たりした。鐵道の敷いてある谷へ沿ふた麥畑の小道へ來ると――其は狹い道だつた、二人では並んで步けないほどの――電柱の立つて居る處を離れ〳〵に通つて其の小道へ入つたことを思ひ出した。其から敏郞の話を聞かうとしてH孃が寄り添ふて來たことを思ひ出した。
彼れは折々堪へ難い溜息を吐いた。
こまかい記憶を一分も失ふまいと努めるやうに、彼れの眼は注意深く其處らを見廻した。麥の色は何

處までも靑かつた。霧はまだ晴れない、が昨日のやうに霧は降らなかつた、彼れはポツ〳〵雨でも降つて來るといゝと思つた。

彼れには凡てが物足りなかつた。

貨物汽車が通ると其處らが石炭の煙で白くなつた、彼れは立止つて煙の臭をかいだ。

「大森林――」彼れは其を思ひながら、勢よく走つて行く貨車の煙突の黒い煙を羨やましげに見送つた。

林君のことを話したことを思ひ出した時に彼れは手を振つて身を動かした。が其の下から直ぐにお峰が顏を出して來る。

「矢張り僕は暗いところがいゝんだ」

と彼れは遣る瀨ない苦惱を覺えた。

其の日の夜、敏郎は林君から手紙を受け取つた。

御葉書に接した時は何んなに嬉しかつたか、何よりも力强い感じがした。どんなにか心を勞してくれたか。君の苦悶の多い所を、ことに論文の方もさしかゝつて居るのに實に濟まない。

信じて居る、成敗は時により止むを得ない、自分も男だ、七八分は絕望したやうな氣持て、今は勉强も出來ないが、試驗は受けることにしやう。

君も成る可く卒業するやうにしてくれ給へ。賴む。

僧房のことは國の兄に言つてやつた、君が厭になれば其の時は又ことはればよいのだ。

一生懸命に勉强する、君もどうか自愛してくれ、身體は大切なんだ。

論文も書いてくれ、頼む。
僕も君の言ふことを聞く。
買ひ被つて居るなんて、そんなことはないよ、自分には自分の眼と心とがある。
どうか身を大切に。

七

H嬢と會つた翌々日の午前、敏郎は林君を訪ねるつもりで家を出た。

H嬢は店に見えなかつた。

林君は雨戸を一枚開けた切りで、薄暗い室の中に蒲團も敷かずに寢衣を引被つて寢て居た、憔悴したやうな顔で疲れ切つて眠つて居る。

敏郎は二三度彼れを呼び起した、が餘ほど疲れて眠つたらしく林君は眼を覺まさなかつた。敏郎は其れ以上聲をあげて呼び起すことは出來なかつた。彼れはそッと室を出て、廊下の隅に赤兒を抱いて居る下宿屋のお神のところへ行つて林君を呼び起して呉れるやうに頼んだ。

「自分はH嬢を何うしやうと言ふんだ？　馬鹿！」敏郎は林君の憔悴した顔を見て、自分の彼れに對する熱のない薄情な態度をつく〳〵恥ぢ入るやうに思つた。

「何の爲に今日茲へ來たのだ？」

彼れはたわいもない愚かな自分の心を鞭打つほど厭に思つた。

「僕の處へ來て呉れたのか、君――」

低い寂びれた聲で、不意に後ろから肩を叩かれて、敏郎は驚いて元氣のないまるで死んだ人の顔に殘

つて居るやうな林君の寂しい笑ひ顔を見た。

彼れは蹌踉廊下を歩いて行く林君の後について彼れの室へ入つた。

「昨夜僕は一つも寝なかつた」

「朝飯はまだか？」

「いや朝飯をやつて寝たんだ」

林君は口を嗽ぎに室を出て行つた。

林君は何處までも自分を親友だと思つて居るのだらうか？　果して彼れと自分は朋友だらうか？　單に同郷の人と言ふだけなのではないだらうか？　單にさう言ふだけて友人になり、親友を装ふたのではなからうか？

昨年の夏〇〇山へ避暑しない前は敏郎は林君を知らなかつたのだ、一寸したことから話し合つて兩方て友人にしてしまつたのだ。そして今敏郎は却つて林君との交際を迷惑に思つて居るのではないか。

「單に同郷と云ふことや文學をやると言ふことだけて友人になるなんて、要するにセンチメンタルの交際だ！」

彼れは今年の春女子大學の側て運送業をして居る人が彼れの隣村の人だと言ふことを聞いて頭を下げて交際を求めて行つたことを思ひ出した。彼れは二三度其の前を通る時に頭を下げて立寄つたが、「自分の下宿へ其の人に遊びに來られることを自分は心好く思つて居ない」と言ふことに氣付くと、顔を赤くして彼れは自分の淺墓な行を耻ぢた、其れなり敏郎は運送店の前を通らない。

「センチメンタルては駄目だ！」

彼れは憤つたやうに起上つて肩を柱にこすりつけた。

林君は敏郞にビールを二本取つた。

が彼れは一本しかやらなかつた、そして林檎を食べた。

「君、卒業論文は出來たか？」

「半分許り書くには書いた。僕は最うあれていゝ。耻かしいとか、先生に笑はれるとか、そんなたわいない事を言つてた日には一生學校の埃臭い講堂の中から出られやしない」

林君は彼れの語氣を見て、今日はまた何うかして居るな、と思つたやうな顔をして敏郞の顔を見詰めた。

「僕は金を出して呉れた親の爲に免狀を取るのさ、さうぢやない！　矢張り自分が其を欲しがつて居るんだ！」

敏郞は顔を眞赤にして頭を烈しく掻振つた。

「其れていゝから論文は出せよ、試驗はまア詰らなくとも兎に角受けろよ」

と寂びれた聲で林君が言つた。

「ハヽ人間なんて餘ッぽど何うかして居る。――詰らない、僕は最う何んにも言はないで誰とも話さないて默つて凝ッとして居たい」

「其れだから暫く僧房へ入つて勉強しろよ、そして創作はやれよ」

「僧房か、創作か、フヽ、僕は車夫にでも生れて來ると善かつたんだ！」

二人の話は斯んなことて午になつた。林君がいくら進めても敏郞は午飯を御馳走にならなかつた。

H孃——敏郎は美しい氣高い彼の女の面影を思ひ出した、が其は敏郎が求めて得られる人ではなかつた、愛と要求が人よりも幾倍も强烈であるだけ、身の累や缺點や過去の醜惡な記憶が幾倍も〳〵悲しく思はれた。

「あゝ詰らない、僕はもう何んにも解らない處へ行きたい！」と荒々しく叫んだ。

「僕もさうだ、何んにも解らない處へ行きたい、今は何をする氣にもなれない、もう飯を食ふさへ厭だ！」と言つて林君は箸を投げるやうに膳の上に置いた、そして立上つて身を搖振りはじめた。

「何んにも解らない處へ行きたいか、ハヽ寧そ死ねばいゝぢやないか、何故かう人間の感情は虛僞を言ひたがるのだらう？」

敏郎も立上つて頭を振始めたが、林君の身を搖つて居るのを見て直ぐに其を止めた。そして「馬鹿々々しい」と呟きながらまた亂暴に坐つた、そして最う一本のビールの口を拔いた。林君に默つて獨りでグイ〳〵呑んだ。

「これから君の保證人の處へ行つて見やうぢやないか」

「僕はそんなことは何うだつて關はない」

敏郎は殘りのコップを呑み干した。

「試驗のことで非常に君を心配して居るから」

「僕の保證人は偉いよ」

林君は激して來た敏郎の顏を見て寂しく笑つた。

敏郎は「一ケ月ほど前に保證人から聞いた養子の話を思ひ出した、——學校の近所で、女は善し、金も

二三萬はある、母と二人暮して貸家も十二三軒持つて居る――敏郎はまた醉ふた頭を烈しく搖振つた。

「早く學校を出て僕は僧房へ入りたい」

其れから敏郎の保證人のところへ行くと定めて二人は下宿を出た。敏郎は酒て顏が赤いのてH孃の店の前を通ることを避けた、横町を自ら擇んて前に立つてズン〳〵歩いて行つた。とバッタリ蝙蝠傘をさして來るH孃と顏を合せた、一寸會釋してH孃は其のまゝ行き過ぎてしまつた。敏郎は林君と二人てH孃と遭つたことを非常に心配した。H孃の當惑したやうな心配したやうな顏を見て、彼れは最う凝として歩いて居られなかつた。彼れはポストの前へ來ると早速端書を買つて「あのことに就ては何事をも口外せぬ故御安心下され度候」と書いてH孃に出した。

H孃のことに就ては其の日は少しも二人の口から話されなかつた。

八

敏郎の出した端書の返事が直ぐにH孃から來た、端書て。

御端書拜見致し候　あのことは別に心配いたし候はず　御配慮ありがたく存上候學校の試驗は御受けあそばすよう願入候　雨は降れどすが〳〵しく今朝も嬉しく候

これ丈て別に何も書いてないが敏郎は嬉しく思つた。敏郎は直ぐにまたH孃へ書いた、手紙て少し長く書いた。

其の返書が二三日してからてあつた。

たゞ今あなたが御大切の御ひげを御落し遊ばしたと伺ひましたから早速御いはひ申上げます
御いはひしてわるうございましたら御ゆるし遊ばせ　五月十九日朝

これ文は別な紙へ筆て、あとはペンで書いてある。

先日は御手紙をお送り下され有りがたうございました、早速御返事をかきましたけれど出しますことはやめました、いろ／＼書きましたことがいけませんでしたからでございます、其の後今日まで延引いたし失禮でございました。

先日參上いたしていろ／＼お話伺ひましてから毎日のやうにあゝ云ふことを伺ひたいと存じますけれども伺ひかねてをります、お宅はあなたお一人でございませんから上りにくうございますの、あの歸りみち御一所に歩きながら私はあなたが何の爲に何うして御考へになるのか、うたがつて見ました、そして御研究の爲にわたくし共の想はれない御煩悶が起つて來るのだらうかと思ひました、そしてあなたが子供が出來ないのが原因だとおつしやつたのでなほわからなくなりました、私にはそういふことはよくわかりませんからでせう、それでも出來るかも知れませんと思はれますから、

論文ももう御出來遊ばしたとか試驗も御うけになるそうで○○さまか大變よろこんで御話してございました、實は私が先日端書を出します前に、○○さんが私に原稿紙を持つて御宅へ上つて試驗をおうけになるように申上げて呉れとお御仰せて御座いましたけれども御ことわりいたしました、變なことを申ますけれどもあなたのことでも○○さんからお頼まれして其の通り働くのがいやなのでございます、私は私、○○さんは○○さんだと何時でもそう思ひまして何事にも反抗したくなりますのです、

あの時もその前からあなたに手紙をかいて試驗のことを申上げたいと思つてをりましたのですけ

れど、〇〇さんが右のようにおつしやいました爲に止めてしまひました、そして端書て申上げて失禮てございました、こんな事申上げたらいやな女だとお思ひ下さいませうが事實は事實としてお笑ひ下さいませ。

拜借した白夜集は二ッ三ッ讀みたくなくて止めましたが、あとは皆拜見いたしました、ありがたうございました、いづれ御返しに上りたう存じます。

先日途中てあなたと〇〇さんとお目にかゝりました時、私は心配さうに見えましたそうですね、いゝえ心配してはをりませんてした、うそてはございません、たゝね、驚きましたのてす、あの時は一口には云はれませんけど先に御訪問いたしました後て急にお二人にお目にかゝつたのてすから變な氣持がいたしました丈、それとあなたが御酒をめし上つた許りのお顔てしたから、また何か御煩悶が有つて〇〇さんの處へいらしつたのかしらと思ひました、すまして居まして濟みませんてした、〇〇さんがいらしつたからてございます、あの方のお顔を見ては笑へませんのてす、あなたが何うしてあの方と御親友なのてせう、(これ丈は棒を引いて消してある)何か書いてやるとおつしやつたので樂しみてございます、成る可く早く他のものをお終りになつて書いて頂きたうございます、

〇〇さんと私との事は雜記にも關係をつけてお書き下さいますな、お願ひてございます、

何を書いても皆消したくなつて、こんな切れ〳〵な紙になつてしまひました、

もういら〳〵して何にも書けませんてせう、朝からかゝつて今四時すぎました、其の間机に向つてこればかり書いてをりました、もう六時間餘になります、ホヽをかしいてせう。

其の間に髮を結ひました、昨日下町で小間物店へ入つていろ〳〵な根がけを見ました、あまり同じ根がけばかりたくさん買つたものですから、お友達がHさん式だつて笑ひました、お友達はあちらもこちらもまぜて幾種類も買ふ方なのです、私は今日袋をあけて私も友達のようにすればよかつたと思ひました、ホヽヽ、

日本がみが好きで三味線が好きで、私は學校できらはれました、今でも私は三味線が比較的上手だと思ひます、それでも私より上手な友達が一人ありますから、やつぱり自慢が出來ません、私は皆より一番何事にも劣つて居ると思つて心から口惜しくてしかたがございません、

あなたのようにお考へになるとお身體がます〳〵いけませんでせう、お大切に呑氣にしていらしつたらいかゞでせう、○○さんは呑氣な方ですよ、私はそう思ひますの、

此の間裏の畑でもつと雨が降つたらどうでせう、私はあなたがお傘がなかつたから、きつとこまたでせう、そう心配しながら實は歩いてをりましたのですよ、何か書いて頂いたら何んなによろこびませう、

私に少し書けるようにしていたゞけませんか、少してよろしいのです、たゞお話をもつと伺つたら少しはわかるかと思ひますの、

これでもう止めませう

五月十六日午後

H

敏郎樣

御許に

敏郎は此の前の端書を机の引出から取り出して、此の手紙と一所にワーヅワースの詩集の中へ挿んで本箱の中へ入れた。

が其の本箱にお峰と一所に生活した時、茶簞笥の代りにして味噌や醬油の德利まで入れたことを思ひ出して、彼れは忽ち絶望の溜息を吐いた、そして硝子戸を開け始めたがまた荒々しく其を閉めて、彼れは机の前へ來て力なく坐りながら其の上に腕を組んで頭を埋めた。

九

散歩から歸つて來て、ランプをつけて、Ｅ孃へ書かうとすると、不意に林君がやつて來たので敏郎は厭な思ひをした。

「僕は今手紙を書かうとして居たところなんだ」と敏郎の聲は少し荒々しかつた。

「其れぢや來て惡いことをしたね、君僕が來て惡かつたのか？　其れぢやい〻」

かう言ふ丁重なやうな、人を馬鹿にしたやうな言方をするのが林君の癖で敏郎はマス〱厭な氣持ちになつた。

「惡けれや僕は歸る」

「いやさう云ふ譯ぢやない」

かうは云つたが、敏郎は胸がむかついて擲りつけてやりたいと思つた。

「論文はもう書いてしまつたのか、君」

敏郎は何とも云はずに、机の上から二十四五枚ほどの原稿を取つて彼れの前に置いた。

林君は默つてしばらく其を見て居た。

Upon the moon I fixed my eye,
All over the wide lea;
With quickning pace my horse drew nigh
Those paths so dear to me.

And now we reached the orchard-plot;
And, as we climbed the hill,
The sinking moon to Lucy's cot
Came near, and neared still.

In one of those sweet dreams I slept,
Kind Nature's gentlest boon!
And all the while my eyes I kept
On the descending moon.

My horse moved on: hoof after hoof
He raised, and never stopped:
When down behind the cottage roof,
At once, the bright moon dropped.

What fond and wayward thought will slide

Into a Lover's head!

'O mercy,' to myself I cried,

彼れは最う堪らなくなつて本箱からワーヅワースの詩集を持つて來た。

「僕はワーヅワースが一番好きだ、子供に憬れたワーヅワースの心は美しいぢやないか、夢のやうな時代、子供――』――今は美しいH孃――彼れの眼は美しく輝いた。

"Strange fits of passion have I known:"

彼れは高々と朗み上げた。

"And I will dare to tell,

"But in the Lover's ear alone,"

彼れは一層聲に力を入れた、後の句を二度三度四度繰返して机の上を強く叩いた。最う林君等は念頭にない。

"What once to me befell.

When she I loved looked every day.
Fresh as a rose in June,
I to her cottage bent my way,
Beneath an evening moon.

「これぢや君の自己がさつはり出て居ないぢやないか」

かう云つて林君は原稿を疊の上に置いて敏郎の顔を見た。

「僕には自己を出すほどまだ力がない、僕はまだ論文を書くやうな柄ぢやないんだ」

敏郎の瞼はピク／＼痙攣るほど林君の言葉が痛に解つた。失戀したやうな元氣のない林君の顏を見ると、『女に弾かれるなんて要するに意氣地なしさ』彼れは腹の中でから冷笑しない譯に行かなかつた。「同情？　馬鹿げた言葉ぢやないか、同情つて愛だ」

冷やかな笑が二三度敏郎の腹の中を這廻つた。敏郎は烈しく手を鳴した。

「何だ、君？　今夜は僕は何も要らないぞ」

「何も取りやしないよ、菓子だけだ」

「菓子も要らないよ」

「いや僕が食いたいんだ」

――あゝH孃ならば――敏郎はその細い美しい手を取つて握りしめるやうな手付をした。

'If Lucy should be dead;'"

「いゝぢやないか、實に美しいぢやないか」から云ひながら輝く眼を閉ぢて敏郎は遠い物音でも聞くやうな風をした。"hoof after hoof he raised, and never stopped." 彼れは幾度もこの句を繰返した。最う林君には構はず、敏郎は酒にても醉うたやうな調子で最後の stanza を繰返し／＼朗んだ。

林君は全く元氣がなかつた。敏郎は一層荒々しくなつた。

歸る時に林君は敏郎の文藝百科辭書を借りた。英文學の試驗の代りにロマンチシズムと云ふ題で何か書いて出す必要からてあつた。

『君、二三行て澤山だよ、ロマンチシズムは自由に憧るゝ思想なり、これて最う澤山ぢやないか、馬

し」

「敏郎がかう皮肉に云ふと、林君はたゞ笑つて居た。

敏郎はまた面倒臭いと思つたが林君を送つて外へ出た。空は白い雲で斑に曇つて、月の光りは一層其を白くして見せた。

町の瓦斯燈が白く濁つた往來の水蒸氣の中にぼんやりして見えた。其の中から漏れる人々の聲が堪らなく懷かしいほど敏郎の耳に喜ばしく聞えた。青いガスの光りで照り輝いて居る湯屋の障子や高いガラス窓の中には、熱い水蒸氣に曇つた人の聲や流しの音が一所になつて沸き立つ肉の香りが敏郎の胸を波立たせた。

『今度は皆美しい、喜ばしい』

H孃を思ひながら彼れは浮き立つた調子で言つた。湯屋の流湯はなだらかな坂に沿ふた細い溝の中をゴボ〳〵流れ落ちた。敏郎は寂びた聲で話す元氣のない林君の話を避けて、絕えずH孃のことを考へながら足下を流れ落ちる懷しげな水音に耳を傾けた。

『H孃に手紙を書かなければならない！』

かう思ふと彼れは最う林君とぶら〳〵歩いて居られなくなつた。直ぐに彼れは別れて引返した。

白い斑らな雲の間を靜かに動く月の色は笑つて居るとしか思はれない、敏郎はH孃を思ひながら凝と月の面を眺め入つた、彼れの唇は自づと笑ひ綻びた。

彼れはまたワーヅワースの詩を唄ひ出した。唄ひながら彼れは急いで自分の室へ歸つてペンを取つた。

が彼れはしばらく書くと失望したやうに溜息を吐いて、直きに書いたものをズタ〳〵に引き裂いてし

まつた。インキとペンと原稿紙――これは林君が卒業論文を書けと云つて彼れに持つて來て呉れたのだ。

彼れは忌々しさうに舌打してインキとペンを机の下へ投げ棄てゝ原稿紙を悉く引き裂いてしまつた。

此度は別な原稿紙へ鉛筆で書いた、が其も直ぐ氣が食はなかつたので引き裂いてしまつた。

彼れの顏は急に熱して來た。

彼れは忽ち自分の着て居る襦袢の襟を見て火のやうに顏を赤くして怒つた。先達林君の下宿へ行つた時に着て來た林君の襦袢を彼れはまだ着て居たのだ。敏郎は腹立たしく立上つて其を脱ぎ棄てゝしまつた。

改めて彼れは机に向つた。

しばらく考へて用紙にする紙を搜した。遂に彼れは昨日まで懷ろへ入れて居つた小形のノートを本箱の中から取り出して中から書き殘しの餘白を四五枚裂き取つた。彼れは其へ鉛筆でかいた。

時々机の前の緣側へ置くカナリヤが寂しがるのだらう、箱をコト〳〵させては細い聲で哀れつぽく泣いた。

彼れは一時まで書いた。

『――あなたと二人限りで世間を離れた靜かな場所、荒川の土手か玉川邊で、永久に破壞されざる貴い美しい一日を作りたいと思ふが叶へて呉れますか』

これを最後の句にして彼れは筆を措いた。其から彼れは靜かに前の椽側の戶を開けて外へ出た。雲は殆ど晴れて月は西の方に傾いて居る。蛙の聲が下の田圃から降るやうに聞える。急いで行つて彼れは手紙をポストへ入れて來た。

家の庭へ來た時、彼れは凝と傾いた月の面を眺めた、『僕は――』かう云ひながら彼れは月に縋り付くやうな手付をした。家の中へ入らうとする時彼れは最う一度月を見た。

『あゝH孃！』

中へ入る時に彼れは口の中でかう叫んだ。

十

H孃から直ぐにまた返事が來た。

夕飯を食つてから下宿屋の裏の芝生に寢轉ろんでぼんやり考へて居ると敏郎は其を下女に渡された。

彼れは其を芝生の上で讀んだ。中の日付が五月二十二三日としてあるので二日に渡つて書いたもので隨分長い手紙であつた。

　敏郎は三度も四度も讀んだ、暗くなつて字が見えなくなるまで。

敏郎は自分の室へ歸つてランプをつけて最う一度手紙を見た、そして丁寧に其を肉色の封筒の中へ入れて机の上へ置いた、彼れは封筒にかいた美しい字から眼を放さない。

　酢い甘い花の香を封じた春の風の樣なものが絶えず敏郎の頭の中を軟かに吹いて通つた。――『今よそから歸りました、丁度頭にぼんやりした月をいたゞいた頃お茶の水で友達に別れましたの』――『私は忍ずの池畔を歩きながら、あなたの事を友達に話しました、深いことは私もよく存じません、私に映じたあなたを話して聞かせてやりたかつたからでございますの』――『もう今十一時を過ぎました、皆がやすみましたから再びペンを取りませう。昨夜はあなたが今ごろ私の爲に鉛筆をけづつて下さいました、今夜も今ごろカナリヤが泣いてあなたのお眼をさまさせるといゝと思ひます』――『こゝでは今遠いところ

て「こう〳〵」と鳥が鳴きます、なんて淋しいおそろしい聲でせう、毎夜私はおそくまで讀んでをりますから、この聲を聞きます」──「あなたのカナリヤはつがひが一羽失くなつたそうでございますねえ、かわい相なことをいたしました、私は母をつい此の間失くしました……」──「一時打ちました、頭がチーンと鳴つて居ますよ、こう山の中の日光の見えない寂しい森の中で谷の水の音を聞くような音がしますの、あれはなんでせう、どうしてあんな音が耳のそばでかすかにひゞくのでせう、今度數へて下さいましね」──「あの不愉快な聲、底に厭な光りのある眼……泣き出したい位、あゝ私はいやで〳〵たえられません、あなたにはこんなことがわかるものですか、憎らしくなりますわ、あなた迄が──」

敏郎の頭はだん〳〵茫となつて、何だかから自分の身が輕くなつて地上から浮上ると、其が一つの雲になつて高い空を漂ふて行つて、或る山奥の靜かな湖水の面を舐るやうに流れて居る心持になつた。『H孃！H孃！』と苦しいやうな嬉しいやうな切ない聲を出して呼ぶと、其には應へず湖水の面は美しい白い齒を出してニコ〳〵する。

不意に此の空想から覺めると、彼れは机の上の手紙を取つて自分の唇に當てた。そして『H孃！』と言ふ聲が閃きのやうに彼れの口の中で發した。

敏郎は其れから急いで町へ行つて、インキとペンと、封筒とレターペーパーを新らしく買つて來て、十時のポストに間に合ふやうに走り書きに書いた。

それから彼れはH孃に書いてやると云つた小説のことを考へた。丁度〇〇社から短篇を頼まれて居たので、彼れは其の小説を原稿料に代へてH孃と二人で美しい一日を遊びたいと思つた。

が彼れの考へた小說の材料は皆「永久に破壞されざる貴い美しい一日」を贖ふほどの美しいものではなかつた。彼れはまた穢い過去の記憶に思ひ惱んだ。

僕はお峯を一時讃めたてはないか、三年許り前に關係したトシマにも僕はのぼせたてはないか、〇〇山の麓に小學敎員をして居た時に敎へた娘にもラブしたてはないか、そして其等は皆直ぐに覺めてしまつたのてはないか、H孃に對する戀もまた……敏郞はまた新らしい不安に責められた。

床へ入つてから何だか物に襲はれるやうな怖い氣持がしたので敏郞は起きてランプをつけた。そしてまた床へ入つた。

細いランプの光りて照された自分の室の中は怖ろしいほど氣味が惡い、本箱のガラスは嘲笑ふやうにキラ〳〵と光つた居る。

敏郞は穢い記憶て汚れた蒲團に顏を埋めた。H孃の手紙を握つて居る彼れの手は最う淚て汚れて居た。

「寺へ入らう、さうすればお峯の着物だつて美しくなるのだ」

H孃と會つたのは其を戀する爲ではなく、かゝる爲の機緣なのだらうと敏郞は思つた。が彼れの考へはマス〳〵亂れて行つた、

十一

H孃からまた直ぐに返事が來た。

今朝床の中てあなたのお手紙を渡されました、本とうに寢ざめに、あなたのお心持の通りに私のところへ着きましたのてすよ、こんなに早くいたゞいて私は嬉しく存じました、

お返事をかゝうと思ひました、チッとして他の人とは言葉を交へないて居ました、人が來て何をして

居ますと言ひましたから、考へて居ると申しました、何も用事をしないのですか、と重ねてきかれましたから、考へるのが用事だと申しました、わからない人は笑つて歸りました、うらやましい人だと私は思ひましたのですの。

書かうとすることは皆あなたにお話したくないことばかり、あなたへ書く手紙だと思ふとペンが取れないわけでせう、あなたにではない、たゞ自分が自分を告白するのだと思つてかいたらどうですかしら、やつぱりあなたがおよみになると思ふと。

どうしても書かなければなりません、

敏郎さんは私の言ふことをいやな氣持しないで聞いて下さいましね、やつぱり心持をかへないで居て下さいましね、私あなたのお顏を見ていつて居る樣で書き悄いつてないのですの、私はね、五年以來ためらつて居ました結婚を近い未來にまとめられようとしてをります、ほんとうに、なつかしい、をとめから去られなければならない、此の年までそれが厭でした、考へてばかり居ましたのですけれども、母のない女の子を持つた父が何んなに心配してをりますか、私はそれが堪へられなくて、あゝ今はほんとうに結婚する場合ではないと自分の境遇を思ひますけれども。

比較的華やかな過去を思つて私は今迷つてをります。わるい事許り毎日考へてをります、私はなぜもつと世の中を知らない、苦勞のない人間でなかつたらうと、うらめしくてなりません、いやしい心持をあなたの前で告白したら、どんなにいゝ氣持でせう。

なぜ書くのがいやなのでせう、

私は自分の好きな文學について、もつと研究の出來た過去だつたら、心をそれ一方に向けて一生一人

て居られる女だつたと思つて自惚れて居ります、一人で居ても寂しいと思はないですんだ自分だと思ひます、が皆んな思のたねになつていけませんですよ。

あなたをなつかしい方だと思ひました、あなたと代つて居たら、私は今何にも苦しまないと、うらやましくて堪りませんのですよ。

あなたのやうな筆が私にあつたらと。馬鹿だと、なまいきだと、お笑ひ下さいましても仕方がございません、ほんとうに私の思ふような結婚が出來ないからですから。

どうしても私はまだ迷ひます、そうなつてしまふまで。それでいつまで考へて居るよりは出來る丈の結婚に滿足して、そして新らしい美しい未來を作らへてよろこびたいとも思ひました。

夜になりました。つゞけて書かうと筆を取りましたら、人が來て夕方まで駄目でございましたの、おくれてすみませんでした。

今また○○さんに逢ひました、今朝の○○さんからの手紙を思つて一日その事を氣にしました、私はあまり正直に思ひ過ぎるのかも知れません。もう一度よみかへす手紙ではございませんが、あなたにお知らせしたいと思ひます。

赤い字で

あなたは私のミセスだと思ふて居る、

他の人と結婚されることと今は絶對に不承知です

又

あなたに生きあなたに死ぬる男は一生迷ふて居る　死んでも迷ふのか

黒い字て

五月九日に上げた手紙私は何時までもあの心持てす　愛されたい　あゝ戀しい　あなたが昨日仰つた事は皆不承知てす　私には堪へられません　あんな拒絶は受けつけません　私は短刀で胸を刺される氣がした　心はふるへて居る　あなたが愛してくれない　何處までもつれなくなさると私は死ぬ指環の事も私の思ふやうにさして下さい　また落着けなくなつた

愛して下さらないと私を破壞させるのてす他の男とあなたが結婚される事は私に堪へられん　その悲しい日が來ると何處かに行つてあなたに關係のない所で死んてしまう愛してくれないと言ふは私に死ねと言ふと同じてす　此の愛の成立たない折は死んで靈となつてあなたの身に寄り添ひます　どうあつても離れません　戀しい〳〵私の生命よりも貴いHさんてすもの

戀しい　なつかしい　あゝ戀しい

つまらない手紙だと私は讀みました。

昔男ありけりと（これは棒を引いて消してある）この手紙は私〇〇さんの兄樣へ送らうと思ひます。いつまでも、こういふことを續けられたら私はヒステリー的に異狀を來すと、自分の身も怖れますから。兄樣へお送りしてもよろしいてせうか、毎日いやて〳〵堪へられないのてすもの。

〇指環……のことは私に贈るとおつしやるのを、私がそんな意味深いものをいたゞいて、いつまでも思の種にするのはいやてすからとお斷りしましたのてす。

あなたのお作は永久に私をよろこばせて下さいますのてすよ、あなたはいつまでも今日のHを失はす

に見て下さることが出來ませうか、あゝそれはとてもだめてせうねえ。

あなたのお筆はあなたの熱心な態度は、ほんとうに美しいと私は思つて居ります、あなたの名はます〳〵あがりませう。

これから私はあなたの前て幾度告白することが出來るかしれません、その時に熱心なあなたのお言葉をいたゞきたいと存じます。

いつか私の結婚について、すべてをあなたにお話したいと思ひますのてすよ、過去も現在も。

此の手紙を見て、あなたがもう返事もやらないと、冷やかになつて下すつたら、私はどんなに失望するてせう。私はあなたを何うしても先生のように思はれます、何てもお話して何ても意見をのべて下さる。かあいがつて下さる先生だと思ひます、敏郎さんとは言ひづらいのです。むしろ先生と呼べたら、その方が。それても其は本意ぢやない。たゞ私が一人て居られないから。あなたにつらいような。そんな遠慮は馬鹿らしいわけにも思へて。

書きたい事が後からわいて今日はいくらても書けます、けれども御返事を——今日のに限つて——いたゞかなければ何にもお話することが出來ませんから。

また御返事をいそいていたゞきます、御返事をいたゞいてから、私はあなたのところへ上ります、この間拝借した御本をお返しにと云つて。

二十四日

敏郎様　　H

二十五日出

H孃の結婚問題――敏郎はこれを聞いて別に驚きはしなかつた、別に惡い氣持もしなかつた、勿論善い心持てはなかつたが。

例へH孃が自分を慕つて居るとしても、自分が其れ以上H孃を戀しく思つて居るとしても、そして一所になる事が出來たとしても彼は其を幸福であるとは思はなかつた。例へ其が此の世にない幸福であるとしても、彼れは果して自分の幸福を樂しみ得る人か何うか其を先づ疑つて見ない譯に行かなかつた。――若し自分に子が無かとつたしたら――彼れは其處に寂しい〳〵家庭を考へない譯に行かなかつた。

が若し、H孃は自分に、自分が如何に求めても得られない、可愛い子どもの聲を聞かして與れることの出來る人なんぢやないかしら……と思ふと彼れの心は狂はん許りに苦しくなつた。

H孃は結婚する、自分は放浪する、――心の底の何處かて其の悲しい放浪を望んて居るやうな自分の性格や運命を考へて見ると、彼れはまた却つてH孃の結婚を願ひもした。林君のことを思ふと猶更さう云ふ心持になつた。

が是等は凡て敏郎の本意てはなかつた。是等は彼れの心の一部の瞬間の閃きに過ぎない。彼れは是等以外の、眞實の奥底の自分の聲を聞きたいと思つた。が其を聞かうとすればするほど、彼れは重い深い泥沼のやうな中て苦しみ悶え喘へがざるを得なかつた。

敏郎は忙いて書いたH孃への手紙を、ポストへ入れに行つた歸路をさま〳〵な思ひに惱まされた。町の瓦斯燈の光りは堪へ難い程彼れの心を悲しませた。往來の中て立止つて彼れは折り〳〵溜息を洩した。

下宿屋の庭ては大勢てガヤ〳〵彗星を見ながらのゝしり合つて居る。彼れは其を聞くと門口から引返して畑の方へ歩いて行つた。彼れは西の方の空に、ぼんやりした、丁度薄い探海燈の照返しのやうな、

黄ッぽい長い尾を曳いたハリー彗星を見た。尾は彼れの頭の上の處まで來て居るほどに長かつた。

敏郎は麥畑の小道に屈んで西の方の空を凝と見詰めた。彗星の周圍にある幾多の星は遠い〱空の奧で絶えず此の世の秘密を地上の人間に私語ぐやうにしばたゝいて居る。——人間等に解るものか——とせゝら笑ふやうにも思はれた。彼れは長い〱尾を曳いて何處までも〱際しのない無限の空を走つて行く彗星の運命を考へて見た、そしてその尾の後を追いて自分もさう言ふ運命になつて見たいとも思つた。

あと一週間たつと此の彗星も見えなくなるのだ、そして最う一生見られないのだ、永久の別れになるのだ、彼れはさう思ひながら、彗星の尾の光りを瞬きもせずに見入つた。が其の尾の光りも地上の人間の爲にではなく天から天へ走つて消えて居るのであつた。敏郎の眼からは熱い涙が止度もなく流れ落ちた。

十二

敏郎は昨夜の手紙には別に何も書かなかつた。手紙を讀んだ時彼れの心は顫へて居たし、筆を取つて居る間も彼れの指の顫は止まなかつた。其の時の感じは一言や二言では誌せなかつた、とても筆の先では言ひ現はせなかつた。其故彼れは手紙へは筆には言ひ盡せないからと言つて、會つて早く話したい、とたゞこれだけ言つてやつた。

其に添へて、

僕はあなたの思つて居る通りの敏郎だ、あなたの心にあるだけの敏郎が即ち僕の運命であり、あなたと僕の交捗なのだ、——僕の心にもあなたはある、が其は僕の運命を左右するほどの力のあ

るものではない、――あゝ僕は全くあなたの思つて居る通りの敏郎なんだ。と書いた、が玆だけは棒を引いて消した、元より讀み得るだけの程度に。そして

「この手紙がつくと直ぐ、明日の朝早く、

僕の寢て居る中に來て貰ひたい。」

と書き添へた。

翌朝敏郎は八時に眼覺めた、が彼れは起きやうとはしなかつた。H孃の來るまでかうして寢て居やうと思つた。H孃の聲で呼び覺まして貰ひたいと思つて、彼れは枕をかへて眠らうとつとめた。が最う胸が動悸して眠ることは出來なかつた、寢て居るさへも苦痛になつた。彼れはとう〳〵寢て居られないで起きてしまつた。

一日待つた、がH孃は來なかつた。

彼れは昨夜出した手紙のことを心配した。あれがH孃の心にさへて――と思つて彼れは手紙を出したことを口惜しがつた。

これきりでH孃と自分との交りが絶たれてしまふのだらうか、彼れは其を考へると息もつけないほど苦しく思つた。

彼れは其の夜は何もする氣にもなれなかつた。原稿を書くのも苦痛だ、書物も見たくなかつた。H孃へまた出す考で手紙を書き始まつたが、思ふやうなことは一行だつて書けはしなかつた。彼れは絶望したやうな溜息を幾度も吐いた。彼れはたゞ眠り度いと思つて、早くから床を敷いて寢た。

が、その眠ることさへ出來なかつた、彼れは一夜苦しみ悶えながら何を思ふとなし考へた。朝になつ

て一寸眠つて彼れは烈しく寢汗をかいた。

八時頃敏郎は床の中で且[illegible]からの見慣れた肉色の封筒を受け取つた時には涙を流して嬉しく思つた。

彼れは床の中で其を讀んだ。

今日はさぞ御待ち下さいましたでせう、午后に參上いたしたいと存じまして、止むを得ぬ用事の爲、弟をよそへ出しましたら四時まで歸りませんでしたものですから。あしからず。

明日はなるべく上りたいと存じましたら、大變いそぎのしごとが出來ました、一時間でもひまをこしらへて一寸上る丈でも上りたいと存じて居ります、

かき始め下さいました小說はきつとお見せ下さいますでせう、あなたは論文を早くお書き終へ下さいまし、私氣になつてしかたがございません、

他人行儀をしてすみませんでした、私の思つた通りの敏郎さんだと思つて、もう何もつまらないこと考へるのは止めました。

〇〇さんはあれから二度お手紙を下さいました、兄さんには秘密にしてと、おつしやるのです、けど、試驗もおやめになつたさうです、こまりました。あなたには何も御心配かけたくないと思ひまして、

何にも御依賴いたしません。

あなたは今日よく御勉强下さいませ、

御試驗がすみましたら私はあなたといろ〳〵お話しをいたします、あなたが御勉强なさいませんのなら、少しの間手紙もやめたいと思ひます。

御勉强なさらなければいやてす。

御勉强を大切なものと思つて下さらなければ(これだけ棒を引いて消してある)一生けんめい申上げますよ、

くどいようですが、私が思つて居りますから。

早く學校をお卒業なさいませんては自由にお作をなさる事が出來ません。

今彗星を見ました、よく見えますこと、あなたもきつと見ていらつしやるてせうと思ひました、

私は此のごろあなたに手紙を書く他何にもしませんのてすよ、

明日ははじめて仕事を致します、いやてたまりませんけれども。

あなたも私のするように御試驗の御勉强がおいやてせうか、心配てございますの、どうか明日上りたいと思ひますけれども、上れませんてしたら手紙をまた、

御からだがおよわ相て氣になります、

充血したお眼はあまり夜更しをなさるからてせう、もつと御自愛遊ばしてはいかゞてせう、

カナリヤは——

下宿の人に笑はれるようて參り憎うございます、明日午后一時半ごろ私のゆきます方へ御散歩下さいまし、

本道を參ります、あなたに歸りに連れて來ていたゞいた道はもう忘れましたから。あの交番の方へ參ります。

もし私が參りませんてしたら(このあとの半分は殆と讀めないやうに消してあるが)私の家の方へ

いらしてもよろしいてせう。

あなたに無駄足をさせてまたいら〳〵させますね――どういたしませう、あなたにお委せしませう、私は道てあなたを見なければ、あなたのお家へ參ればよろしいのです。

五月二十六日后九時

其れから敏郎は床を疊んで、湯殿へ行つて身をすつかり淸水て洗つた。そして早くH孃を迎に行く時間の來るのを待つた。

十三

一時になると最う敏郎は下宿を出て行つた。

何處まで行つてもH孃とは會はなかつた、彼れは最う直ぐ不安な思ひに驅られたが、其でも今日は彼の女の來ることを信じた、强いてもさう信じやうとした。

彼れは金魚店の前へ立つたり、古本店の前へ立つたりして、堪へ難いほどいら〳〵する時間を少しづゝ費やした。車の音がすると彼れは其の方へ振り返つた。若い女の姿を幾人も幾度も彼れは見送つた。やがて紫色の洋傘をさした女が向ふに見えた時に彼れは胸をとゞろかした、が其が馬鹿〳〵しいほど身の肥つた踵の大きい女だつた時に、彼れは地だんだを踏むほど其を忌々しく思つた。

其の間に彼れは不意に林君と出會ひはしないかと云ふことを怖れて居た。

敏郎はとう〳〵H孃の家のそばまで行つてしまつた。そして或る繪端書屋の店の前に立つて居ると間もなくH孃が來た。

二人は道の兩側を離れ〳〵に步いた。

敏郎は幾人か知つて居る書生に會つた。かうして賑やかな通りを出過ぎて、急に田舍びた道へ入ると、敏郎は後から來るＨ孃を待つて一所に並んで歩いた。

が話は別になかつた。

「會つて見ると矢張り何にも話がないんだね」

「さうねえ」

こんなことゝて、後になると皆忘れてしまふやうなこと許り話しながら歩いた。

今日のＨ孃の顏は此の前よりも肉がついて丸みを帶びたやうに敏郎は思つた。此の前會つた時のＨ孃の顏は、もつと細面に色が白く、さえ〴〵して見えた、そして美しかつたが、何となく冷靜なＨ孃の態度が彼れの前に現はれて居て、其の爲に敏郎は二人で話して居てもしば〳〵自分の思を妨げられた。が今日は其が一つもない、今日のＨ孃の顏は何處となく曇つて弛みを帶びて居るやうに見える。眼も何だか斯う美しい幻でも追ふて居るやうで、此の前會つた時に敏郎の話をうつし撮らうとしたやうな聽しい鏡のやうな冷靜な眼ではなかつた。

「この前のＨ孃の肉は固かつた、今日は軟らかい！」

敏郎は今日のＨ孃を何れだけか懷かしく思つた。

「あなたの顏は今日はこの前のやうにさえ〴〵して居ませんね」

「えゝ私風を引きましたの」

が敏郎は其のせいだとは思はなかつた。

「この前より肥りましたよ」

「さうですか」

H嬢は敏郎のこの言葉を別に怪しみもせずに聞いた。

着物もこの前着て來たのは格子縞の袷で意氣てはあつたが、何となく男と言ふものをせゝら笑つて居るやうな色だつた、今思つて見るとあの時のH嬢は何だか他々しかつた。

今日はまるて異ふ——敏郎は今日のH嬢の着て來た匂やかな肌ざわりの好ささうな單衣を見て、本當に美しく懐かしく、心から幾度もさう思つた。

敏郎の下宿の側へ來た頃H嬢はフト思ひ出したやうに、

「私珠數は厭てす」

「あゝ最うい〻、僕の方でも作らへて貰ひたくない」

そして二人は色づいた麥を一所に見た。

道を歩きながらH嬢の結婚のことは二人の口からついぞ出なかつた、敏郎の下宿へ來てからも其のことは一つも話されなかつた。

H嬢の方でも其れを話すのを避けて居るやうであるし、敏郎も其れを聞くことも好まなかつた。

敏郎は多く文藝上の話をしたH嬢は熱心に其れを聞いた、が時に別なことを考へて居て其れを聞き漏らすやうな風にも見えることがあつた。

お茶を出す時敏郎はまたお峰のことを思ひ出した、彼れは自分の毎日使つて居る湯呑をH嬢にやつて呑んで貰つたが其れても好い氣持はしなかつた、其と對になる小さい方の湯呑——お峰の使つて居た——

―は本箱の引出しの中に入れてある。敏郎はまたＨ孃と自分との間を引き離されてしまつたことを悲しんだ。今Ｈ孃の座つて居る白い毛布はお峰と二人で寢る時に上敷にさへしたことがあるのではないか！

「小說をお書きになつて？」

とＨ孃に尋ねられて、彼れは動悸する胸を打ち沈めやうとした。

「書くには書いたが――」

から無理に勢よく言つて、彼れは小說の原稿を机の上から取つてＨ孃に渡した。

「皆穢い經驗許りて僕はあなたに見せるやうなものは何うしても其から書けませんてした、仕方なく自分の幼時の折のことを書いたのてす、無論小說にはなつて居ません」と言つて敏郎は彼れの幼時のことをざつと話した。

「私何より嬉しい」

と原稿の紙を返しながら言つた。

林君は二人の口から善くは話されなかつた。「蛇のやうに誰からも憎まれるものもあるんだ」と敏郎は斯んなことを言つた。が彼れは林君を痛ましいと思つた。

「先達ね、父が大變私を怒りましたの、もう店へ出ることはならないつて」Ｈ孃は胸を抑へながら苦しさうな聲で言つた、「何ても十一時時分に父が他から歸つて來ると、林さんが帶をだらりとさしてブラブラ歩いて居るのを見たのてすつて、――私思ひ出してもぞッとしますわ」

敏郎は默つて深く考へ込んだ。

「然し考へるとお氣の毒――てすねえ」

と低い聲になつた。

『あゝ私もう何處か遠い處へ行つてしまひたいと思ひますの』と原稿を胸の處へ持つて行つた。

敏郎は深い溜息をついた。

『私獨身で居たいと思ひますけど如何でせう？』と溜息交りに言つて、H嬢は心配さうな敏郎の顏を覗いた。

『獨身は駄目ですよ』

『駄目でせうか』

其れきり暫く話がなかつた。

敏郎は今年卒業する文科生のアルバムを本箱から出して來た。

『まだ誰にも見せないでしまつて置いたのです』

H嬢は黑い革表紙の寫眞帖を敏郎の手から受け取つた。

『僕の顏をクラスの人が寫眞と言ふよりも寧ろ繪のやうに撮れて居ると言ひますよ、はつきり撮つたと言ふ意味でせう』

H嬢は一寸敏郎の顏を見てまた寫眞帖に眼を注いだ。

『この顏のお方、私の家の前をよく通りますよ』こんなことを言ひながら紙を返して居たが、敏郎の寫眞のところへ來ると其れを善くも見ないで手早く別な紙を折返へした。

『人間は皆んなかうなつて死んでしまふんですね』

とH嬢の顏を見ながら哀れつぽい聲で言つた。

カナリヤの聲を聞いてＨ孃はフイと室を立つて椽側へ出た。

「まア可愛いこと！　巻てすわねえ、私が飼つて居たのもこれと同じでした」そしてしばらく箱の前に坐つて見て居た。

敏郎が求めてもＨ孃は散歩に出ることを好まなかつた。

Ｈ孃は風呂敷を解いて先達持つて行つた『白夜集』と其に百枚許りの原稿紙を敏郎の机の上に置いた。そして別な小説を彼れに求めた。「運命」と「ゴリキー集」を擇つてＨ孃は風呂敷に包んだ。

Ｈ孃は細い美しい指を折りながら、

「今日はあなたと話しはしめてから丁度四時間ですわ！」とさも滿足したやうに言つた。「この前の倍ですね」敏郎も嬉しかつた。「私小説を書いて頂いて何より！」

敏郎の顔を見たＨ孃の眼は輝いて居た。

Ｈ孃は歸る時に手眞似をしてカナリヤに別れを言つた。

外は風が冷たかつた、初の中は敏郎はブル／＼震へて居た、が直ぐに風に慣れると寒さを覺えなくなつた。

途中で白い布を被せて擔いて來る棺に出會つた。敏郎もＨ孃も變な氣持かした。が敏郎は直ぐに其れを善く見やうと思つて努めた。

「葬式に出會ふと善いことがあると言ふのは何う言ふ譯からだらう」

とか彼れはＨ孃に聞いて見た。がＨ孃は其れには答へやうともしなかつた、敏郎はまた其れを甚く心配した。

「其の人の罪惡や缺點が死人と一所に土にして貰へると言ふ意味てないかしら」

しばらく考へてから敏郎はかう言つた。

「きつとさうてすわ！」

今迄默つて居た日孃も敏郎の意味深い言葉を聞いて力強く言つた。

「其れに違へない！」

この時の敏郎の眼は世の中を美しいと思つて見た。

敏郎は日孃を途中まて送つて歸りながら、また彼の女の曇つたやうな弛んだやうな顏を思ひ出した。

「何故だらう？」彼れはわざ〳〵この問を發して自ら意中に答を得て頷いた。

薄暗くなつた夕べの通りを歸つて來る敏郎の心は絕えず美しい喜ばしいことを考へた。

カナリヤが急に甚く瘦れて元氣がなくなつた、が敏郎は其れを餘り痛ましいとも思はなかつた。

翌朝彼れはお峰を夢に見て眼が覺めた。

十四

敏郎は下宿がへをしやうと思つた。

が下宿屋の拂の方が餘ほどとゞこほつて居るので其は出來なかつた。が彼れは最早や今の自分の室に凝として居ることは堪へられなかつた。

丁度昨日の夕方勝手に近い室の人が引越して行つて空いて居るので、彼れは其の室へ引移ることに極めた。試驗の準備に要る丈の外は何んにも持たないて直ぐに其へ引移つた。

本箱からはたゞ日孃の手紙て脹れて居るワーヅワースの詩集だけを出して持つて行つた。先達國の母

から送つて遣した新らしい單衣を着て、坐蒲團も敷かずに彼れは新らしい室に下宿屋から借りた机を据えて坐つた。

『もう何んにも要るものか、冬來れば凍えるまで』彼れは固く心に決心した。

其の夜から敏郎は綿のかたい薄くなつた蒲團と枕を下宿屋から借りて寢た。枕はおびたゞしく汚れて居た。

が彼れはずつと落着いて眠ることが出來た。カナリヤは其のまゝにして椽側へ置いた。

十五

或る朝散歩から歸つて來ると敏郎は前の椽側に雜巾をかけて居る下宿屋の娘の側へ行つて、『正ちやん、明日の朝僕が畑の苺を摘んでいゝだらう?』

と優しく尋ねた。

『いけません!』と娘は脹れた顏になつて、『明日は親戚の家へ私が摘むのです』

敏郎は娘の言葉を聞いて憤とした。

『妬けてやがるんだ』と彼れは腹の中で苦く笑つた。

『構ふもんか、摘んでやれ』と思つたが、最う日孃の爲に苺を摘もうとすることに善い氣持はしなかつた、其處には厭な壓迫と不安とがあつた。

其でも彼れは其等の壓迫や不安を排斥して心に其を決心した。が夜になつて彼れは最う一度其を考へて見た、矢張り壓迫や不安を取り去つて實行するのが彼れの取るべき道だと思つた。

其て彼れは先づ鋏て爪を切つた。鉋の代りには『欺かざるの記』の入つて居た箱を直して作らへた。

其へ摘んで新らしい菓子折を持つて來て詰めやうと彼れは思つた。

夜明前に前の椽側から素足で下りて露の中を摘もうと思ひながら、敏郎は蒲團も敷かずに着のまゝ寢た。

十二時頃だつた。

と丁度時計が二時を打つのと一所に大きな物聲で彼れは眼を覺ました、はじめは吃驚して飛起きやうと思つたが、其れが直ぐに下宿屋の亭主の聲と知れたので彼れは安心した。

大きな聲で怒鳴りながら下宿屋の亭主は外へ出た、其の後から神さんが『もう遲いのに見つともないから』と心配して出る、亭主は外で子息を呼ばはりながら神さんと二人で罵りあつて居る。

敏郎は何事やらさつはり解らなかつたが、何時もの疳癪と思つて別に仲裁に起きやうとはしなかつた。

彼れは直ぐに苺のことを思ひ出して、また忌はしい不安な思に驅られた。

間もなく下宿屋の亭主が家の中へ入つて來たので、彼れは其の側へ起きて行つて事情を尋ねた。

『困つたことをした』と憤かしい顏で半分は笑ひながら火鉢の前へ座つた。下宿屋の亭主は敏郎の寢る頃歸つて來て酒を言ひつける樣子だつたが、まだ寢床も敷いてないのを見ると歸つて來て其のまゝ事情の起きたのであることが解つた。

若夫婦の寢床は隣室に敷いてあつて娘の方は外へ出て居て子息だけ寢て居る。

『あいつがまた惡いことをしやがつたのだ』と亭主はさも〳〵困つたらしく云つた。あいつと云ふのは十六の下女であると敏郎は直ぐに思つた。

寢て居た子息はこの時起きて外へ出て行つた。

其處へお神が來て、

「何ね、あれが苺を盜つて其れをしやぼん箱の中へ入れて押入の自分の着物の中へ入れて置いたのを今日お正が見つけたのですよ、これまでお客の金が失くなつて居るてせう」「あいつの家は皆手癖が善くないんだから困る」

「今夜の苺はね、尋太(子息)から妹に持つて行けと云つて貰つたのだと云つて何うしても白狀しないんてせう」

其の時下女が泣きながら家の中へ入つて來た、其の後から子息と娘も入つて來た。

下宿屋の亭主は子息にこれから下女を家へ送り屆けて來いと言つて居るが、敏郎が遲いから明日の朝にしたらいゝだらうと忠告したので兎に角さうすることになつた。

敏郎も自分の室へ歸つた。

が彼れは且孃に苺を摘むことを思つて堪へ難い不安を感じた。摘むまいか、摘もうか、彼れの心には氣持の惡い困亂が起つた。

「なアに構ふもんか、世の中は意志だ!」

から心の中て叫んて彼れははじめの決心をまげまいとした。彼れはさまざまな思ひの中から凡ての運命觀や障害者を破壞する自己の勝利の感に到達した。

がさう思つて居る中に直ぐにまた其の下から不安が頭を出して來る、彼れは絕望したやうな苦い溜息を洩した。

おまけに小强い雨が二度三度ざあと降つて來た。

「何うしたらいゝのだらう」

彼れはまた絶望したやうな苦い溜息を洩した。

彼れは遂に「摘むまい」と決心した。

が「摘みたい」と言ふ欲望は彼れの頭から取り去ることは出來なかつた。彼れはこの二つの矛盾した思想の間に挾まれて堪へ難い苦惱を覺えた。

間もなく明るくなつた。

敏郎は戸を一枚開けたなりてぼんやり庭を眺めながら私語くやうな蚊の聲と囃すやうな雨蛙の聲を聞いた。

また彼れは摘みたいと思つて苦惱を覺えた。其の日の夕方途中て白地の反物を買つて、薄暗くなつてから敏郎は且孃のところへ行つた。

店の蔭の座敷て話した。

敏郎は第一に苺のことを且孃に話した。夜明方の二つの矛盾した思想の爲に思ひ惱んだことを詳しく話した。

「が今僕は其の一方に決着することが出來ました、——僕は苺をあなたの爲に摘むことは止めました、男らしくないと言つて下さるな。

苺は摘んても摘まなくてもよかつたのてはありませんか。摘んてもいゝのてした、摘まなくともいゝのてした。僕が苺を摘もうとしたのも摘むまいとしたのも皆なあなたの爲だつたのてす。

忌はしい人や忌はしいことを怖れたのてはありません。僕はもう何物をも怖れはしません、如何なる

障害も怖れはしません。障害を避けて安全な道を取るのも、障害を壞して突進するのも皆あなたの爲でした。から決心する迄には僕は隨分惱みました」から敏郎はH孃の前で言つたが、話の中頃から彼れはまた新らしい不安を感じた。

「あなたの爲」——がH孃は本當に僕を思つてるだらうか？　其を思つて彼れの心は慄へた。

「女の前に泳ぐ眞似する」

ある人のこの短歌の句を彼れは忘れることが出來なかつた。

敏郎がH孃と話して居る間に林君が店へ買物に來た。H孃は懷かしい顔をしながら店へ出て行つた。

「ノート、ブックを見せてくれませんか」

太い低い寂びれた聲が聞えた。

しばらくしてから、

「これだけですか、他に見せて下さい」

「もう此の外には御座いませんの」

「あれを見せて呉れませんか」

「この外有るとお思になるのですか！」

H孃の聲は少し荒々しかつた。

間もなく店の前の溝板を踏む音がして林君は歸つて行つた。

「私本當に困つてしまひますの、毎日何度でもあゝして來るんですもの、まだ私の心が解らないのでせ

うか、あんな馬鹿な人はない！」

と苦しさうに胸を撫でながらＨ孃は敏郎の前に坐つた。

「あの優い聲――怖い眼――私ばかり苦しむんですわ」と優しい眼で敏郎を睨んだ。がＨ孃は絶えず胸を押へて心配さうに見えた。敏郎は室の隅に赤い裁縫中の着物を見て胸が熱くなつた、敏郎は直ぐ其を見てＨ孃の結婚を想像した。

しばらくして敏郎はモヂ〳〵しながら途中で買つて來た白地の反物を出して、

「濟みませんがこれを仕立て呉れますか」と言ひ惡さうに云つた。

「えゝ、ようございます」

とＨ孃は輕く承知してくれた。が敏郎の胸は最う眞闇であつた。

歸る時敏郎はＨ孃に煙草の火をつけて貰つた。彼れは自分の下宿へ來るまで其の火を消さなかつた、其の爲に一本殘りにすツかり吸つてしまつた。

家の中は寢たと見えて皆靜かだつた。敏郎はランプをつけて机の前に坐りながら、殘りの一本を袂から出して銜へて居た煙草の火を其に移した。

彼れは其を口に銜へながら机に身を靠せかけてＨ孃のことを考へた。

「Ｈ孃は最う結婚するのだらう」

彼れの頭は妬ましい不安を覺えて搖ぎ出した。やがて彼れは吸ひ切つた煙草の火を灰に挿して消さなければならなかつた。

十六

カナリヤがだん〳〵弱つて來た。細く瘦せた聲で泣いて居る瘦れ切つたカナリヤの聲を聞くと、急に悲しくなつて敏郎は詫びるやうにして箱の前へ行つた。

彼は寂しくカナリヤの爲に口を鳴らした。カナリヤは最う其には應へやうともしなかつた。悲しい孤獨から逃れて僕がＨ孃へ行つたので、カナリヤは最う慰めるものもない孤獨に失戀したのだらう、と敏郎は思つた。

が彼れは一ケ月前彼れの爲に孤獨を歌つて吳れたカナリヤを思ひ出さずには居られなかつた。ぼろを引き裂くやうな雀の聲に、高い空を鳴いて通る小鳥の聲に、東京の空のあわたゞしい汽笛の聲に、彼れの口笛に、自分の聲の應へを求めて狂ほしく泣き叫んだ孤獨のカナリヤを彼れは新たに強く今思はずには居られなかつた。

敏郎は新しい水をカナリヤに吳れ、悲しい思ひを抱きながら卒業論文を持つて學校へ行つた。Ｈ孃を眼の前に思ふと頭の後ろで彼れはカナリヤの聲を聞いた。

空は曇つて少し冷たかつた。

學校から歸つて來ると、カナリヤは勝手の椽側に小さい竹の籠の中に巣へ入つて動かないで居る、身が濡れて殆ど虫の息で慄へて居る。

『何うしたのですか？』

と驚いて彼れは其處に針仕事をして居るお神に尋ねた。

『何ね、箱を餘り穢くしといたので虫が沸いたのですつて、私が今一寸煎藥で身を洗つてやつたのですよ』と針の手を止めて話す。『だつてあんなに身が濡れて居ては――あゝ最う駄目だらう』

『其に今日はお天氣が善くないから一寸乾きませんね、何うせ死ぬのでせう』

と平氣で言つて居る。

敏郎は甚く氣を惡くした。彼れは直ぐ濡れて慄へて居るカナリヤを籠の中から出して長火鉢の火で暖ためてやつた。が最うカナリヤは虫の息しかつかなかつた。ほくろのやうな可愛らしい眼も動かす力がなかつた。

カナリヤの身を下から火で暖ためながら、彼れは自分の暖ためた手で上からまた其を暖ためてやつた。

『また敏郎さんの芝居がはじまつた』

と冷やかしながら娘やら宿の連中がドヤ〳〵敏郎の周圍へ集まつて來た。敏郎は憤かしい顏をして默つて居た。

皆直ぐに其處を去り、お神も出て行つた。

『生きかへつて呉れろ』と敏郎は口の中で賴むやうに云つたが。カナリヤは最う生きかへりさうになかつた。

『カナリヤの代りに僕の孤獨に泣く時が來たのだらう』悲しい思が絶えず敏郎の心を往來した。

時々カナリヤは小さい口を開いた。

敏郎は其の毎口を鳴らしてやつた。

不意に濡れた羽を動かしたので敏郎は大丈夫生きかへると思つた。カナリヤはまた羽を動かして小さ

い口を開いた。敏郎はカナリヤの口に自分の口を當てゝ唾を入れてやつた。

カナリヤは忽ち喜ばしさうに口を動かした、そしてほくろのやうな眼でさも嬉しさうに敏郎の眼を見た。

敏郎は嬉しかつた。

が同時にカナリヤは死んだ。

敏郎の心は不意に電氣にても觸れたやうに慄へた。

「汚れた唇――」

と微かに呟く溜息が彼れの口から漏れた。

（をはり）



鈴蟲

上司小劍

（一）

『祖父さんが來る』

お繼は朝から斯う云つて、來る時刻を母に問ひなぞした。

母は五月蠅さうにして、

『夕方だよ』と背後も向かずに、佛壇の燈明皿や鶴の首の形をした燭臺を磨いてゐた。白い粉が水に溶けて、模樣のやうに土間を流れ出した。

『嘘だ。祖父さんなんか來るもんか、疾くに死んだんぢやないか』

兄の四郎は書籍や草履や、學校行の支度を調へながら斯う云つて、下駄を足につッかけるなり駈け出した。

「四郎坊や、傘を持つてお出て」
母が汚れた手を中段に擴げて、格子先きまで追つて出た時は四郎の姿がもう路次の中に見えなかつた。
「阿母さん、祖父さんが來るはねえ」とお繼は丹波酸漿の種を穿り出してゐた。
「繼ちやん、遊ばないか」格子先きに可愛い聲が聞えた。
「厭やよ、道ちやんと遊ぶと叱られるから」
「繼ちやん、そんなことを云はないて、道ちやんとお遊び、喧嘩しないやうにしてね」
母は周章てた狀て斯う云つて、お道に知れないやうにお繼を睨んだ。
「芳坊ちやん、寐んね」とお道はお繼が丹波酸漿にばかり身を入れて動きさうもないので、横の方へ廻つて鐵格子の間から覗いた。
『芳坊ちやんはね、寐んねしてるよ。起きたらまた遊んでお呉れ」
母は斯う云つて、漸く磨き上げた佛壇の道具を上に運んだ。
「今夜祖父さんが來るよ……お前とこは來ないだらう」と、お繼は憎々しさうにお道に云つて、ギユ／＼と酸漿を鳴らした。
「家だつて來るよ……祖父さんが、今夜……」
「お前とこあんな汚い家、祖父さんの入る戸棚がないぢやないか」
「戸棚？　ありますよ、お父つあんが拵へましたよ。お氣の毒さま」お道は稍氣色ばんて來た。
「また喧嘩してるね。喧ましく云ふと芳坊が起きるから……」
母は佛壇を掃除した手を雜巾て拭き／＼出て來て叱つた。

「お道ッ」と疳高な聲が路次の入口から聞えて、三十恰好の襷をかけた女房が一寸顔を出して直ぐ引ッ込んだ。

「あばよ」洗ひ洒した白地の單衣の、肩のあたりに大きな模樣の目立つのを着たお道の姿が、路次を駈けて行つた。

（二）

「同じ七歳て道ちやんの能く口の廻はること、從姉妹同士でも家の繼とは大變な違ひだね」

妻は夫の方を見て、獨言のやうに斯う云つたが、帳場で筆を持つてゐた夫は、それを耳の上に挾むとツと立つて奥の六疊から續く、土の匂ひの新らしい土藏へ入つた。

盆の十三日で場末の質屋も可なり忙がしかつた。

空は稍霽れて、暑さを増して來た。風がない。

「祖父さん何時來るの」お繼はまたこれを云つて、貰ひ物の素麵の束を揃へてゐる母の傍へ行つた。

「そんなにシツコク云ふと祖父さんが厭やだッて來なくなるよ」

其處へ頭髮を切り下げにした品のよいお婆さんが、大きな風呂敷包みを抱へて入つて來たので、

「お父つあん」と妻が土藏に向つて呼ぶと、續いてお繼が、

「お客さアま」と叫んだ。

脊中を圓くして土藏から出た主人は、帳場に座ると、お婆さんの持つて來た風呂敷包みを引き寄せて

今の時候には見ても暑苦しい小袖物や羽織の類を擴げたり、地質を引ッ張つてみたりした上、元の通りに疊んで、それを見やりながら、

『如何ほどお入用で……』と難かしい顔をして云つた。
『十五圓！　何うてせうな。是非それだけ欲しいんだが……』お婆さんは主人の顔を讀むやうにした。
『外樣ではないんですから、出來ますれば御用立てしたいんでございますが、當節はまことに古着の値が出ませんので……』と主人は考へ〳〵云つて、煙管を取り上げた。お婆さんも帶の間から細い煙管を取り出し、
『流しやしないよ』と急にぞんざいな調子になつて、『此處の家とは隨分久しい馴染ぢやないか……先代の健康な時から懇意にしてるんだよ。勉強してお置き、無理なこと云ふんぢやないもの』と無意識に煙管へ煙草を塡めて火を探した。
『燐寸が其處にございます』と主人は煙の出る自分の煙管の吸口で、上り口の方を指さして、『全く絹物には困りますんて、お求めになつた時のお値段をお考へになりますと、丸てお話になりません』夥しく煙を吐いて、咳を一つした。痩せた顔の大きな眼がギヨロリと光つてゐる。
『ぢやア幾ら』
『精一杯のところを申し上げまして、八圓……それでお氣に召さなければや、他を一つお聞きなすつて……』
『そんな水臭いことを云ふもんぢやないよ……他にこんな商賣の家を知るもんかね。眞逆の時は此處一軒が賴りだものね』とお婆さんは稍暫く考へて、
『せめて丁度にしてお吳れなね。それならいゝだらう』
いろ〳〵說き付けた上、到頭九圓に折れ合つて、お婆さんは受け取つた汚い紙幣の數を改め、細く折

つて毛糸の巾着に入れたのを帯の間に挾みながら、漸く心に餘裕が出來たと云ふやうな顏をして、色の新らしい店の壁やら天井やら、奥の土藏の扉やら、鍵の手になつた間の一坪あまりの空地を泉水にして苔の蒸した岩の間を、眼の覺めるやうな色の金魚の浮いてゐるのやらを見廻はした。

『綺麗に普請が出來ましたね。毎も夜來るので能く氣が付かなかつたが、全く手の込んだ普請だね』

『いゝえ』と主人は帳面を弄つてゐたが、好きな普請の話には動かされ易くて、筆を持つたまゝ自分にも方々を見廻しつゝ、

『二室と土藏切りでございますから、住居にいたしますには少しお狹いんですが、私どもの商賣では家が固定資本になりまして、廣いとそれだけ税が餘計かゝりますので……』と側の壁の新らしい汚點らしいものを指で撫でやうとして、それが黑い蝶のベッたりと羽を擴げてゐたのであつたのに、微かな笑ひを漏した。

『祖父さんが來た……祖父さんが來た、これが祖父さんだよ』とお繼が手を泥塗れにして、裏口から入つて來て、父に酷く似た大きな眼を光らしながら、黑い蝶々を追ふた。

『家は狹い方がいゝよ、廣いと親類から厄介者が轉げ込んで來たり、歸る客も泊つてくやうなことになるからね』お婆さんは尻を落ち付けて話し込まうとした。

『全くでございますよ』妻は、折柄目を覺して乳汁を求めた嬰兒を抱きながら出て來て、

『宅なんぞはあなた、隨分親類が多ございまして、いろ／＼のことを申してまゐりますものですから』と胸をはだけて店先きに坐つた。

主人はお喋舌りのお婆さんを妻に引き渡したと云ふやうな顏をして、また帳面を弄くり出した。

「繼ちやん、遊ばないか」とお道はまた格子先きに來てゐた。

「入口の菅井さんのお子だね」お婆さんは、急がしさうに續けて煙草を吸ひながら、格子の外の子供の顏を見た。お道は汚れた白地の單衣を涼しさうな袖無しに着更へてゐた。

「さうでございますよ」と妻はお道の方を向いて、『道ちやんお入り』と優しく云つた。

「いゝんですね。從姉妹同士でね」

「從姉妹でも妙に仲が惡いんでござんしてね。あゝやつて初めは誘いにまゐりましても、直ぐ喧嘩いたしまして困ります。其の癖長屋の子供達とは仲よく遊ぶのでございますがね。子供にも矢張り合ひ性と云ふものがあると見えます」

「困つたね、それは。同じ從姉妹でも本家と分家だから、兄弟のやうにしなけりやならんのに」

斯う云ひ〳〵、お婆さんは煙管を收めて腰を上げたが、格子戸を開けると、思ひ出したやうに、

「あの家……古い家は何うしたね」と生垣の向ふに見える棟の高い藁葺の家を指さした。

「あの通り閉めてございますが、住つて下さる方があつたら借さうと申して居りますから、若しかまた堅い人がございましたらお世話を願ひます」

「空家にしとくと損むからね。店賃は…………」

「七圓てす」

左の杉の生垣、右に長屋の連てつゞいた路次の中を、お婆さんと子を抱いた妻とが、こんなことを云ひながら、ぶら〳〵歩いてゐた。

お婆さんが「紙屑ひろひ入るべからず」と書いた路次口を出ると、妻は其處に立つて、黑の帷子の四

角張つた後妻を見送つてゐたが、折柄米かし桶を抱へて出て來た入口の分家の妻――夫の嫂――の襷妻と顏を見合はして、莞爾笑ひつゝ「お暑くなりました」なぞと挨拶をし合つた。

（三）

「今日は……」と氣の拔けたやうな聲を出して、出入りの魚屋の來たのは正午前であつた。

「魚屋さんも盆は賣れまいね」妻は暑さうにして、烟る竈を火吹竹で吹いてゐた。

「前の家はもう借り人がありましたか」魚屋は荷を下して汗を拭き〳〵、井戸端へ行つて釣瓶から水を飮んだが、

「まだないよ」妻の火吹竹を投り出して云ふのを聞くと、

「この上に居る岡村の旦那が借りたいッて云ふんですが、堅い人だからいゝてせう。私に室取りなんか聞いたんだが、私も能く知らんので、見て來て上げますと云つといたんだ……戸締りは開いてますかね、私が見て好さゝうだッたら、旦那か奥樣が見に來るてせう」と、汚れた手拭ひて口の廻りを撫てなから云つた。

「岡村ッて、何する人」

「旦那は瓦斯會社へ勤めてるんてさア」

「瓦斯屋さんならいゝやね。家も一つ瓦斯を引かうかな……瓦斯の明りは品物を良く見せるから可かんて云ふけど」

「裸火にしとけやいゝんてす。白熱にすると借し過ぎますさア」

こんなことを云ひながら、鍵を持つた妻が先きに立つて生垣を廻り、藁葺の家の臺所口から入つた。

汚れた疊の濕つぽい臭ひが、プンと鼻を衝いて、破れかゝつた白のズックの靴を脱いで上にあがつた魚屋は、じめ〳〵と足の裏が濡れるやうに覺えた。何處も此處も黴臭い。

妻が雨戸を一枚繰ると、光線に驚いた壁の蜘蛛が滑り落ちるやうに逃げた。

「隱居が去年まで此處で寐て居たつけがなア」

魚屋は感慨の深さうな聲で斯う云つた。

「手のかゝる病人でなア。寐たッきり二年と云ふもの腰が立たないで亡なつたのだもの」妻は小ひさな聲をして厭やアな顏になつた。

「けんども隱居は、しッかりしてたからな、吉藏ぢやア家の身上を潰すッて、兄貴に分家さして弟に跡取らしたんだもの、家の旦那は弟に生れながら運のいゝ人だが、全く隱居の眼鏡が合つたからな」

魚屋が憚りもない高聲で云ふのを、妻は苦々しく聞いてゐたが、八疊の床の間の前に寐たッきり、解りにくい言葉で小言ばかり云つた隱居を、分家の姉さん――夫の娘――と更りあつて介抱した時の狀がまざ〳〵と浮んだ。

「家の旦那は弟でも旦那〳〵ッて私等も立てるが、入口の管井さんは分家でも荒物屋の亭主だもの、荒物屋と魚屋ぢやア、此方から旦那ッて立てる譯にや行かねえや」魚屋は酒でも飲んで來たやうな口調で云つた。

「隱居が地震嫌ひて、念を入れて建てたから、家は古いが普請はいゝよ。この座敷と次の室とは壁無しにして床下には太い材木が縱横に通してあるよ……御覽、魚屋さん」と妻は魚屋の心を他へ導かうとした。

「全くだ、今時の借家は二十五兩が三十兩出したつて、こんな普請はありやしない」

煤けてはゐるが長押に欄間まて付いた、手の込んだ座敷の狀を見つゝ、魚屋は斯う云つた。

「話さへ決まると直ぐ疊の表更へをさすからね」と、妻は汚れた上に塵埃の積つた疊の上を爪先き立てて緣側へ出た。

「これて疊を新らしくして障子ても貼りかへると見違へるやうになりますよ」魚屋も續いて緣側へ出たが、其處には鼠の糞が撒いたやうになつてゐた。

「少し開けといて風を入れた方がいゝね」

斯う云つて妻は曲り緣を曲つて、横側の雨戸をも繰つた。其の緣先きには新建の土藏の新らしい下塗りの色がきら／＼として、おッ被さるやうに近かつた。

「隱居はこの土藏の地固めの日から病み付いたんだが、到頭出來上りを見ないて亡なつた」

「もう眞個の上塗りが殘つてるだけだが、白にするんですか、それとも黑かね」

「隱居の遺言て黑にするの」

「荒物屋さんは、先刻自轉車て出かけたが、株もこの頃は儲かるまい」魚屋はつく／＼と土藏を眺めつゝ、また入口の管井の惡口を始めた。

四郎が學校からの歸りに、オイ／＼泣きながら路次口を入つて來たので、二人は話を止めて生垣越しに其の方を見た。

「健ちやんが石をぶつけた」と四郎も生垣越しに、眼を押へた指の間から母の姿を見て訴へるやうに云つた。

「嘘だよ小母さん、四郞さんが先き石ぶつけたんだよ」四郞よりは稍大きい健三と云ふ分家の息子が、學校歸りの姿で四郞の後から駈けて來て辯疏した。

「お前が惡いんだ。お前は三年生だらう、三年生が一年生をいぢめると云ふことがあるかい」魚屋が健三を睨み付けて鋭く云ふと、

「なあに兩方で惡いんだよ、從兄弟だもの仲好くしなけりやいけない」と妻は氣の拔けた聲で、健三を宥めた。

「魚屋さん、魚が腐るよ」長屋の女房はこんなことを云つて、笑ひながら生垣の外を通つた。魚屋は漸く氣が付いた風で、急ぎ足に生垣を廻つて、荷を擔ぎ上げた。

「魚屋さん、家へ寄らないの」健三が稍機嫌を直しかけた四郞と並んで立つて斯う云ふと、魚屋は、

「寄つてもお前んとこは乃公の魚買へまい」吐き出したやうに云つて、天秤棒をギュー〳〵と鳴しつゝ裏の方から出て行つた。

「魚屋さん、あの利を入れないと流すよ」と主人が低い聲で帳場から戯ふれに云つた時は、もう魚屋の姿が拔道の土手にかゝつてゐた。

(四)

「金魚が水を飲んで仕舞つたよ」

お繼は斯う云つて、水の減つた中庭の泉水を見てゐた。主人は帳場から立つて來て、

「眞個だ。よく水を飲む金魚だね」と云ひつゝ、水が退いて乾いてゐる三和土と、殘りの水とゝもに片隅に追ひ寄せられた金魚の群とを見やつて、何處から水が漏るのかなと見究めるやうな顏をした。

お繼が戸外へ出て、主人が調べ物に土藏へ入つた時、子を負つた妻が手桶とバケツとを兩手に提げて泉水へ水を汲み込む音がした。

「道ちやんとこいはもう祖父さんが來たよ、家はまだ來ないの」お繼は事あり氣に路次口から駈け込んで來て、呼吸切れのする聲で斯う云つた。長い日も最早夕方であつた。

「さうかい、それぢやア家でもそろ〳〵祖父さんのお迎ひをしやうかな」と妻は落ち付いた狀で、麻幹などを取り出し、棚の上から塵埃だらけになつた火打石や火口を持つて來て、格子先きでパチ〳〵と門火を焚いた。母の後を附ぎ纏つてゐたお繼は、

「そら祖父さんが來る〳〵」と嬉しさうな顏をして烟の行衞を見上げた。四郎も來た、長屋の子供も二三人來た。烟つてまたパッと燃えた火は子供等の顏を赤く映した。

「健ちやんとこでは燐寸で火を付けたよ」と四郎は常に見馴れぬ火打箱を不思議さうに見た。

「燐寸ぢやア可けない、火打石でなくちやア」

母の言葉に、四郎もお繼も滿足氣な顏をした。

蠟燭に光る佛壇の前には、新らしい靈棚が設けられて、去年死んだ隱居の戒名を眞中に、茄子や小ひさな青い眞桑瓜や、いろ〳〵のものが供へられた。廉い線香の匂ひに充ちた六疊で子供たちは、

「祖父さんが來た、祖父さんが來た」と云つて、麻幹で拵へた小ひさな梯子を指で一寸突ついては、『祖父さんがこの上を渡つて來たんだ』などと妙な顏をしてゐた。

「芳坊は祖父さんを知らないのだね……祖父さんが、女だ女だと云つてたが男だッたね」妻は幼兒に頰摺りをして其處に坐つた。

（五）

夜、町へ蟲賣が來て、子供も大人もガヂャ〳〵と喧ましい荷を圍んで立つた。

『健ちゃんとこでも鈴蟲を買つたから、家でも買つとくれ』と、四郎があはたゞしく格子戸を開けて入つて來ると、其の後から、

『道ちやんとこ、鈴蟲買つた』と、お繼が云つて來た。

『虫なんぞ直き死んで仕舞つて詰らないからお廢し』主人は明るい空氣ランプの下で煙草を吸つてゐた。

『買うんだい、買うんだい』と二人の子供が何うしても聞かないので、『オイ蟲を買うんだとサ』と主人は五月蠅さうに臺所の方に聲をかけた。

『蟲？ 幾ら』

『二十二錢！』

『高いね』

妻は巾着の紐を解き〳〵、路次口に急いだ。二人の子供は先きを爭ふて其の後から駈けた。

『轉ぶよ』と妻が後を振り返へつた時は、二人がもう其の左右にゐた。

* * * * * * * *

小ひさな、纖巧に出來た籠に、二つの鈴蟲の入つたのが、軒の岐阜提燈の側にかけられて、二人の子供は其の下に耳を澄してゐたけれど、鈴蟲はなか〳〵鳴かなかつた。

入口の分家で買つた鈴蟲は、チリ、、、リン、チリ、、、リン、と能く泣いた。

『家のは泣かないよ』と二人は泣聲になつたが、父も母も『今に鳴くよ』と深く頓着して呉れなかつた。

『家のは能く鳴くよ』

『鳴くんぢやない、羽根を鳴らすんだて先生が云つたよ』

などと、分家の健三とお繼とが格子先きへ來て誇り顏て云つた。

三十分——一時間——本家の鈴蟲はまだ鳴かなかつた。お繼は待ち疲れ、失望して寢て仕舞つた。

四郎は眠いのを辛抱して、蟲籠の下に淋しく坐つてゐた。

父も母も皆出て來て、蟲籠を下して見た。黑い小ひさな蟲は羽根を窄めて籠の中を這ひ廻はつてゐた。

空氣ランプを暗くしたり、岐阜提灯を消したり、籠の中の胡瓜を新らしいのに取り換へたりしたが、

鈴蟲は鳴かなかつた。

『明日また買つてやるから』と四郎を宥めて、蚊帳の中に入れて、夫婦も其の後から戶締りをして、寢床に橫はつた。

夜の更けるに從ふて、分家の鈴蟲は、チリ、、、ン、チリ、、、ン、と續けて能く鳴いた。

夫婦は幾度か寢返へりをした。

和歌

尾上柴舟選

天野謙二郎

○

こゝろよく海はひとけりあたゝかきひるの木の間にひとみ閉づれば

風凪ぎし夕べの空の灰色はしづかに街の灯をつつむかな

夜となりぬつめたき海の青き香は風にふかれてふところに入る

めくるめくひるのひかりをこゝろよく吸ひてにほへり白き野いばら

蒸すごときにほひながるゝ七月の木の間の草の重き吐息よ

しめやかに日かげ顫へりうるほへる梢の青き葉をばくまどり

やはらかき樹の芽はうすきくれなゐににほひてかるく身をふるひをり

海の風ゆるう吹きくるひるの野にしらじらとふる淡き日のかげ

ゆるやかに胸の血潮のうごくとき夕べの草のほのににほひ來

こゝろみに眼を閉ぢてみぬあまりにもあかるきひかりながれたる野に

あまりにもしづかなるまゝかすかなる聲たてみたり青き林に

さびしさにたへぬ心はひるの野にいてゝさうびの甘き香をかぐ

○　三浦曉村

おごそかに強きひかりぞ漂へる水無月來る大海のはて

薄明り草原ひたしひそやかに夜明の窓の戸に流れきぬ

うす黃なるかげをみだしてくれがたの渚に絶えず波のひかれる

灰色に垂れしいらかに夕暮のあかり殘りて青鷺のなく

晴やかに水無月きたるおごそかにつよきひかりを空にたゝへて

うす甘く草花匂ひ風吹きておそ春の野は月夜となりぬ

春ひと夜ものなつかしみ迷ひ來し島かげに見ぬ船の灯のかげ

日は落ちぬ夕べとなりぬ靑草に交れる花のやゝにほひくる

摘みてこし野邊の草花日をとぢてわが寢る床のかげに匂へる

靑ざめし夜のともし灯ぬかるみにこぼれてさびしたちばなの花

君かへる夜の巷の明るきを見るに流るゝわが涙かな

○　　小澤紫紘

つばなの穗靑草の野にそこはかと夕づく匂ひうすら悲しも

ぐみの實のうすらしぶきをなつかしみ小鳥の如くあかずたうべぬ

うす白う月の流るゝ葉月野に草のかをりをなつかしみ吸ふ

幼兒のごとくつくばのふところにいだかれんなど思ふ夕ぐれ

いざともに行きてかなしき海をみむ若き生命の衰へぬ間に

文月朝さみどりの葉はすがしげに空にむかひてうちそよぐなり

くちなしの花にたゞよふほの明り夕ぐれはたゞ悲しかりにき

○　　飛川晶[illegible]

今日もまた暮れぬとばかり柱なるはがし暦(こよみ)を剝(は)ぐが悲しさ

紺靑(こんじやう)の空にわたらふ悲しみを吸ひて大野に物おもふかな

泣き濡(ぬ)れし眼(め)をガラス戸にひたと寄せ靑くしたたる月光を見る

やはらかき春の光にかわきゆく涙の痕(あと)のここちよきかな

この夜ふと久(ひさ)し振(ぶ)りにて聞きたりし老いたる父が歌の悲しさ

生活とたたかひつかれ酒たうべうたへる父の寂しきひとみ

○　　下村靑葩

のびのびと心のままにぬるを得るこの六疊の部

靨のうれしさ
人々にしたしみやすきあきやすき性のかなしく
さびしまる暮
いつしかに君にも倦きてたゞ一人心の孤獨悲し
がるかな
「我は我汝は汝」かく云ひてわかれし後ぞさびし
かりける
いかにして暮らさむと云ふ當も無くたゞ日を迎
へ日を迎へける
山桃の赤きが街に見えそめぬ山にのこれる友の
こひしき

○　正木哲夫

雨はれの夜空明るう月させば榛名ななめにゆく
時鳥
わが心悲しう老いぬ幼けなきころを思ふも泪せ
ぬまで
魂は天にむくろは地(つち)にかへすべく神がつくりし
冷たき世かな
あな若しちいさき筆の先にしも大天地を見しり
顔なる
さまざまの蟲とび來りともし火にぢゞとやかれ
ぬかかるかなしさ

○　若林星骨

さらさらと筧の水の流れ入る桶にあふるゝ白き
月光
春の日の甘き光を酒のごとむさぼりすひて歌ひ
つゞくる
黒檀のつくゑの上に白罌粟の一片ちりて夕とな
りぬ
巣立ちたる燕の雛とわが若き心はたえず大空を
飛ぶ
水無月のかなしきこゝろ窓によりさ青にふるふ
月光を吸ふ

○　加藤玄裳

このまゝに只このまゝに苦しさもはた悲しさも
なくて死に得ば
安らかに命死ぬるをあはれ今得ればこの儘靜に
死なまし
繼もなきうつろの胸に放たれし悲しさが燃ゆ寂
しさが燃ゆ
病もて春を葬りうら若き生を葬り今日に到れ
る

あゝ青き林のなかにこぼれたるその印象の君を拾はむ

○　岩谷莫哀

事もなく今日は暮れたり明日といふ物珍らしき時ぞ待たるれ
吾が父は人に愛され世渡に敗れて死にき吾はその子よ
今しばし眠りは來るな吾が心しづかに何か思はんとする
思ふことなきが如くも生きてありこの頃更に歌もつくらず
この幾夜泣きあかしけむ面腫れし姉の心をあざやかに讀む

○　大石秋華

高野原ほのかにけぶる草の香のたゞよふうへの三月の空
鋤きかへす畑の古土はつなつのひかりを吸ひて淡き香を吐く
なれて見し眼にも涙すくもりたる卯月の宵の遠の灯
五月來ぬ黒ずみたてる老楠の蔭はさやかに空をかぎれる

○　佐野翠坡

町角の家のガラスに電車待つつれ〴〵の顔うつしても見つ
枯れし木を培ふよりもかなしきは思へる人に思はれぬこと
雨上りあかき灯かげの流れぬる硝子の外の泪芙藍の花
夕雨の上りたる野をゆく汽車のうつくしき灯よ夏草の香よ

○　澤野白百合

はだかの木みどりせる木と立ちてある林の中にうぐひすの啼く
われ死なば海の眞中に投げ入れよわが思ふひとも海にて死にき
いつしかに胸はなごみぬ死すといふその一言を思ひいづれば
かへりみればあさましかりし來し方になみだ靜かにながれくるかな

○　鈴木重威

軒を這ふ青き葡萄の房の影晝の地に黒く映り

ぬ
細き手に頬抑へてものを言ふ君がおもわの今も
眼にあり
今日も又牧場の垣のもとに來て草苺など牛に與
へぬ

○　大場白葉

ひやびやと肌にさはる夜の床にひとり入るこそ
うらかなしけれ
名も知らぬむらさきの花白の花旅のつかれの身
にうごくなり
花の香と白粉の香とまじらへる暮春の街の風の
さびしさ

○　西内白穗

繃帶の白さをみつめ夕ぐれの色せまりたる室に
横臥す
手術臺上りてかなた女らの高き笑ひをきく冷め
たさよ
病みぬればなべての人ぞなつかしき温かき氣の
身をめぐるらし

○　大地白秋

大海はみなづきまひる鳥飛ばず涙こぼるるはま
なしの花
いひがたき我がかなしみは天地に棄てむかたな
し六月きたる
波形にうちふるへつゝ丘の上の躑躅の花に落つ
る日光

○　段谷秋洋

頬につたふ涙の味を忘れかねしみじみ人の上を
おもひぬ
いたましき刺戟に疲れいたましき刺戟に生くる
われのはかなさ
路のべの白く小さきかたばみの花に埃し夕とな
りぬ

○　日隈萩泉

茫として杜をいでたるわが瞳阿蘇の煙にしばし
むかへり
如月の阿蘇野の春はかなしかり草の嫩芽に山の
灰ふる
あはれわが十年かみなる面影を弟に見る淡きさ
びしみ

○　粟田羽衣

心地よきゴム輪俥に乗りてゆく片側町の朝の靜

けさ

君なれば君なればよと云ひたりしたはむれごとを今悔いてあり

○　　小出秀月

おのづから笑のうかびて頬にいてぬ若葉木立の森のしづけさ

うねりゆく流れの末の四五本の並ぶ櫟に青嵐する

○　　荷田重

鳥類はたゞとまり木の一と筋を輕く抱きて安く眠れり

暮れ殘る春の夕べの靄の中に君立ちてあり吾立ちてあり

○　　菊池野菊

かもめらに遙か石など投げて居ぬこの時船は沖に向へり

かのにくさこのあはれさとなりて來ぬ敗らるゝ日の近づきしかな

○　　石塚託風

頽れたる小學校の門に凭り車ひきゆく田舍人みる

静かなる夜半に眼さめて物足らず心なにやら戰きてあり

○　　眞崎白城

日の下に海は默せり野の中にわれ横臥してその色をみる

○　　平島與志美

初夏の光降りくる朝の街を白き蹕はこゝろよく行く

○　　嘉多紫濤

大海は風の影して春の日の光流れぬしづごゝろなし

○　　末吉落紅

提灯の灯にてらしゆく葉柳のぬれたる幹のつゞきたる街

○　　足立笑也

たけたかき但馬の國の桑原の梢にうなる如月の風

○　　赤松星卿

「渚より」と君に筆とる手の筋のみにくく高く見ゆる悲しみ

○　　田中紫露草

蛭藻草かけひの水のまなくうつそのかなしさのわが心うつ　佐藤飛鳥

○

我等生く時にくづるゝことすらもありといふなる大地の上に　小柳江村

○

夢もみず倦みしからだは目覺めたりぬくき朝(あした)の床のさびしさ　武田四琴

○

來れとは敢てまうさずゆくこともこひねがはずよ我は一人子

和歌原稿は東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛
中央公論歌稿と表記ありたし

俳句

旱　高田蝶衣選

麻刈れば蚯蚓皆死ぬ旱かな　蟷郎
芋の廣葉夜毎露吹く旱かな　同
野旱に唖蟲わく茅萱かな　同
苦が潮に海魚江に來る旱かな　同
出目鮎に村人旱言ひ合へる。　同
旱咲きする畑の花皆黄なり　同
草賊の蜂起も奏す旱かな　へき生
茄子にも毒な風吹く旱かな　同
夜を咲かん花も露なき旱哉　同
水車踏む目に雲燃ゆる旱かな　同
大鑑を網せしよりの旱かな　同
鍋蓋を洗ふ水さへ旱かな　嵐舟
畑場なる原七郷の旱かな　同
山東に賊の蔓る旱かな　同
旱すや皆咲き蕾す深山草　同

東明をまた旱蟲軒に飛ぶ　雨圃
屋根草の尺延び枯れし旱かな　同
庭石の光るほど焼けし旱かな　同
牧の草月にも焦げる旱かな　同
庭旱よく鳴きし蟬斃死してあり　夢筆
俚諺愚に俚謠淫なり旱村　同
墓の眼はうるむ庭草旱して　同
松籟の城趾四望や野の旱　同
灰まきて旱まけせし稗田哉　黒佛
亞麻悲し旱まけしを湧く蟲に　同
旱る野を行けば人刺す茨かな　同
河南一帶叛意仄めく旱かな　同
旱風ひりつく喉や藥仕事　風水
夢の雨は吾れのみに降る旱哉　同
麻薬摺れ火が出る音や旱風　同
掃除浪今年來ぬ島旱かな　紅夢郎
飛仙落ちて御山旱となりにけり　同
草分といふも廢寺や旱野に　同
沼供養すれば旱雲去來かな　夢吊
收歛の苛に領國の旱かな　同
夜疊に畑物いたむ旱かな　同

瓜畑に葭切の洲隣る旱かな　島川
鬪牛を旱の國に見たりけり　同
繭盛り馬嘶ける旱村　同
落日の毒吐く海やひてり雲　紫明
斷水の布令厳かに旱かな　同
廢坑の朱に夕燃す旱雲　同
妖星の晝見ゆる噂旱空　雨郎
雲の色南の國は旱るてふ　同
桶摩るは土龍除けとや旱畑　同
夏陣の盾に血凝りぬひてり雲　寒泉
下官奏す旱田の事も頻なり　同
旱天に雨あり亭の名を選ぶ　同
凹矯めし砥糞照り付く旱石　天梅
流筏の豫期に不着や旱して　同
棚の物落つも旱の板反りに　同
泥蜂の穴の壞れも旱かな　喝々
旱田の水鷄は鷄になりけらし　同
半夏生に北が吹きしが旱かな　同
老儒詩に秕政を諷す旱かな　倨人
砂煙火の手とも見ゆ旱町　同
旱島鳥糞採りの舟も居て　明兮

鍛冶人の鐵延びをいふ旱哉　同
旱知らずといふ小町田の我村や　唐辛子
蚯蚓ひく蟻の弱りもひでり哉　同
二期米の旱や一期値榮えして　梧蒼樓
昨夜雨の生ひ草ならん旱朝　同
壟入るればごみ吐く貝や旱雲　狠子
鯉ねらふ池塘の蛇やひでり雲　同
蜘蛛の巣の掃ふにしげき旱かな　月精
河床に生えし旱の小草かな　同
高鞆は落ちぬ旱の花畑　白鳩生
漬麻の重石の旱小蟹寄る　同
盆石は池にひたせし旱かな　水馬
旱して竹ふき屋根の反りも見ゆ　同
御手洗の底に水無し旱鍵　蘆折
篁竹の花咲き枯るゝ旱かな　同
沼田出來榮えを畑作旱して　不寐庵
旱して養魚に流行る病かな　同
網の目とも蝕む豆の葉や旱蟲　幽堂改 勤農鳥
淺間雲は水持たぬ云ふ旱かな　同
晒し米酢造りと見ゆ庭旱　長春花
麺箱の蒸れに蟲付く旱かな　同

根切り蟲に茄子枯らされし旱哉　痩骨改 五黄
石背めて痩せたる鮎や旱年　同
逝ける僧の言疑ひし里の旱哉　四水
山寺の鼎冷たきひでりかな　同
鑿き捨てし磽确も見て野の旱　叱咤郎
山軒の旱に蔦の肥え足れる　同
腐れ木の砂となりたる旱かな　耳山
何祭る生贄通るひでり町　同
日入ればおしなべて黄に旱雲　江洲
魔經讀めば雨少しせし旱かな　同
枝枯れの延び移る幹旱かな　丁祇樓
鎌振れば火呼ぶ草あり旱年　同
水道の徒水諭告もひでり哉　卯月
蛟龍も徒らに過ぎん旱かな　摩天郎
綿屑を鳥糞かとも旱庭　翠雲
旱二十日故老が云ひし現象も　人生
やがて降らん旱も果の風が吹く　雪骨
迎水吸ひ上げ井戸の旱かな　木犀
あり無しの風も畑の旱かな　春雨
旱魃や移民てふ聲も衰へし　啃郎
旱魃や水蜜桃の珠小さき　丈貝

夜を呼ぶ穴居の民や旱空　夕影
神狐ないて旱の兆と畏れけり　寸江
青柚の旱に落つる日數かな　美川
潮聲に思ふ旱や月あかし　驟雨
兒女の磨る惡墨匂ふ旱かな　碌々
底草も四澤に見ゆる旱かな　菖村
草もなき旱の庭に雀かな●　水竹
薄荷ぬつて冷やす眼や旱雲　春草
水盤の一抹の稻もひでりかな　風車
旱魃の青顏蟲に螫されけり　十鹽
波死して不漁幾日旱雲　敬堂
濤聲に慣れて海路や旱空　燕閣
雷公が雨師連れ逃げて旱かな　翠雨改 但翠

課題

秋の聲　八月十日〆切
秋の蚊帳　九月十日〆切

規定

△應募句は淡路國假屋在高田蝶衣宛
△一人三十句以下△用紙は半紙の事

正誤

沐猴の冠に糞して蠅の去る　寒泉○

評論

皇族臣籍に入る

北白川宮輝久王殿下請ふて臣籍に入らせられ、殊に華族に列して侯爵を授けさせ玉ひ、小松輝久と稱せらる、蓋し小松宮彰仁親王殿下の寡婦に在す後室宮の猶子と爲らせられし也

我が皇室令に於ては、皇族の養嗣子を禁ぜらる、故に御子なかりし小松宮家は竟に斷絶せざるを得ず、今輝久王臣籍に入りて其の祀を繼がせらる、思ふに有栖川宮威仁親王殿下また御嗣子なし、此の由緒ある宮家も竟に斷絶せらるべき乎

條約廢棄の通告

政府は若干國を除く他の列國に對し、明年七月十四日限り通商條約を廢棄すべき旨通告したり、蓋し此の廢棄と同時に更に新條約を締結せんとする也

列國は多分少からざる讓步を爲すべく、双務對等の條約を締結せんを期待すべし、然れども彼の永代借地權の處分は如何、政府は法律を以て、外國人にも亦土地所有權を認許すべく定めたるも、永代借地權は彼等居留外人の既得權也、彼等既得權として之を頑守せば、法律上竟に奈何ともす可らず

米國との條約に於て、日本人を歐洲人と同等に待遇せしめんと亦頗ぶる難事なるべし、然れども之を對等とせずんば國家の體面を毀くるや大にして、永く後患を貽すべし

英國人が改正關税に不平なるは明らか也、而して我が外交當局及び財政當局の辨明は、畢竟三百代言的にして彼等を納得せしむるに足らず、彼等を納得せしめんには、我が國庫財政の必要已む可らざるを陳じて幾重にも彼等の承認を求むべく、而して我が國民亦成るべく同盟國の誼として英國の製品を購入するを努むべし

條約改正絶對に困難ならざるも、亦甚だ容易にはあらず、當局が奮勵し努力せんとを求めざらんと欲するも得ざる也

韓國警察權委任

韓國の警察權を擧て我れに委任するの覺書日韓兩國間に取換さる、極めて手輕に行はれたるも、其の結果は重大也

寺內統監は此の覺書交換と共に憲兵を增派し、憲兵を本として警察官を副とし、以て十三道の警察を刷新し、明石少將を其の統率者としたり、我が武力の加はるに從つて、彼れの秩序は强制的に保たるべき乎

寺內統監は十五日東京を發し、廿三日京城に入れりといふ、斯くして日韓合邦を實行するも、韓國の動搖は思ひの外小なるべし

旅順港開放

旅順港七月一日より開放せらる、吾人の豫期せし如

く、其の東港は依然として軍港たり、開放せられしは西港のみ

露國が之を領有せし時、大連の商港たるに適せざるを發見し、更に旅順西港を以て之に替んと欲し、大市街新設の計畫を立んと既に着手し初め、倘ほ西港を浚渫すると共に、其の西方を切開して船舶出入の途を啓くの計畫なりき、我が南滿州鐵道會社亦此の故智を因襲するに至らざるや否や、吾人敢て注目して之を視んと欲す

海軍擴張計畫

海軍擴張の必要は單に政黨のみならず、政府も亦之を認め、次年度よりは千五百萬圓乃至二千萬圓を之に投ずるに内決せしといふ、其の詳細は素より聞くを得ざるも、亦適宜の處置たるを失はず、非募債不增税主義を堅守し、且つ公債償還の方針を變ぜざる以上、斯くするの外に途無かるべし

商務官の設置

外務省更らに商務官を設く、領事のみにては足らざるの故ならん、以て領事の能力を察すべき乎

商科大學の設置

商業大學論の出づるや、文部省は之を帝國大學法科大學の一部に加へて商科なるものを設けたりき、而して今年の高等學校入學者中一人も商科を志願したるものあらず、商科の失敗想ふべし、而して文部當局の誤見茲に至て益々明白なりとす

生蕃討伐

臺灣總督府の生蕃討伐を企つるや、其の事業の困難なる漸く明白となれり

或は其の易きより先にせずして、彼の最も多數なるアタイヤル族中最も獰猛慓悍なるガオガン蕃を先にせしを難ずる者あり、難しと雖も事や中道にして阻廢す可らず、すれば帝國の威信に關すれば也

神戸の補缺選擧

代議士櫻井一久氏の補缺選擧七月十日を以て神戸市

に行はれ、立憲國民黨の候補者野添宗一氏三百餘票の多數を以て松方幸次郎氏に勝つ

松方氏は正義侯の息にして現に川崎造船所長たりき、其の人格、聲望、伎量、精力、識見よりいへば、野添氏は到底儔と爲すに足らず、然かも優に之を破れるは何ぞや、人情專ろ弱を扶けて强を挫くの傾あれば也

南極探險の計畫

白瀨陸軍輜重兵中尉南極探檢を企て、大に世の同情を受く

英國のスコット大佐また同じ計畫を立つ、吾人は中尉が大なる忍耐を以て成功を視んことを期待す、米國人の北極探檢を爭へるが如き醜事は斷じて之あるを思はず

一種の人道問題

工女特に製絲場の工女たること三年なれば、痛く健康を害し全く姙娠し得ざるに至ると傳ふ

果して然らば是れ一種の人道問題也、工場法設定に關するもの細かに之を調査すべきは勿論、婦人問題に注目するもの殊に之を逸す可らざる也

兩瓦斯の競爭

千代田瓦斯會社勃興し、大に東京瓦斯會社と競爭せんとす

東京の瓦斯二圓四十錢なるに對し、千代田は一圓八十錢を以て豫約を募りつゝあり、千代田が能く鐵管を布設し能く瓦斯を供給し得るに至るや否やは疑問なれども、東京が之に刺激せられて瓦斯を廉價ならしむべきや言を俟たずとす、斯くして競爭より生ずる利益を享くるは市民也、吾人は市民として此の競爭を歡迎せざらんとするも得ざるのみ

○政界逸話

△三菱の豐川良平君が男爵に叙せらるゝといふ噂さがある、益田孝君なども早くから左樣に傳へられるが今以て事實とならぬ、或は例の惣花的に實業界中にウヨウ

ロ男爵が出來上るも知れぬ、村井吉兵衛君などはイラ〳〵して氣を揉んで居るとてあらう△豊川君が立憲國民黨の兵站方であるとは、最早公然の秘密だ、斯くて國民黨は豊川君の手を透して、桂侯の物に成り易い性質を持て居る△ナニ犬養君が居ると、今や北守南進論一點張りて、盛んに海軍擴張論を遣て居るてはないか、三税廢止論などはオクビにも出さぬてないか△併しながら物に成り易いといふ、敢て斷つて置くが、既に成つたのてはない、政友會は之に反して三井系に成り易い、井上侯といふものがあるから、最も然りだ、現に政友會には三井筋の御用を大ビラに勤める人さへあるてはないか△尤も桂侯が岩下君との關係て三井と妙な仲てあるとや、後藤男が臺灣の民政長官時代や、南滿總裁時代て三井と妙な仲てあつたとは知る人ぞ知るだ、勿論三井は桂侯の向ふへ廻るとを好まぬてあらうが、國民黨の三菱に近いて居ると共に、政友會は三井とグルに成り易い△斯うして金穴と政黨と結び付く、其の結果如何、天下具眼の士以て如何と爲すだ△國民黨は海軍論て山本權兵衛伯に接近したがつて居るといふ人かある、而して政友會は頗ぶる横目を寺内陸相に使つて居るテ△桂さんが若し罷めれば、乾度寺内さんが代るよ、才槌頭の大黒様が引込んて、割栗石頭の毘沙門殿が出る、何ても七福神に縁があるから、日本の福運は大したものサ、といふ人がある△寺内さんが出たら、政友會は乾度割込んて一種の聯立内閣を作るといふ評判もある、此の節は極暑中丈けに隨分珍妙な想像をする人間が多いと見へる（以上ＸＹ生）

英國の埃及政治

ロオスエルト氏、歸米前倫敦ギルドホールに演説し、英國の埃及統治が寛裕に過ぐるを批難するや、英國々民は駭然たりき、何ぞや、英帝大葬に米國の特派大使たりし人物が、猛烈に友國の内政に容喙するは、國際的禮義に於て缺く所ありしを以て也、

然かも事實は飽く迄事實也、前統監クロマー卿退職の間際より着手せられ、新統監サー、ゴルスト就職後三年間に愈實現に至りし『埃及人に政權を附與し、歩一歩自治に近かしむ』てふ政策は今日迄の處にては確かに失敗なりと謂はざる可からず、試みに見よ、同國の富源とも見る可き棉作は、農政の缺點に基く害蟲の發生に呪はれ、衛生事務不完全となりて惡疫民間に發

生せるにあらずや、是れ猶可也、然かも隴を得て蜀を望む埃及國民黨は最近政權の附與に依りて益々勇氣を增加し、首相ブートロス殺害をも敢てして英政府に肉薄せんとするにあらざる乎

是時に當て英國は如何なる措置に出づ可き乎、外相サー、グレイは下院に於て紛々たる質問に答辨して曰く政府は現統監ゴルスト君を信任す、同時に埃及に於ける英國の權威は飽く迄之を維持し、秩序は之を保持するを期すと、所謂平凡なるも自ら今後一層嚴格なる監督を埃及に加ふるの意を明かにせり、又一般英國民も此答辨を爾かく解釋しつゝあるが如し、

然かも吾人は試みに問はんとす『事茲に至れるは果して英人の罪か、埃及人の罪か』と、

事自ら順序あり、楷梯あり、順序を無視し楷梯を無視せる政權附與は附與するものゝ罪にして附與せらるるものゝ罪にあらざる也、彼の統一黨首領、前首相バルフォル氏が今回の失敗を以て、直ちに東洋人が代議政治に不適當なる確證なりと公言し永久に埃及の代議政治を否認せんとするが如きは、是則ち己れが敎導足らざるの罪を忘れて徒らに子弟の暗愚を說く小學敎師の一類と言ふ可き也、

鎭壓主義の成否

然りと雖も、英國の埃及政治が今日を機として一變動を見んとするや盖し拒む可からず、

頃日埃及新聞法案（國民黨の言論を束縛し、排英運動を鎭壓する目的に成るもの）一旦立法參議院の否認に會したるに、政府は斷乎之を無視し、同院の意嚮に反して之を法律たらしめたるが如き其好例也、

唯憂ふ、英國の此鎭壓政策は最早や時期に失したるにあらざるかを、換言すれば一旦英國の自由政策に依りて獎勵せられたる埃及の憲政熱は、最早や其鎭壓政策に依りて制壓し得ざる程の勢力となり居るにあらざるかを

獨逸內閣移動

獨逸政界の動搖は顯著なる現象也、就中拓相デルンブルヒ、外相シエン男の辭職に至つては、是輕々に看過す可きにあらざる也、

拓相デ氏は一九〇六年、獨逸殖民省が亂脈となり、タルムステツ殖民地の腐敗言ふに忍びざる時に當り、

テル銀行重役より一躍、内閣に列したるの人、頭腦透徹、識見卓抜、就任後獨領南阿を始めとし極東の膠州に至る迄、面目を改めしめたるは世人の熟知せる所、然かも獨領南阿のダイアモンド鑛業俄然發達の運に向ひて以來、一部政客は腐敗的商人と合して、盛んに之が攻擊に力めたり、殊に今年四月中央黨領袖エルツベルゲル氏が南阿非常税賦課案を提出せるが如き、又之が爲め紛々たる論爭を惹起せるが如き、略ぼ其早晚辭職す可きを豫示せざるにもあらざりき、然かもデ氏の辭職の結果、獨逸殖民政治が實効を減じ、又々昔年の情實的基礎の上に置かる可き狀あるは、是斷じて慶賀す可き所にあらざる也、

若し其れ外相シエン男（日本の諸新聞は大抵シエン氏と書けり但し外相は昨年男爵を受けたりき）が今八月を以て愈其職を去り、駐佛大使に轉ぜんとするに至ては、蓋し一層意味ある事件ならずんばあらず、何ぞや、是獨逸の狂熱的愛國者が男の外交政策に謳歌せざる結果なれば也、

昨年二月佛獨協約成るや、獨逸は遂に摩洛哥に於ける佛國の政治的優越權を承認し、自ら經濟的利權を以て甘んじたりき、茲に於て平國論は激昂したり、昨年末より今春にかけ獨逸マンネスマン商會鑛山權問題起るや、獨逸は又アルゼシラス協約を重んじて、自國民の所謂「利權」を保護し若くは主張することを拒絕したり、是に於て平國論は再び激昂したり、思ふにシエン男の立場より見ば幾多の辯解あり、相當の理由あらん、唯だ一般國民は聰明なる理論家にあらざるを奈何、

斯くの如くにして一大臣已に去り、一大臣又去らんとす、其獨逸帝國の利益たるや否やは少焉らく措き、宰相ベートマン、ホルウエヒ君の地位は、或は却つて安固を加ふ可し、蓋し現內閣が、中央、保守諸黨の攻擊を蒙れる所以は重に兩大臣ありたるに依れり、又兩大臣は人物、技能、到底久しくホルウエヒ氏の幕僚に終る可きにあらず、言はゞ二箇の異分子なるを以て也、

クリート島屈服

七月上旬、英佛露伊、クリート政府に通牒を送つて曰く、速かに回敎徒排斥を止めよ、彼等にも希臘皇帝に臣從するの宣誓を强ゐず、之を議會に參列せしめよ、此言を容れずんば、四國は斷乎再び兵をク島に擧げん而已と、ク島遂に屈服す、

是毫も怪しむに足らざる也、然かも列强は斯る强壓手段に依りてクリート問題を解決せりと信ずるを得る乎

日英博覽賞授與

日英博覽賞授與式、七月十五日擧行せらる、本邦人の受賞者數を檢するに、名譽大賞百八十一、協贊名譽大賞三十一、名譽賞百八十七、協贊名譽賞三十八、其他金銀賞千數百に上る、以て榮とす可きに似たり

獨り疑ふ、斯くの如き榮譽を得たる我國民の出品も事實上、果して能く我が美術、藝術、文物を英國民に紹介せりと稱するを得可き乎を、近來英紙中屢々見當違ひの賞賛を見、又在倫敦日本人の通信文をして、遺憾の念を洩らさしむるもの多きは、是抑も誰れの責ぞや

佛國選擧法改正

佛國選擧法改正案の提出發表せらる、其要領は下記の如し、

一、從來小選擧區制を執りたるを廢し大選擧區制を執ること、
二、少數の利益の爲めに比例選擧法を用ゆること、
三、現在議員任期四年を六年に延長し、同時に其三分一を二年毎に改選すること、

而して政府は其理由を說明して曰く、小選擧區は議員をして地方的壓迫に服せしめ、小地方の利益を謀りて國家の財政を禍ひするの憂あり、此點に於て大選擧區制の採用必要なり、又之が採用と共に少數意見代表に便なる比例選擧法採用を可とす、次ぎに全部議員の選擧を一時に行はず、之を三回に分つ所以は、議員が選擧前の議會に於て最も選擧區民の壓迫に服する弊風あるを幾分か排除せん爲めなりと

吾人は茲に新案の得失を論せざる可し、唯だ一言指摘す可きは、其佛國共和政治が最早や充分に鞏固となりたる確證たること是也、

試みに思へ、同國が一八八九年大選擧區制を廢止したる所以は如何、是實に其繼縮が王黨若くは守僞派の利益たる爲めにはあらざりし乎、然かも今や其廢止せる所を復興せんとす、何んぞ昔日の形勢一變せるに依らざるを得む、

墨國大統領再選

墨西哥大統領ヂアス氏、六月末大統領に當選す、吾人は又々同大統領の墨西哥に於ける勢力偉大なるを驚嘆せずんばあらず、

ヂ氏齡正に八十、引き續き大統領たるもの已に三十年、坤輿邦國多しと雖も、其精力絶倫なる處、民望を收むるの久しき處何れにか之が比偶を見ん、然かも翻つて想へば是決して偶然にあらざる也、

戰亂相踵ぎ、民其緒に安んぜざりし墨西哥に、平和を齎らし、繁榮を齎らし、安心を齎らしたるは、實にヂアス氏の力なり、それ然り、何の暇かあつて亦其往々獨裁的、武斷的措置に陷るを咎めん哉。

獨帝の狡猾

米電傳へて曰く、獨帝、中米ニカラガア國に貯炭地讓與を得んと欲し、英米兩國に先つてマドリス(目下戰鬪中なる同國兩派の中の一方が大統領に推したる人)の大統領就任を承認す、米國爲めに騷然たりと、是何んぞ驚くに足る可けん哉、先きに摩洛哥變亂あるや、英佛米以下諸國に先つてマライハフキド(現摩洛哥王)の即位を承認せるも亦獨帝にはあらざりし乎、

米國の陸軍擴張論

近來一部米人間に陸軍擴張論起る、曰く、米國海軍は噸數四十三萬九千九百に上り世界強國中第二位に在り、獨佛日露を凌駕して、勢威大に振ふも、陸軍は之に反し人員僅かに八萬四千、強國中第八位に落つ、日本に比するも實に三分の一に過ぎざる也、已に斯くの如しとせば何ぞ陸軍擴張の要なしとせん哉と、

敢て問ふ、米國は多年のモンロオ主義を拋つて、陸兵を所謂オールド、ウオルドの那邊に擧げんとする乎、又那邊に之を擧ぐるの必要ありと信じつゝある乎、

日露協約と英佛

日露協約成る、淸國の慷慨家之を憂ひて曰く、滿洲蒙古亦我が物にあらざらむと、米國の新紙は之を悲んて曰く米國の滿洲發展、恐らくは之が爲に阻害せられむと、而して英獨諸新聞又之が影響を恐れて曰く、露

國は東亞を顧みるの要なきを以て、今後必らず歐洲に活動せむと、唯之を欣ぶものは英佛兩國のみ、英佛兩國が欣ぶは、欣ぶの權利もあり、何ぞや、倫敦、巴里の兩政府が裏面に於て日露の接近に盡力し、就中今回の協約成立にも與つて力ありたることは、則ち消息通の知る所なれば也、而して彼等は今後當然に歐洲に於て協約の利益に與かる可き也、（懐沙隱答）

新刊批評

▲歐米印象記

中村春雨著
春秋社發行

米國に二年、伯林に一年半、前後三年有半の在外生活の間に著者が親しく見聞せる所を書き綴れるものにして、一部は嘗て新聞雜誌等に出てたることあれども、大半は今回初めて世に公けにされたるもの也。著者の戯曲に於ける創作的技倆は未だ疑問に屬すれども演劇研究者としての著者の見識及び抱負に於ては何人も之を認めざるを得ざる所也。風景を叙し風俗を描す美文として見れば、文章疎雜にして修辭の整はざる所極めて多きも、一種の文明批評家的眼光を以て眼に入り來る總てに批判を加へたる所痛快なる所少しとせず。收むる所「太平洋航海日記」「太平洋航海別信」「加州雜記」「大陸横斷日誌」「プリンスン雜記」「紐育雜記」「太西洋航海日誌」「倫敦日記」「伯林離記」「大陸旅行日記」「歸朝日記」等なり。數十葉の挿畫は本文と相待て讀者を益する所多し（定價二圓三十錢、特價二圓）

▲新釋挿圖近松傑作全集（卷之一）

水谷不倒校註
早稻田大學出版部發行

序論として水谷不倒の「近松門左衛門傳」、饗庭篁村の「近松作の取題材料及び近松作が後におよぼせし影響」、幸田露伴の「古典の新釋につき」、島村抱月の「近松の藝術及人生」、坪内逍遥の「近松とシエークスピヤ」等近松研究の好參好となる資料及び論説を附し、本文には「傾城佛の原」「長町女腹切」「淀鯉出世瀧徳」「曾根崎心中」「心中重井筒」「心中二枚繪草紙」「丹波與作」「高野萬年草」「夕霧阿波鳴渡」「壽門松」「博多小女郎波

數十篇を收めたり。本文は四號活字總振假名附にして校正嚴密、鼇頭には叮嚀なる註評を附し、近松研究者にとつては無二の好出版也。（定價二圓三十錢特價一圓八十錢）

▲同　上（第二卷）　仝　上

本卷に收むるものは「壬生大念佛」「出世景淸」「三世相」「松風村雨束帶鑑」「兼好法師物見車」「碁盤太平記」「五十年忌歌念佛」「今宮心中」「心中刄は氷の朔日」「冥途の飛脚」「生玉心中」「心中天網島」等にして、斯くの如き好出版物の、續々續刊せらるゝは慶すべし。（定價二圓五十錢）

▲校訂 近松全集（上卷）　三木竹二、水口微陽校訂　東京　堂　發　賣

本書の特徴とする所は、原本の節附を忠實に附しあることにして、五行本にある節附は總て落ちなく之を載せたり。故に謠ひものとしての近松の淨瑠理を研究するものに取つては極めて便利也。本卷に收むる所は「天鼓」「根元曾我」「一心五戒魂」「門出八島」「凱陣八島」「盛久」「主馬判官盛久」「出纔曾我」「出世景淸」「佐々木大鑑」「源氏冷泉節」「天智天皇」「日本西王母」「松風村雨束帶鑑」「釋迦如才誕生會」「鎌田兵衞名所盃」「賴朝伊豆日記」「百日曾我」「當流小栗判官」「源氏烏帽子折」「浦島年代記」「長町女腹切」「淀鯉出世瀧德」「蟬丸」「大掛物十幅一對」「曾我五人兄弟」「大磯虎稚物語」「加古敎信七墓巡」「最明寺殿百人上﨟」等にして著作の年代によつて配列したるも用意深し、（定價二圓三十錢）

▲あだ花　森しげ女著　弘學館書店發行

鷗外夫人の小說集也。「あだ花」「波瀾」「產」「友達の結婚、パックの大臣、流產」「寫眞」「旅趾」「猩紅熱」の七篇を收む。卷頭の二篇を除いて全部一讀したるが、事實を正直に大膽に直截に描寫せる所、女とは思はれざる程也。而して最も面白きは家庭に於ける鷗外氏の洒々たる態度が活けるが如く寫されあること也。只文章には處々感服し難き箇所少からず例へば

「富子の大きい、大きい張り切れさうな腹からは、今にも產がある
かも知れない。恐ろしい事である」

「物心を覺えてから、病氣といつたら、十二の時大磯へ避暑に行つてゐる中に、輕い麻疹をしたのと、去年の春インフルエンザの念入りなのをしたばかりで、二十になる今日までおてきらしいおてき一つ出來たこともない」

などは嫌や也。「旅趾」の終りなどは實にお安くない所を見せ附けたもの哉兎に角今日の女性の作家の作物中注目すべきもの也。（定價九十錢）

▲怪　談　高濱長江譯　すみや書店發行

故小泉八雲氏の怪談十數篇を飜譯したるものにして、素より八雲氏の原文の流るゝが如き調子は充分傳へたりといふべからざるも、原著者の詩人的想像の豐かなりし面影は此篇によつても窺はる。讀みて面白し。（定價七十錢）

▲楠木正成公　秋山角剣著　光風館書店發行

著者は親しく身を中等教育に委ねたる人にして、楠公の誠忠義烈なる精神を傳へて一般國民を感奮せしめんとの目的を以て著はされたるもの也。行文時に蕪くさき文飾に過ぎて質實に乏しきを憾むも著者の目的は略ぼ達せられたるに庶幾し。（定價七十錢）

▲家庭劇 小公子
小波山人譯　名著刊行會發行

屢々有樂座に於て興行せられたる家庭劇にして、原作は彼の有名なるバーネット女史の「小公子」(若松賤子女史の翻譯あり)を劇に仕組みたるものにして、そを忠實に飜譯したるもの也、小兒よりも寧ろ大人を感化せしむるに足るの力ある作也。(定價七十錢)

▲自修論
姉河原無鳴譯補　東亞堂發行

哲學博士ジョン・トッド教授の原著を譯したるものにして原著は廣く歐米の讀書壇に歡迎せられしもの、青年子弟の立志修養に資する所少からず。(定價六十錢)

▲長廣舌
高島米峰著　丙午出版社發行

輕妙洒脫、才情才筆、讀んで極めて面白し。時に餘りに輕妙に過ぎ洒脫に過ぎて却て一種の厭味を感ぜしむる所あり、餘りに才の奔るに任せ、筆の動くに任せて、重厚篤實の氣に乏しきを憾ましむる所なきにあらねど、着眼多くは奇警、落想多くは斬新、世間を知らぬ學者などの所說より遙かに面白し。只著者が浪花節を語り、落語を談じ、講談を論じながら、義太夫の智識淺く、演劇の研究足らざるが如きは著者の辯解あるに拘らず物足らぬ心地す。南部を揚げて攝津を貶したるが如きは著者に義太夫の批評眼もあるを證したるもの、今後更らに其研究範圍を廣めんことを希望す。「葱の卵子とぢを作る記」など最も面白く、「三遊亭圓朝君の敎訓」など最も味ふべし。「生殖器と放尿器」の如きは奇を衒はんとして淺露厭ふべし。兎に角炎暑中の讀物として最も面白きもの也。(定價七十錢)

▲火宅
木下尙江著　弘學館書店發行

忌憚なくいへば木下氏の小說は餘りに理屈ぽくして藝術的價値は極めて低きもの也。著者が其主義主張を包むに、今少し苦心せる描寫と、今少し精嚴なる觀察とを以てすれば、更らに數段の面白きものを得べき也。此篇「火の柱」「良人の自白」等に比しては大いに見劣りする如く感ぜらる。(定價五十錢)

▲國事探偵
馬場弘蝶譯　昭文堂發行

ゴルギーの「スパイ」を飜譯したるものにして嘗て一度新聞に連載せられたるものなり。生れ落ちると共に不孝なる小兒が種々の辛酸を嘗めて國事探偵の群に入り、人生の事に絕望して終に鐵道往生するまでの徑路を細かく描き出せるものにして、ゴルギーの短篇の傑れたるものに比しては見劣りすれども、なかなか及び難き妙所も亦少からず。譯文は日本文としては上乘のものといひ難きを遺憾とす。(定價一圓)

▲おみよ(前篇)
水野葉舟著　光華書房發行

現代の女性を描くことに於て葉舟氏は一種獨特の手腕を有す。此篇著者最も得意なる作の一にしておみよの性格は躍然活けるが如く描かれたり。其筋の手加減を恐れての事なるべけれど、左したる長篇ならざるものを前半と後半と分ちて出版したるは惜しき心地す。速かに後篇の出版を望む。(定價四十錢)

▲迷へる巡禮詩集
細越夏村著　悠々書樓發行

新體詩六十四篇を集めたり。瑕疵は可なりに多きも、中には若々しき

詩情の掬すべきものもなきにあらず。(定價三十五錢)

▲運命之改造　堀内新泉著　東亞堂發行

人力を以て運命を開拓するの方法を說示したるものにして、處世上參考となるべきこと少からず、著者の眞摯にして讀者に忠實なる筆遣ひは、苟も眼に文字あるものをして讀みて分らぬ所なからしむる用意周到なり(定價六十錢)

▲維新百傑　堀内靜宇著　成功雜誌社發行

「國民新聞」社主催、維新志士遺墨展覽會を見て感ずる所あり、病床に於て筆を呵して著作したるものゝ由にて維新の傑士七十餘名を評傳したるものなり。文に一種の勢ありて讀んで面白し、少年子弟を發奮せしむるに足るべし。(定價五十五錢)

▲女子のふみ　與謝野晶子著　弘學館書店

年々歳々此種の著述は現はれる、そして其度毎に多少の新意は競はれ丁寧親切の度は一層加はる事だから、此書の如き又甚だ勉めたりと謂ふべきてはあるけれど、强ち其點のみて永く特色とはてきぬかとも思ふ、が本文の題目の選び方にも如何にも新しい氣の利いたもの、例へは「家舍より姉の許に」、「尼にならむといふ友に」、「猫の子を貰ひに」、「芝居より人を招く」の類が澤山あるのと、著者の詩趣ある、且つ微細に行屆いた筆致の一寸他の摸倣を許さぬものゝあるのとて、少からず讀者の興趣を誘發する事と思ふ。(正價金四十五錢)

▲史外史傳平重衡　山田美妙著　今古堂書店

正面の歷史に顯れ居らぬ事實を探つて斯くは史外史傳と名つけ、平家末路の英傑重衡の一生を寫したもの、歷史小說體に氏の暢達の筆で書き流してある一寸面白き讀物だ。(定價金壹圓參拾錢)

▲婦人の新修養　三津木春影著

米人ウイルコツク女史の原著を譯したもの、元と是れ米國に生れた婦人の爲として說かれた新處世法、新修養法ではあるが、歐米の感化の多く入り込んで居る我國の現在ては取つて以て資すべき敎訓が多量に含まれて居る。(定價金五拾錢)

▲明治富豪史　横山源之助著　易風社發行

濶達快暢の談話體文章て、明治の諸富豪の今日あるに至れる經路、其間の經營の慘憺、術策の巧妙等を精索し詳述したもの、分つて第一明治富豪史、第二富豪實族、第三海外の人の三章としてある、即ち其海外の人の如き、亦時代の眼光是より漸く海外に向つて發展を試むべきゝ新機運に迫らるゝ今日に於て、特に讀んで其膽を壯ならしむべき好讀物てある(定價金七十錢)

▲先哲遺訓座右銘全集　藤原碧水編　實業之日本社發行

本邦の英雄豪傑學者文人等の座右銘、家訓、遺誡、自警、壁書、學則、教規、辭世等を蒐錄せるものにして、本文は五號活字とし、餘白にも六號活字にて趣味ある詩歌規箴の類を掲載したるなど用意の周到を見るべし。日夕諷讀玩味して益を得ること尠少ならじ。(定價一圓)

▲世界偉人傳　編月琴月著　實業之日本社發行

收むる所「豐太閤と東照君」「ゴルトン將軍」「西郷南洲と勝海舟」「ガリバルヂー」「日蓮上人」「ワシントン」「リンコーン」「伊能忠敬」「高田屋嘉兵衞」「セシルローヅとクリユーゲル」「グラツトストーン」「ソークラテス」「ガーフキールド」「フランクリン」「劉備玄德と諸葛孔明」「鐵血宰相の側面」「江川坦庵と高島秋帆」「キヤピテン、クツク」等の評傳にして、文章稍雜駁の弊あれども普通人に分り易く、且つ面白きやうに書きこなせり。青年のよき讀物なり。(定價一圓廿錢)

▲義兄弟

綠園生著
隆文館發行

武士道小說と銘打てるものにして、藝術的價値の乏しきものなれども情に絡み義に絡みて普通の人を面白がらせる脚色は充分也。附錄「蓬萊島」亦一讀の價値あり。(定價八十錢)

▲殖民論策

江木翼著
聚精堂發行

法學協會雜誌、國家學會雜誌等に掲載せる論文八篇を蒐錄せるものにして、「英國殖民地法制概要」「南亞新憲法草案と加奈太及濠洲聯邦の憲法」「突尼斯に於ける領事裁判權撤去と韓國に於ける同問題」「韓國に於ける司法制度に就て」「委任統治と政務の一部の委託」「殖民地官吏の養成及任用」「關東州の稅關制度」「米西戰爭に就て」等何れも着實なる硏究にして、學者の參考となること少からず。(定價八十五錢)

▲母の戀

上村左川譯
國民書院發行

ドーデーの「ジヤツク」を飜譯せるものなるが、譯文は直譯に過ぎたる所と、又餘り日本流に說明したる所とありて、決して好飜譯といふべからず、又原作も今日より見れば書き方に於て時代後れの箇所頗る多きも、

全體として見る時は流石に佛國大家の一作丈けありて、人を動かす所も少からず。一般普通の讀者にとりては面白き小說の一つ也。(定價八十錢)

▲小說 只の人

識閑郁著
岡村書店發行

只すら〳〵と書き流せるものらしく、別に大したものにはあらねど、又まんざら讀まれざるにもあらず。こゝが所謂只の人が只の人を寫せる特徵なるべし。小波山人の序文にも何と序を書いてよいか困つたといふ風のあり〳〵と見えるは興あり。(定價五十錢)

▲御風小品

相馬御風著
隆文館發行

相馬御風氏の短篇及び小品三十篇ばかりを集めたるものにして、行く所として可ならざるなき才人の面影を窺ふべし。但し篇中非常に傑れたりといふべき程の見當らぬは慊らぬ心地す。(定價五十錢)

▲和譯韓非子

田岡嶺雲譯註
玄黃社藏版

偏狹なる儒家の學風の下に異端視せられ排斥せられて來た爲に、十分に後世に讀まれるには及ばなかつたけれど、其功利說法理說は蔚然として桼文學の一隅に覇を唱ふべきものだ、邦文に書き和げ、且つ註解を添へた此書は其普及に多大の助があろう。(定價金壹圓)